新制中等新國文 巻十

375.9
Mi20
資料室

41769
教科書文庫
4
810
41-1938
200030
2291

文部省檢定濟

教科書 中學校國語漢文科 / 實業學校國語科

昭和十三年二月十五日

新制中等新國文

編纂者 文學博士 三矢重松

補訂者 國學院大學教授 御歌所寄人 鳥野幸次

補訂者 文學博士 折口信夫

株式會社 文學社

資料室

375.9
M120

須磨（酒井抱一筆）

廣島大學圖書之印

広島大学
教
23892
図書

例言

一　本讀本は、國語教育が擔へる重大なる使命に鑑み、國家的精神の昂揚と、民族の自覺の上に、大いに裨益せんとするを以て、教材選擇の主眼とす。

一　本讀本は、現代文を中心とし、各時代の各種の文體に亙りてその代表的作品を網羅し、學年の程度に應じて配列を鹽梅し、以て國語常識涵養の徹底を期す。

目次（卷十）

一　中古文學の展開……芳賀矢一……四
二　大原御幸……（平家物語）……一六
三　乙若……（保元物語）……三
四　光賴卿參內……（平治物語）……四一
五　平安城……藤岡作太郎……五一
六　蓬生の月……（新古今和歌集）……六三
七　菅公の左遷……（大鏡）……六六
八　大鏡と道長時代……島津久基……七三
九　法成寺の造營……（榮華物語）……七九
一〇　須磨の秋……紫式部……八四
一一　源氏物語……五十嵐力……八九

一二　在五中將……（伊勢物語）……九八
一三　かぐや姫……（竹取物語）……一〇六
一四　古今と新古今……尾上柴舟……一一三
一五　君が千とせ……（古今和歌集）……一二一
一六　歌謠について……田邊尙雄……一二五
一七　歌の故鄕……佐佐木信綱……一三一
一八　奈良の榮……（萬葉集）……一三八
一九　萬葉時代の歌人……新保磐次……一四三
二〇　大和國原……武田祐吉……一五〇
二一　祝詞につきて……五十嵐力……一八五
二二　神武天皇の御東遷……（古事記）……一六四
二三　古典と日本精神……河野省三……一七〇
附錄　日本文學年表

廣島大學圖書之印

一　中古文學の展開

芳賀矢一

平安朝時代は支那文化の影響の次第にわが文化と融合したる時代にして、わが國特有の文化も亦次第に發展の氣運を見たる時代なりとす。いはゆる和魂・漢才の語は、實にこの時代の造語なりしなり。就中、文學上に最大の關係を有するは、假名文字の製作にして、假名文字を以て一般に國語を寫すに至りしは、清和天皇・文德天皇以後にあらんか。韻文としての和歌、散文としての物語は相前後して著しき發達をなし、平安朝の文學界を燦爛たらしめたり。

延喜の朝、始めて和歌勅撰集の擧あり。これを古今集とす。古今集は萬葉集以後の短歌を集め、尙當時の歌人の篇什を

芳賀矢一　福井縣の人。國文學者。文學博士。東京帝國大學名譽教授。國學院大學々長。昭和二年歿、年六十一。

和魂・漢才　日本固有の國民精神と、支那より傳來の學問との二つを兼ねそなへること。

假名文字の製作　片假名は奈良朝の末、平假名は平安朝の初に現はる。

延喜の朝　醍醐天皇の御代をいふ。古今集の勅撰を始めとし、三代實錄・類聚國史・新撰萬葉集・延喜格式・諸國風土記等の公にせられし時代。

古今集　第一一三頁參照。

收む。萬葉集の歌には直覺の情を歌ひ、眼前の景色を敍せるもの多し。古今集のは、俯仰感懷、人生の無常を敍し、浮世の夢の如きを說く。三十一文字の歌體としては、頗る豐富なる內容を收め得たりといはざるべからず。萬葉集は概して敍景の歌に富み、古今集には、理窟の歌多し。修辭の法も、古今に至りては進步著しく、譬喩・緣語・かけ詞等、最も巧妙に使用せらる。奈良朝と平安朝との言語の相違は、亦その歌調の相違を感ぜしむること尠なからず。萬葉集は初心なる趣ありて、簡古の味はひに富み、古今集は巧緻の境に進みて、勁健の趣なし。然り而して、自然と人生との融合は、この時代に確定せられ、春の鶯、夏の郭公、秋の蟲の音、鹿の聲、四時の景物に伴なふ禽獸も亦自ら一定し、春の花の盛りには、人生の樂しき朝を思ひ、萩の上の露には、はかなく消ゆる死の夕を悲しむ。和歌

譬喩　ある物事を說明するに、よく似たるもの、又は對比する物事を假り來ること。（例）「見渡せば柳さくらをこきまぜて都ぞ春の錦なりける」（古今集）

緣語　緣のある語を用ひて歌や文を飾ること。次の例の「き（着）つゝ」「つま（棲）」は「からころも」の緣語。（例）「からころもきつゝ馴れにしつましあればはるゝくきぬる旅をしぞ思ふ」（在原業平）

かけ詞　同じ音にて意義の異なる語を用ひ、その語に兩樣の意義を含ませるもの。前の例にて「つま」の語に「衣の棲」と「我が妻」との兩意をかけたるが如し。

和歌の約束　作歌上の條件・法則。

の約束悉くこゝに成立して、後の文學は、皆これに則るに至れり。

古今集に次ぎて撰集は後撰集にして、遺れるを拾へるものに拾遺集あり。相並びて三代集と稱す。

紀貫之は國文を以て始めて土佐日記を記し、大堰河行幸和歌序を記し、古今集の序文を作れり。かくの如きは、卽ち假名文をして漢文を併行せしむる新例を開けるものにして、貫之が功勞・見識は實にこの點に存す。

伊勢物語は和歌に就いての傳說集なり。在五中將の初冠より書起して、その今はの時の歌を以て筆を收む。すべて歌を主として、その由來・境遇を敍述せるものなり。然れども篇中の歌は萬葉集・古今六帖・新撰萬葉集中に見ゆるもの尠な

後撰集　後撰和歌集。二十卷。村上天皇の天曆五年（一六一〇）十月、大中臣能宣・清原元輔等五人をして撰ばしめ給ひしもの。萬葉集・古今集に入らざる新古の歌一三五六首を收む。

拾遺集　拾遺和歌集。二十卷。古今集・後撰集に洩れたる歌一三五一首を收む。

紀貫之　歌人。書をよくし古今集撰者の一たり。御書所預・大內記・土佐守・玄蕃頭・木工權頭に歷任し、朱雀天皇の天慶九年（一一〇六）歿。

土佐日記　一卷。紀貫之の著。

大堰河行幸和歌序　醍醐天皇の延喜五年（一五〇五）九月宇多法皇の大堰川行幸時に、貫之の其他の供奉の歌人が詠じたる和歌の序文。

古今集の序文　漢文のと國文のと二つあり。貫之先づ國文にて作りて、それに則りて紀淑望に漢文にて作らしめたるものの如し。

伊勢物語　第一〇五頁參照。

からず。或は多少その句を變更したるものあり。業平以後の作者の歌も亦加はれり。要するに人口に膾炙せる古今の名歌を基礎として、その歌の由來を說き、之に說話を附加したるものなり。

伊勢物語の後に大和物語あり。同じく歌物語にして、當時の名歌に關する說話を收め、又弘く古代の和歌傳說を收錄せり。その伊勢物語と相並びて、後の歌人に尊崇せられたるは、故ありといふべし。

歌物語は歌を主とす。もし一身のこの種々の境遇を記述すれば、卽ち日記となり、もしこの種々の境遇を總合して、脚色を加ふれば、卽ち物語となる。この種の日記の最も古きを蜻蛉（かげろふ）日記とす。日記といふ名の下には、これより先、土佐日記

在五中將　在原業平。歌人。阿保親王の第五子。陽成天皇の元慶四年歿、年五十六。（一四八五―一五四〇）

古今六帖　古今和歌六帖。十二卷。古今の名歌を六帖。二十餘題に分類して收む。撰者は紀貫之の女と傳ふ。

新撰萬葉集　二卷。平安朝初期の短歌を萬葉假名にて書き、歌毎にその意を含みし漢詩を添へしもの。菅原道眞の撰と傳ふ。

大和物語　二卷。作者不詳。

蜻蛉日記　八卷。右大將藤原道綱の母の著。

あれども、こは紀行文なり。紀行文の日記も亦歌を主とせる事、尙歌物語の性質を失はずと雖も、女流日記の如く女子の生活を記したるものにあらず。和泉式部日記はこれと比較すれば、文辭も整はざるのみならず、輕佻浮華の本性はよくその筆端にあらはれたり。紫式部日記にも抒情の文多けれども、人事の筆をまじへたる所すくなからず。物語・日記の、上流社會の人の妻として、家庭の樣を寫せるに反し、これは高家の召使として、宮仕の樣を寫せり。前者が自己の情緒をのみ筆述せるに對し、これは主家の榮華めでたきさまを寫せり。

物語の祖と稱せらるゝ竹取物語は、月中女子の傳說を骨子として、後の物語類とはその性質を異にす。うつぼ物語の主人公仲忠の父、俊蔭の事を記するや、亦印度の宗教傳說に

和泉式部日記　一卷。著者は和泉式部。

紫式部日記　二卷。紫式部が上東門院に宮仕せし時の記錄なり。

竹取物語　第一一二頁參照。

うつぼ物語　宇津保物語。二十卷。作者不詳。俊蔭・忠乞・藤原の君・嵯峨院・梅の花笠・吹上・祭の使・菊の宴・貴宮・初秋・田鶴・群鳥・藏開・國讓・樓などの篇より成る。異本多く、篇名も亦同じからず。

よりて、奇怪の談多く、仲忠の生立ち尋常ならざれども、以下は通常の搢紳・貴女等の物語となり了れり。源氏以前の物語としては、恐らく最も大部なるものなりしならん。その他の小物語に至りては、實に多數なりしなるべけれども、今傳はれるもの尠なし。落窪物語も亦源氏以前の物語にして、繼子傳說を骨子とす。かくの如き物語・册子の流行につれて、源氏物語は成れり。源氏物語はこれらの物語を大成したるものといふべく、平安朝物語の白眉として、この時代の代表的傑作と見做すを得べし。

源氏物語は紫式部の著、前後五十四帖、前半は光源氏を主人公とし、後半の十帖は薫大將を主人公とす。卷數を以ても、平安朝第一の大作たるのみならず、全篇貫通の脚色整然として紊れず。主人公を圍繞せる各種の女性の性格も明瞭に

落窪物語　四卷。作者不詳。

源氏物語　五十四卷。紫式部の作。

紫式部　藤原爲時の女。藤原宣孝に嫁す。宣孝の歿後、上東門院に仕ふ。後半の十帖　一に宇治十帖の名あり。

發揮せられ、局面の變化も亦頗る多し。平安時代の物語は宮廷を以て中心とす。源氏物語は實に平安朝の上流社會の心性を映寫し、艶美の筆能く宮廷を圍繞せる貴紳生活の面影を傳へたり。大體に於て現實にして、傳奇的ならず、うつぼ物語に比すれば、大體に於て一層現實的となり、唯佛教の因果則を認めたるのみ。源氏の大作たる所以は、その人物の描寫に於けると同じく、その自然を描ける文辭の絢爛精妙なる點に在り。人事の描寫の後には必ず自然の背景を添ふ。上古以來、人事と自然とを融合せる詩的思想は、こゝに至りて最大の發達をなせるなり。その半面は和歌の趣味にして地の文には必ず歌の景情を含めり。源氏は卽ち和歌の最も大なるものなり。後世の歌人が源氏物語を以て歌人必讀の書となしし も眞に故なきにあらず。

源氏物語の後に狹衣物語あり。源氏以後の物語として、この外に更科日記の著者、菅原孝標女の作といへる濱松中納言物語、及び藤原兼輔の作なりと稱せらるゝ堤中納言物語あり。作者に就いては皆疑ふべし。文辭・脚色ともに源氏を凌駕すること能はず。

源氏物語と相竝びて、國文の雙璧と稱へらるゝものは、清少納言の枕草子なり。清少納言は紫式部と時代を同じうし、紫式部が中宮の上東門院に仕へたる時、皇后定子の方に仕へ、その寵遇を蒙りたり。枕草子はその宮仕の時の見聞を記し、又種々の自然及び人事に關する觀察を記せるもの、著眼奇警にして、文章才氣に富むこと、その人物を想見すべきものなり。しかれども、これまた和歌との關係を離れず。平安朝

狹衣物語　四卷。大貳三位藤原賢子の作と傳ふ。源氏物語に倣ひしものにてその文を引用せるところあり。

更科日記　一卷。菅原孝標の女の作。

菅原孝標　歌人。

濱松中納言物語　四卷。みつの濱松物語ともいふ。作者不詳。

藤原兼輔　歌人。從三位中納言たり。賀茂川堤上に居るを以て堤中納言ともいふ。朱雀天皇の承平三年歿、年五十七。（一五三七―一五九三）

堤中納言物語　二卷。二種ありて、一は堤中納言兼輔の事蹟を述べしもの。一は十編の短篇物語を集錄せるものなり。

清少納言　清原元輔の女。一條天皇の皇后定子に仕ふ。

上東門院　藤原道長の女彰子。一條天皇の中宮。

枕草子　第五八頁參照。

の物語・日記が歌物語の發達といはば、この隨筆も同じく和歌と密接の關係あるものといふべし。その宮廷の事實を敍するや、尙、日記と等しきものあるは姑くいはず、自然界に對する著眼は亦歌人としての著眼なり。春秋の景色、草木・禽獸に至るまで、和歌の題目に入るものを擧げて、これを類從せしなり。山河を始め地名・物名は多く和歌によりて、その興味を聯想し來るものを擧げ、又その名稱の詩的なるもの、卽ち歌に入るべきものを擧げ來つて、その愛すべきをいへるは、全く歌人として天地・萬物を見たるなり。「うつくしきもの」「悲しきもの」「おそろしきもの」等、抽象的題目の下に、自然界のみならず、併せて人間界の各種の境遇を列擧せるも、歌の題としていづれの方面にも著眼したればなり。枕草子の妙はその隨筆たる點に在り。忽ちにして人事、忽ちにして自然、或は公事を評し、或は人物を評し、或は自己を誇り、或は皇后を褒む。その變化その錯綜、こゝに始めて全篇の妙味を成し來る。一篇の文章の妙味も亦句法の錯綜にあり。或は長句、或は短句、忽ちにして花に及び、忽ちにして小兒に移り、更に草花を點じ來り、再び人事に返り、忽ちにして今、忽ちにして昔、時と場所とを右往左往し、天地間の萬物、人事と自然とを問はず、種々雜多に、想像の至るかぎり捕捉し來る。その變化轉變の妙、卽ち人を魅するに足るなり。或事柄に執著固定せずして一時に多方面の興味を惹起すの妙機を捕へ得たる所以は、卽ちその文の輕妙洒脫の風を帶ぶる所以なり。この點に於て、後世の俳家に似たるところあり。頓智・機智を貴ぶは當時の和歌の贈遺に於ける特徵として、歌人の最も苦心せる所なり。淸少納言は才氣奔放・當意卽妙の才に富めり。その性質

最もよくこれに適したるなり。語を換へていへば、直ちにその時代の性格を代表する人物なりしなり。

平安朝時代初期の歌物語、一變して小說的物語となり、日記となり、再變して歷史物語を生ぜり。歷史物語としては、卽ち榮華物語・大鏡等あり。榮華物語は全篇四十帖、村上天皇の月の宴に始まりて紫野の卷に終るといへども、要は關白道長が一生の榮華を寫せるものなり。大鏡の藤原氏の榮華を寫すことは、全く榮華物語に等し。而も雲林院の菩提講に來り合へる大宅世繼・夏山繁樹二人の老翁の談話としてこれをしるし、まゝ傍聽者の意見を挿み、全體の構造、文學的にして、飽くまでも物語たる性質を失はず。その文、やゝ勁健にして、筆端褒貶の意を含めるは、思ふに男子の作なるべし。この

榮華物語　四十卷。世繼物語ともいふ。作者不詳。卷毎に、月宴・花山・さまざまの悅・見はてぬ夢・浦浦のわかれ・輝く藤壺・とりべ野・初花等の名を附す。

大鏡　第七二頁參照。

道長　藤原兼家の子。一條・三條・後一條の三天皇に歷仕し、攝政・關白・太政大臣に至る。後一條天皇の萬壽四年薨ず。年六十二。（一六二六―一六八七）

二書は、藤原氏時代の最後の文學として、藤原氏時代の最後の榮華を寫せるものなり。藤原氏の榮華は道長に至りて極まる。二書共に道長の盛世を寫すを主眼として、藤原氏の歷史を敍し來れるなり。

平安朝の世は平安の都の今を盛りと榮えたる時にして、上流の紳士は詩歌に、音樂に、舞踊に、風流閑雅の技を弄べり。その束帶の裾を引きて頻繁なる年中行事に仕へし態や、如何に優美なりけん。これらの面影は各種物語の上に想見すべきなり。

―（國文學歷代選）―

二　大原御幸

法皇は、文治二年の春の比、建禮門院の大原の閑居の御住居、御覽ぜまほしう思し召されけれども、二月・彌生のほどは、嵐烈しう、餘寒も未だ盡きず、峯の白雪消えやらで、谷のつららもうち解けず。かくて春過ぎ夏立つて、北祭も過ぎしかば、法皇、夜をこめて大原の奥へ御幸なる。しのびの御幸なりけれども、供奉の人々には、公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。鞍馬通の御幸なりければ、かの清原深養父が補陀落寺、小野皇太后宮の舊跡叡覽あつて、それより御輿にぞめされける。遠山にかゝる白雲は、散りにし花の形見なり。青葉に見ゆる梢には、春の名殘ぞ惜しまるゝ。頃は卯月二十日あまりの事なれば、夏草の茂みが末を分け入らせたまふに、始めた

法皇　後白河法皇。かつて建禮門院を御子として養ひ給へり。

文治二年　一八四六年。後鳥羽天皇の御代。

建禮門院　平清盛の女、德子。高倉天皇の中宮。安德天皇の御母。建保元年歿、年五十七。（一八一七—一八七三）

大原　京都府愛宕郡大原村の地。京都の北約一二粁。

北祭　賀茂別雷神社の祭。四月の中の酉の日。

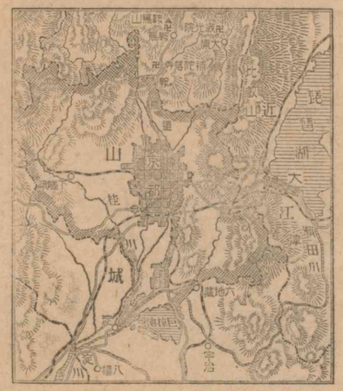
清原深養父　平安朝初期の歌人。

補陀落寺　大原の里、靜原にありしといふ。

小野皇太后宮　關白藤原敦通の女、歌子。後冷泉天皇の皇后。

る御幸なれば、御覽じなれたる方もなく人跡絶えたる程も思し召し知られてあはれなり。

西の山の麓に一宇の御堂あり。すなはち寂光院これなり。舊う造りなせる泉水・木立、由あるさまの處なり。「甍破れては霧不斷の香を燒き、とぼそ落ちては月常住の燭を挑ぐ。」とは、かやうの處をや申すべき。庭の若草茂りあひ、青柳絲を亂りつゝ、池の浮草波に漂ひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松にかゝれる藤波の、うら紫にさける色、青葉まじりの遲櫻、初花よりもめづらしく、岸の山吹さき亂れ、八重立つ雲のたえ間より、山郭公の一聲も、君のみゆきを待ちがほなり。法皇これを叡覽あつて、か



寂光院　大原村大字草生にあり。天台宗延暦寺別所。

青葉まじりの云々　「夏山の青葉まじりの遲櫻初花よりも珍らしきかな」（藤原盛房）

うぞ遊ばされける。

池水にみぎはの櫻ちりしきて
　波の花こそさかりなりけれ

舊りにける岩の絶え間より落ちくる水の音さへ、故び、由ある處なり。綠蘿の垣、翠黛の山、繪に書くとも、筆も及び難し。さて、女院の御庵室を叡覽あるに、軒には蔦・朝顏這ひかゝり、しのぶ交りの忘れ草、瓢簞屢空し、草、顏淵が巷にしげく、藜藿深く鎖せり、雨原憲が樞を濕す。」ともいひつべし。杉の葺き目もまばらにて、

挿繪　大原寂光院。（都名所圖會による）

瓢簞屢空云々　和漢朗詠集に、「瓢簞屢空、草滋ク顏淵之巷ニ、藜藿深鎖、雨濕ス原憲之樞ニ」と見ゆ。橘直幹の申文の中の句を抄出したるなり。

原憲　字は子思。孔子の門人。孔子の歿後、草澤の間に隱る。

時雨も霜もおく露も、洩る月影に爭ひて、たまるべしとも見えざりけり。後は山、前は野べ、いさゝ小笹に風さわぎ、世に立たぬ身のならひとて、うきふし茂き竹柱、都の方の言づては、間遠に結へるませ垣や、わづかに言とふものとては、峯に木傳ふ猿の聲、しづがつま木の斧の音、これらが音づれならでは、まさきのかづら・青つゞら、くる人稀なる處なり。

法皇「人やある、人やある。」と召されけれども、御いらへ申すものもなし。やゝあつて、老い衰へたる尼一人參りたり。「女院はいづくへ御幸なりぬるぞ。」と仰せければ、「この上の山へ花摘みに入らせ給ひて候ふ。」と申す。「さこそ世を厭ふ御習とはいひながら、さやうの事に仕へ奉るべき人もなきにや。御痛はしうこそ。」と仰せければ、この尼申しけるは、「五戒・十善の御果報盡きさせ給ふによつて、今かゝる御目を御覽ぜられ候

五戒　偸盜戒・邪淫戒・妄語戒・殺生戒・飲酒戒。

十善　不殺生・不偸盜・不邪淫・不妄語・不綺語・不惡口・不兩舌・不貪欲・不瞋恚・不邪見。

ふにこそ。捨身の行に、なじかは御身を惜しませ給ひ候ふべき」とぞ申しける。この尼の有様を御覽ずれば、身には絹布のわきも見えぬ物を結び集めてぞ著たりける。あの有様にても、かやうのことを申す不思議さよとおぼしめして、「抑〻汝は如何なる者ぞ。」と仰せければ、この尼さめ〴〵と泣いて、暫しは御返事にも及ばず。やゝあつて涙をおさへて「申すにつけて憚り覺え候へども、故少納言入道信西が女、阿波内侍と申すものにて候ふなり。母は紀伊二位、さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬる程思ひ知られて、今更せん方なうこそ候へ。」とて、袖を顔に押當てて、忍びあへぬさま、目も當てられず。法皇「げにも汝は阿波の内侍にてある、ござんなれ。御覽じ忘れさせ給ふぞかし。只夢とのみこそ思し召せ。」とて、御涙せきあへさせ給は

なじかは　なにかは。如何にしてか。

信西　俗名藤原通憲。鳥羽天皇以下四朝に歷仕す。平治の亂に藤原信頼の爲に殺さる。

紀伊二位　信西の妻朝子。後白河天皇の乳母。

ねば、供奉の公卿・殿上人も、不思議のこと申す尼かなと思ひたれば、ことわりにて申しけりとぞ、各〻感じあはれける。

さて、かなたを叡覽あるに、庭の千草露重く、籬に倒れかゝりつゝ、そともの小田も水越えて、鳴立つひまも見えわかず。さて、女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子をひきあけて叡覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には、五色の絲をかけられたり。左に普賢の繪像、右に善導和尚、並に先帝の御影をかけ、八軸の妙文、九帖の御疏も置かれたり。蘭麝の匂にひきかへて、香の煙ぞ立ちのぼる。さて傍を叡覽あるに、御寢所とおぼしくて、竹の御竿に、麻の御衣、紙の衾なんど懸けられたり。さしも本朝・漢土のたへなるたぐひ、數を盡くししし綾羅・錦繡の粧も、さながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させたまへば、供奉の公卿・殿上人も、まのあたり

三尊　阿彌陀如來（中央）・觀世音菩薩（左）・大勢至菩薩（右）。

中尊　阿彌陀如來。

普賢　普賢菩薩。釋迦佛の右の脇士。

善導和尚　唐の高僧。淨土の教義を鼓吹す。

八軸の妙文　法華經、八卷。

九帖の御疏　善導和尚の觀無量壽經の註釋書九卷。

見奉りしことども今のやうに覺えて、皆袖をぞしぼられける。

やゝあつて、上の山より濃き墨染の衣著たりける尼二人、岩のかけ路をつたひつゝ、おり煩ひたるさまなりけり。法皇「あれはいかなる者ぞ。」と仰せければ、老尼涙をおさへて、「花がたみ臂にかけ、岩つゝじ取具して持たせ給ひて候ふは、女院に渡らせ給ひ候ふ。つま木に蕨折添へて持ちたるは、鳥飼中納言維實が女、五條大納言國綱の養子、先帝の御乳母、大納言佐の局。」と申しもあへず泣きにけり。法皇御涙を流させたまへば、供奉の公卿・殿上人

挿繪　大原御幸繪卷の一。（下村觀山畫）

鳥飼中納言　藤原伊通の子。
五條大納言　藤原盛國の子。
大納言佐の局　平重衡の室安德天皇の乳母。

も皆袖をぞ濡されける。女院は、世を厭ふ御習といひながら、今かゝる有樣を見えまゐらせんずらむ恥かしさよ。消えも失せばやと思し召せどもかひぞなき。宵々ごとの閼伽の水むすぶ袂もしをるゝに、曉起きの袖の上、山路の露もしげくして、しぼりやかねさせ給ひけん、山へもかへらせ給はず、また御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせましましたるところに内侍の尼參りつゝ、花がたみをばたまはりけり。

「世を厭ふ御習、何か苦しう候ふべき。はや〳〵御見參あつて、還御成し參らさせ候へ。」と申されければ、女院御涙をおさへて、御庵室に入らせおはします。

「一念の窓の前には、攝取の光明を期し、十念の柴の樞には、聖衆の來邸をこそ待ちつるに、思ひの外の御幸かな。」とて、御

閼伽の水　佛に手向ける水。

一念　一度念佛を唱へること。
攝取　佛の衆生に對する慈悲の妙用。
十念　阿彌陀の名號を十たび念ずること。
聖衆　多くの佛・菩薩。

見参ありけり。やゝあつて女院涙をおさへて申させ給ひけるは、「今かゝる身になり候ふことは、一旦の歎、申すに及び候はねども、後生菩提のためには悦とおぼえ候ふなり。いつの世にも忘れ難きは先帝の御面影、忘れんとすれども忘られず、忍ばんとすれども忍ばれず。たゞ恩愛の道ほど悲しかりけることはなし。されば彼の御菩提のために、朝夕のつとめ怠ること候はず。これも然るべき善知識とおぼえ候ふ。」と申させ給へば、法皇仰せなりけるは、「人間のあだなる習、今更驚くべきには候はねども、御有様見参らせ候ふに、せん方なくこそ候へ。」とて、御涙せきあへさせ給はず。女院重ねて申させ給ひけるは、「我が身平相國の女として、天子の國母となりしかば、一天四海は皆掌のまゝなりき。されば、拜禮の春のはじめより、色々の衣がへ、佛名の年の暮、攝籙以下の大臣・公卿にもてなされし有様は、六慾・四禪の雲の上にて、八萬の諸天に圍繞せられ候ふらんやうに、百官悉く仰がぬものや候ひし。清涼・紫宸の床の上、玉の簾の内にもてなされ、春は南殿の櫻に心をとめて日を暮し、九夏・三伏の熱き日は、泉を掬んで心を慰め、秋は雲の上の月を獨り見んことを許されず、玄冬素雪の寒き夜は、裾を重ねて暖かにす。長生不老の術を願ひ、蓬萊に不死の藥を尋ねても、唯久しからん事を思へり。明けても暮れても樂しみ榮え候ひしこと、天上の果報もこれには過ぎじとこそ覺え候ひしか。さても壽永の秋の初、木曾義仲とかやに襲はれて、一門の人々、住み馴れし都をば雲居のよそに顧みて、故郷を燒野が原とうち詠め、古は名をのみ聞きし須磨より明石の浦づたひ、さすが哀れに覺えて、晝は漫々たる大海に、浪路を分けて袖を濡し、夜は洲崎の千鳥と共に

平相國　清盛のこと。相國は太政大臣・左大臣・右大臣の唐名。

佛名　年の暮に佛名經を誦して懺悔する儀。

攝籙　攝政の異稱。

南殿の櫻　左近の櫻。

壽永の秋の初　安德天皇の壽永二年（一八四三）七月。

故郷を燒野が原と云々　「ふるさとを燒野が原とかへりみて末も煙の波路をそ行く」（平經盛）

泣きあかす。浦々島々よしある處を見しかども、故郷の事をば忘られず。さても筑前の國太宰府とかやに著いて、少し心を延べしかば、維義とかやに九國の内をも追ひ出され、山野廣しといへども、立寄り休むべき處もなし。同じ秋の暮にもなりしかば、昔は九重の雲の上にて見し月を、八重の潮路に詠めつゝ、明し暮し候ひし程に、神無月の頃ほひ、清經の中將が、『都をば源氏がために攻め落され、鎭西をば維義がために追ひ出さる。網にかゝれる魚の如し。いづくへ行かば遁るべきかは、長らへ果つべき身にもあらず。』とて、海に沈み候ひし、これぞ憂き事の始にては候ひしか。波の上にて日を暮し、船の中にて夜をあかす。貢物もなければ、供御を備ふる事もなく、たま〳〵供御を備へんとすれども、水なければ參らず。大海に浮かぶといへども、潮なれば飲む事なし。これ亦餓鬼道

維義　緒方三郎。豐後國の住人。

神無月の頃ほひ　壽永二年十月。

清經　平重盛の三男。左近衞中將たり。

の苦みとこそ覺え候ひしか。かくて室山・水島二個度の軍に、勝ちしかば、一門の人々、少し色直りて見え候ひしかば、攝津の國一ノ谷とかやに城廓を構へ各〻直衣・束帶を引替へて、鐵をのべて身にまとひ、明けても暮れても、軍よばひの聲の絶ゆることもなかりしは、修羅の鬪諍、帝釋の爭も、これには過ぎじとこそ覺え候ひしか。一ノ谷を攻め落されて後、親は子におくれ、妻は夫に別る、沖に釣する舟をば敵の舟かと肝を消し、遠き松に白鷺の群れゐるを見ては、源氏の旗かと心を盡くす。かくて門司・赤間・壇浦の軍に、今日を限りと見えしかば、二位の尼泣く〳〵申し候ひしは、『此の世の有樣、今はかうと覺ゆるなり。今度の軍に男の命の生き殘らんことは、千萬が一もありがたし。たとひ又、遠きゆかりは、おのづから生き殘ることありといふとも、妾が後生弔はん事もありがたし。昔よ

室山　兵庫縣揖保郡室津村の西北の丘陵。

水島　岡山縣淺口郡柏崎村の海邊。

門司・赤間・壇浦の軍　壽永四年（一八四五）三月二十四日のこと。

二位の尼　平清盛の室、時子。建禮門院・重盛・宗盛の生母。清盛の薨後尼となり、二位に敍せらる。

り女は殺さぬ習なれば、如何にもしてながらへて、主上の御菩提を弔ひ、われが後生をも助けたまへ。』と申し候ひしを、夢の心地して覺え候ひし程に、風忽ちに吹き、浮雲厚くたなびき、つはものどもの心を迷はし、天運盡きて人の力にも及びがたし。既にかうと見えしかば、二位の尼先帝を抱き參らせて、舷に出でし時、あきれたる御有樣にて、『抑尼前、我をばいづちへ具して行かんとするぞ。』と仰せければ、二位の尼涙をはら〳〵と流して、幼き君に向ひ參らせて、『君は未だ知し召され候はずや。前世の十善戒行の御力によつて、今萬乘の主とは生れさせ給へども、惡緣に引かれて、御運既に盡きさせ給ひ候ひぬ。まず東に向はせ給ひて、伊勢大神宮を伏し拜ませおはしまし、その後西方淨土の來迎に預らんと誓はせおはしまして、御念佛候ふべし。この國は粟散邊土と申して、心

西方淨土　西方極樂淨土。

憂き境にて候ふ。あの波の底にこそ、極樂淨土と申して、めでたき都の候へ。それへ具し參らせ候ふぞ。』と、やう〳〵に慰め參らせしかば、山鳩色の御衣に、びんづら結はせ給ひて御涙におぼれ、小さう美しき御手を合はせ、先づ東に向はさせ給ひて、伊勢大神宮に御暇申させ給ひ、其の後西に向はせ給ひて、御念佛ありしかば、二位尼、先帝を抱きまゐらせて、海に沈みし有樣、目もくれ、心も消えはてて、忘れんとすれども忘られず。忍ばんとすれども忍ばれず。かくて生き殘りたる者どものをめき叫びし有樣は、叫喚・大叫喚・無間・阿鼻、焰の底の罪人も、これには過ぎじとこそ覺え候ひしか。さても武士どもの荒けなきにとらはれて、都にこそのぼり候へ。』とぞ仰せける。

びんづら　上古、男子の髮の結び方。頂の髮を左右に分け、耳のところにて揚げ卷きて結ぶ。

叫喚・大叫喚・無間・阿鼻　共に八熱地獄の中。

さる程に寂光院の鐘の聲、今日も暮れぬとうち知られ、夕陽西にかたむけば、御名殘は盡きせず思し召されけれども、御涙をおさへて還御ならせ給ひけり。女院はいつしか昔をや思し召し出ださせ給ひけん、しのびあへぬ御涙に、袖のしがらみせきあへさせ給はず、御後をはるかに御覽じおくつて、還御もやう〳〵延びさせ給へば、御庵室に入らせ給ひけり。

―（平家物語）―

還御もやう〳〵云々　還御ある法皇の御後姿も次第に遠ざかり行き給へば。

平家物語　十二卷異本多し。鎌倉時代に出でしもの、作者不詳。平家の勃興より滅亡までを記せり。後世の文藝にして平家物語より材料を取れるもの頗る多し。

三乙若

さる程に、内裏より即ち義朝を召され、藏人右少辨助長朝臣をもて仰せ下されけるは、「汝が弟どもの未だ多くあるなるを、縱令幼くとも、女子の外は皆尋ねて失ふべし。」となり。宿所に歸りて、秦野次郎を召して宣ひけるは、「餘り不便なれども、勅諚なれば力なし。母か乳母が懷きて、山林に遁げ隱れたらんはいかゞせん。六條堀河の宿所に在る當腹の四人をば賺し出して、相構へて道の程佗びしめずして、船岡にて失へ。」とぞ聞えける。延景難儀の御使かなと、心憂く思へども、主命なれば力なし、涙を袖に收めつゝ、泣く泣く輿を舁かせて、彼の宿所へぞ赴きける。母上は折ふし物詣での間なり。公達は皆おはしけり。兄をば乙若とて十三、次は龜若とて十一、鶴若

義朝　源爲義の長子。左馬頭。下野守。

秦野次郎　名は延景。

母　内記大夫行遠の女。

六條堀河　六條通と堀河との交叉するところ。

船岡　今の京都市上京區北大路の南、千本通の東にある一丘。

は九つ、天王は七つなり。此の人々延景を見つけて、嬉しげにこそありけれ。

秦野次郎「入道殿の御使に参りて候。殿は十七日に比叡山にて御様を替へさせ給ひて、頭の殿の御許へ入らせ給ひしを、世間も未だつゝましとて、北山雲林院と申す所に忍びて渡らせ給ひ候が、公達の御事覺束なく思召し候間、御見參に入れ奉らんために、具し奉りて参らんとて、御迎に参りて候。」と申せば、乙若出で合うて「誠に様を替へておはしますとは聞きたれども、軍の後は未だ御姿を見奉らねば、

入道 源爲義をさす。四人の子どもの父。
頭の殿 左馬頭源義朝。四人の子どもの兄。
雲林院 船岡山の東にあり。天台宗の寺。
挿絵 幼き兄弟船岡山へ送らる。

誰々も皆戀しくこそ思ひ侍れ。」とて、我先にと輿に爭ひ乘られけるこそあはれなれ。これを冥途の使とも知らずして、各輿どもに向ひつゝ、「急げや、急げ。」と進みける。羊の歩み近づくを知らざりけるこそはかなけれ。大宮を上りに、船岡山へと行きたりける。峯より東なる所に輿舁きする者、いかゞせましと思ふ所に、七つになる天王走り出でて、「父は何處におはしますぞ。」と問ひ給へば、延景涙を流して、暫しは物も申さざりしが、やゝありて、「今は何をか隱しまゐらすべき。大殿は頭の殿の御承りにて、昨日の曉斬られさせ給ひ候ひき。御舍弟も、八郎御曹司の外は、四郎左衞門殿より九郎殿まで、五人ながら、ゆふべ此の表に見えて候山本にて斬り奉り候ひぬ。公達をも失ひ申すべきにて候。『相構へて賺し出しまゐらせて、佗びしめ奉らぬ様に。』と仰せ附けられ候間、入道殿の御使と

羊の歩み云々 摩耶經に「譬へば如し旃陀羅羊を驅し羊就く處所に歩々近づく死地に。人命亦如し是。」と。
大宮 御所の東の通り。大宮通り。
大殿 爲義をさす。
八郎御曹司 爲朝。
四郎左衞門云々 四郎左衞門頼賢・頼仲・爲宗・爲成・九郎爲仲。

は申し侍るなり。思し召す事候はば、延景に仰せ置かせ給ひて、皆御念佛候べし。」と申せば四人の人々これを聞き、皆與より下り給ふ。九つになる鶴若殿、「下野殿へ使を遣して、いかに我等をば失ひ給ふぞ。四人を助け置き給はば、郎等百騎にも勝りなんずるものを。此の由申さばや。」と宣へば、十一歳になる龜若、「誠に今一度人を遣して確に聽かばや。」と申されける所に、乙若殿生年十三になるが、「あな心憂の者どもの言ひがひなさや。我等が家に生まるゝ者は、幼けれども心は猛しとこそ申すに、かく不覺なる事を宣ふものかな。世の理をも辨へ、身の行末をも思ひ給はば、六十になり給ふ父の、病氣に依つて出家遁世して憑みて來り給ふをだに斬る程の不當人の、まして我々を助け給ふ事あらじ。あはれはかなき事し給ふ頭の殿かな。これは清盛が和讒にてぞあるらん。多くの弟

下野殿　下野守義朝。

和讒　一方に口を合はせて、他を讒すること。當時の通語。

を失ひ果てて、唯一人になして後、事の序に滅さんと計らふを覺らず、唯今我が身も失せ給はんこそ悲しけれ。二三年を過し給はじ。幼かりしかども、乙若が船岡にて能く言ひしものをと、汝等も思ひ合はせんずるぞとよ。偖も下野殿討たれ給うて後、忽ちに源氏の世絶えなん事こそ口惜しけれ。」とて、三人の弟達にも、「な歎き給ひそ。父も討たれ給ひぬ。誰か助けおはしまさん。兄達も皆斬られ給ひぬ。情をも懸け給ふべき頭の殿は敵なれば、今は定めて一所懸命の領地もよもあらじ。然れば命助りたりとも、乞食流涙の身となりて、此處彼處にさ迷ひ行き、あれこそ爲義入道の子供よと、人々に指をさされんは、家の爲にも恥辱なり。父戀しくば、唯西に向つて南無阿彌陀佛と唱へて、西方極樂に往生し、父御前と一つ蓮に生まれ合ひ奉らんと思ふべし。」と、大人しやかに宣へば、三人

の公達、各〻西に向つて手を合はせ、禮拜しけるぞあはれなる。

これを見て五十餘人の兵ども、皆袖をぞ濡しける。

此の公達に各〻一人づつ傅(めのと)ども附きたりけり。內記、平太は天王殿の傅、吉田の次郎は龜若、佐野の源八は鶴若、原の後藤次は乙若の傅なり。差し寄つて髮結ひ擧げ、汗拭ひなどしけるが、年來宮仕へ、朝夕に撫ではだけ奉りて、唯今を限と思ひける心どもこそ悲しけれ。されば聲を揚げて叫ぶばかりにありけれども、幼き人々を泣かせじと、抑ふる袖の隙よりも、餘る涙の色深く、つゝむ氣色も顯れて、思ひやるさへ哀れなり。乙若、延景に向つて、「我等こそ先にと思へども、あれらが幼き心に、怖ぢ恐れんも無慙なり。又言ふべき事もはんべれば、彼等を先に立てばや。」と宣ひければ、秦野次郎太刀を拔きて後へ廻りければ、傅ども「目を塞がせ給へ。」と申して、皆退きに

內記ノ平太 名は政遠。內記大夫行遠の子。

けり。卽ち三人の首、前にぞ落ちにける。乙若これを見給ひて、少しも騷がず、「いしう仕るものかな。我をもさこそ斬らんずらめ。偖あれは如何に。」と宣へば、外居(ほかゐ)を持たせて參りたり。手づから此の首どもの血のつきたるを押拭ひ、髮搔き撫で、「あはれ無慙の者どもや。かほどに果報少なく生まれけん。唯今死ぬる命より、母御前の聞召し歎き給はんその事を、豫て思ふぞ譬なき。乙若は命を惜しみてや、後に斬られけると人言はんずらん。全くその儀にてはなし。かやうの事をいはんにつきても、又我が斬られんを見んにつけても、泣き止りたる幼きものの、又泣かんも心苦しうていはぬなり。母御前の今朝八幡へ詣で給ふに、我も參らんと申せば、皆參らんと言ふ。『具せば皆こそ具せめ、具せずば一人も具せじ。片恨みに。』とて、我等が寢入りたる間に詣で給ひしが、下向にてこそ尋ね給

ほかゐ

八幡 石淸水八幡宮。山城國(京都府)綴喜郡男山に鎭座。

ふらめ。我等かゝるべしとも知らざりしかば、思ふ事をも申し置かず、形見をも進らせず、唯入道殿の呼び給ふと聽きつる嬉しさに、急ぎ輿に乘りつるばかりなり。されば之を形見に奉れ。」とて、弟どもの額髮を切りつつ、我が髮を具して、若したがひもやせんずるとて、別々に裹み分けて、各その名を書附けて、秦野次郎に賜びにけり。又詞にて申さんずるやうは、「今朝御供に參りなば、終には斬られ候とも、最後の有樣をば、互に見もし、見え參らせ候はんずれども、な

挿繪　義朝の第四人船岡山にて誅せらる。

かなか互に心苦しき方も侍らん。御留守に別れ奉るも、一つの幸にてこそ侍れ。此の十年餘の間は、假初に立離れ參らする事も侍らぬに、最期の時しも御見參に入らねば、さこそ御心に懸り侍るらめなれども、かつは八幡の御計ひかと思召して、いたくな歎かせおはしまし候ひそ。親子は一世の契と申せども、來世は必ず一つ蓮に參り逢ふやうに、御念佛候べし。」とて、「今はこれ等が待遠なるらん。疾く疾く。」とて、三人の死骸の中へ分け入りて、西に向ひ、念佛三十遍ばかり申されければ、首は前にぞ落ちにける。

四人の傅ども急ぎ走り寄り、首も無き身を抱きつゝ、天に仰ぎ地に俯して、をめき叫ぶも理なり。誠に涙と血と相具して流るゝを見る悲しみなり。內記平太は直垂の紐とりて、天王殿の身を我が膚に當てて申しけるは、「此の君を手馴れ奉

涙と血と云々　長恨歌に「回レ首血涙相和流。」と。

りしより後、一日片時も離れ參らする事なし。我が身の年の積ることをば思はず、早く人とならせ給へかしと、明暮思ひて育くみ參らせ、月日の如く仰ぎつるに、唯今かゝる目を見る事の心憂さよ。常は我が膝の上に居給ひて、髭を撫でて、『いつか人となりて、國をも莊をも儲けて知らせんずらん。』と宣ひしものを。うたゝねの寢覺にも、『内記、内記。』と呼ぶ御聲耳の底に留り、唯今の御姿幻にかげろへば、更に忘るべしとも覺えず。是よりかへつて命長くとも、千年萬年經べきや。死出の山・三途の河をば、誰かは介錯申すべき。恐ろしく思召さんにつけても、先づ我をこそ尋ね給はめ。生きて思ふも苦しきに、主の御供仕らん。」と云ひも果てず、腰の刀を拔くまゝに、腹搔切りて失せにけり。恪勤の二人ありけるも、「幼くおはしましかども、情深くおはしつるものを。今は誰をか主と憑むべ

き。」とて、差違へて、二人ながら死しにけり。是等三人が志、類無しとぞ申しける。

同じく死する道なれども、合戰の場に出でて主君と共に討死し、腹を切るは常の習なれども、かゝる例は未だ無しとて、譽めぬ人こそなかりけれ。

此の首ども渡すに及ばず、餘りに父を戀しがりければとて、圓覺寺へ送りて、入道の墓の傍にぞ埋みける。

—（保元物語）—

うち笑みて膝に這ひよるかなしさは我が子人の子
かはらざりけり　（高崎正風）

一つもて君を祝はむ一つもて親をいははむ
ふたもとある松　（落合直文）

さま〳〵の歎きよろこび人の世の事はことにて
年のくれゆく　（鳥野幸次）

高崎正風　鹿兒島縣の人。宮内省御歌所長。明治四十五年歿、年七十七。

落合直文　宮城縣の人。國文學者、歌人。明治三十六年歿、年四十三。

鳥野幸次　明治六年、福井市に生る。宮内省御歌所寄人、國學院大學教授。

四 光頼卿參内

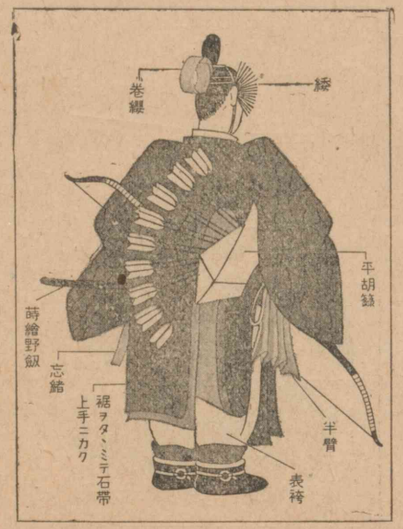
さる程に、内裏には同じき十九日、公卿僉議とて催されけり。勸修寺左衞門督光頼卿、この程は信頼卿の振舞過分なりとて、不參にておはしましけるが、「參内して承らん。」とて、殊にあざやかに束帶ひき繕ひ、蒔繪の細太刀をおとなしやかに佩き給ひ、傅子（めのこ）の桂右馬允範能に、膚に腹卷着せ、雜色の裝束にいでたゝせ、「自然の事もあらば、人手にかくな、汝が手にかけて、光頼が首をば急ぎ取れ」。とて、御身近く置き、その外清げなる雜色四五人めし具して、大軍陣を張りて、所々門々を堅く守護しけるを事ともせず、前（さき）高らかに追はせて入り給へば、兵どもも大いに恐れ奉り、弓を平め、矢をそばめて通し奉る。

光頼 藤原顯頼の子。權大納言正二位に進み、剃髮して光然と稱す。高倉天皇の承安三年（一一七三）歿、年五十。

同じき十九日 二條天皇平治元年（一一五九）十二月。

信頼 藤原忠隆の子。光頼の姪。後白河上皇の寵を蒙る。平治の亂、事敗れて斬らる。年二十七。

紫宸殿の後を經て殿上を廻りて見給へば、信頼卿一座して、その座の上蔦たち皆下にぞ着かれたる。光頼卿、「こは不思議のことかな。人はいかに振舞ふとも、あれは右衞門督、われは左衞門督なれば、下には着くまじきものを。」と思はれければ、左大辨宰相長方卿末座の宰相にておはしましけるに、「今日の御座席こそ、世にしどけなう見え候へ。」と色代して、しづ〳〵と歩み、信頼卿の上にむずと着き給ふ。光頼卿は信頼卿の爲には母方の叔父なる上、大力の剛の人なれば、殊に恐れて見えられけり。右の袖の上に居懸けられて、伏



紫宸殿 大内裏の正殿、一名南殿。

殿上 清涼殿の殿上間。

挿繪 武官束帶の圖。

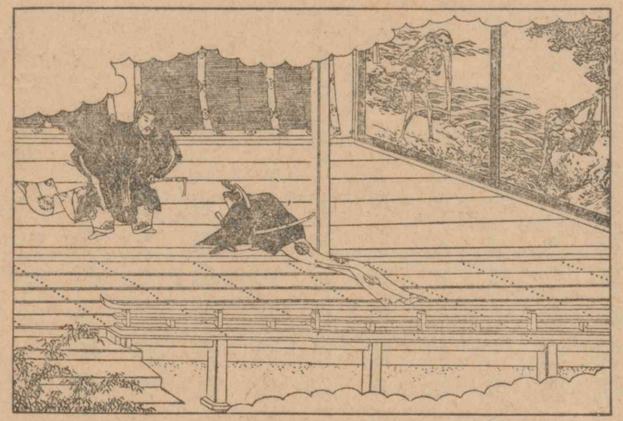
長方 藤原顯長の子。光頼と從兄弟。

目になりて色を失はれければ、着座の公卿あなあさましと見給ふに、光頼卿下襲の尻ひき直し、衣紋繕ひ、笏とり直し、氣色して、「今日は衛府督が一座すると見えて候。召に參ぜざらんものをば死罪に行はるべしとやらん承りて、參内するところなり。抑、何事の御諚ぞ。」と問ひけれども、信頼卿言も宣はず、着座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議の沙汰もなし。程經て光頼卿つい立ちて、「悪しう參つて候ひけり。」とて、しづ〳〵と歩み出でられけり。

庭上に充ち滿ちたる兵ども、これを見奉りて、「あはれこの

挿絵　文官束帶の圖。

殿は大剛の人かな。去んぬる十日より、多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に着く人、一人もおはしまさざりつるに、仕出したる事よ。門を入り給ふより、聊かも臆したる體も見え給はず。あはれこの人を大將として合戰せば、いかばかりか頼もしからん。」と申せば、傍なるもの、「昔、頼光・頼信とて、源氏の名將おはしましき。その頼光を打返して光頼と名のりたまへば、これも剛にましますぞかし。」といへば、又傍より、「などその頼信を打返して信頼と附き



十日　十二月十日。信頼が事を起しし翌日。

挿絵　光頼卿惟方を諫めらる。

頼光　源滿仲の子。驍勇を以て聞ゆ。治安元年(一〇二一)歿。

頼信　頼光の弟。永承三年(一〇四八)歿。

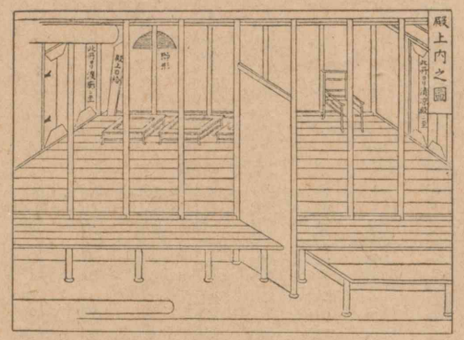
給ふ右衞門督殿は、あれ程臆病にはおはしますぞ。」といへば、『壁に耳、天に口。』といふことあり。恐ろし、恐ろし。聞かじ。」といひながら皆忍び笑に笑ひけり。

光頼卿かやうに振舞ひ給へども、急ぎても出でられず、殿上の小蔀の前、見參の板高らかに踏鳴らして立たれたりけるが、荒海の障子の北、萩の戸の邊に、弟の別當惟方のおはしけるを招き寄せ宣ひけるは、「公卿僉議とて催されつる間、參じたれども、承り定めたる事もなし。誠やらん、光頼も死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承る如きは、その人皆當時の有職、然るべき人どもなり。その内に入らんこと甚だ面目なるべし。さても、先日右衞門督が車の尻に乘つて、少納言入道が首實檢の爲に神樂岡へ向はれけることはいかに。以ての外然るべからざる振舞かな。近衞大將檢非違使別當は他

小蔀　清涼殿の上の戸の方にある小窓。
見參の板　鳴板ともいふ。清涼殿弘廂の南端の板敷。
荒海障子　清涼殿の弘廂の北にある布障子。前頁挿繪參照。
惟方　光頼の弟。初め信頼に黨せしも、後、經宗と計り二條天皇を奉じて大内を脱す。
先日　十二月十四日。
少納言入道　藤原通憲。入道信西。平治の亂に信頼の命によりて斬首せらる。
神樂岡　京都市上京區吉田町の東。

に殊なる重職なり。その職に居ながら、人の車の尻に乘り給ふ事、先蹤も未だ聞き及ばず、當時も大いに恥辱なり。就中首實檢は甚だ穩便ならず。」と宣へば、別當「それは天氣にて候ひしかば。」とて赤面せられたり。

光頼卿重ねて、「こはいかに勅諚なればとて、いかで存ずる旨を一議申さざるべき。我等が曩祖、勸修寺内大臣・三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより以來、君既に十九代、臣又十一代、承り行ふことは、皆これ德政なり、一度も惡事に從はず。當家はさせる英雄にはあらざれども、偏に有道の臣に伴なひて、讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に至るまで、人にさし



挿繪　清涼殿殿上内の圖。

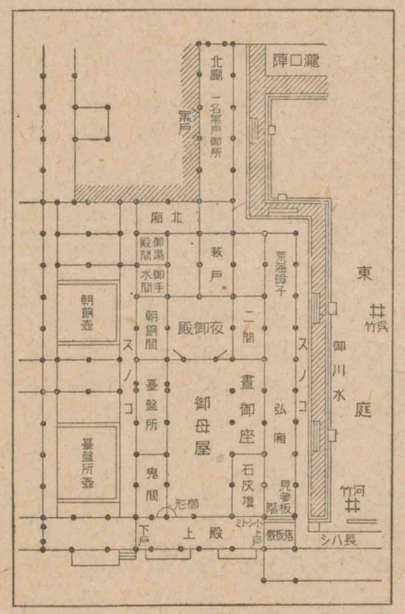
勸修寺内大臣　藤原高藤。
三條右大臣　藤原定方。
延喜　醍醐天皇の御代の年號。（一九六―一九八三）

もどかるゝ程のことはなかりしに、御邊始めて暴悪の臣にかたらはれて、累家の佳名を失はんこと、口惜しかるべし。大貳清盛は、熊野参詣を遂げずして、切目の宿より馳せのぼるなるが、和泉・紀伊・伊賀・伊勢の家人等待ちうけて大勢にてあなる。信頼卿が語らふ所の兵若干ならじ。平家の大勢押寄せて攻めんには、時刻をやめぐらすべき。もし又火などを懸けなば、君もいかでか安穏に渡らせ給ふべき。灰燼の地となりたらんだにも、朝家の御歎なるべし。いかに況や、君臣ともに自然の事もあらば天下の珍事、王道の滅亡この時にあるべし。右衛門督は御邊に大小事を申し合はするとこそ聞ゆれ。相構へて相構へて隙を窺ひ、玉體恙なくおはしますやうに、思案せらるべし。さて主上は何處におはしますぞ。」黒戸ノ御所に。「上皇は。」「一本御書所に。」「内侍所は。」「温明殿に。」「劍璽は何處

清盛 十二月四日熊野参詣に出發。
切目 和歌山縣日高郡切目村。
主上 二條天皇。
黒戸御所 清涼殿の北方にあり。
上皇 後白河上皇。
一本御書所 建春門内、侍從所の南にあり。世間よりの獻本を納められしところ。
内侍所 神鏡。
温明殿 紫宸殿の東にあり。

に。「夜の御殿に。」と、左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。

又「朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ。」と宣へば、「それには右衛門督住み候へば、その方ざまの女房などぞかげろひ候らん。」と申されければ、光頼卿聞きもあへず、「世の中は今はかくござんなれ。主上の渡らせ給ふべき朝餉には信頼住み、君をば黒戸御所に遷しまゐらせたり。末代なれども、さすが日月は未だ地に落ち給はぬものを、天照大神・正八幡宮



夜の御殿 清涼殿の中央にあり。
朝餉 主上の御食事の所。夜の御殿の西方にあり。
櫛形の穴 清涼殿の御母屋の南壁と鬼の間との中間の柱を挾みて設けられたる櫛形をなせる窓。櫛形窓。
挿繪 清涼殿の圖。

は王法をいかゞ守り給ひぬるぞ。異國にはかやうの例ありと雖も、我が朝には未だかくの如き先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かな。」とて、のろ〳〵しげに憚る所なく口說き給へば、惟方は人もや聞くらんと、よに凄まじげにて立たれたれども、かつは悲しくて、「われいかなる宿業に依つてかゝる世に生まれ合ひ、憂きことをのみ見聞くらん。昔の許由にあらねども、今の內裏の有樣を聞かん輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ。」とて、上の衣の袖絞るばかり泣かれけり。信賴卿の座上に着かせられし時は、さしもゆゝしく見え給ひしが、君の御事を悲しみて、打萎れてぞ出で給ひける。

—(平治物語)—

許由 箕山の隱士。帝堯の國を讓らんといへるを聞き、耳汚れたりとて、潁川の水に耳を洗ひたりといふ。

平治物語 三卷。作者不詳。

五 平安城

藤岡作太郎

歷史は國勢の變遷を記すものにして、變遷はまづ都會に兆すとせば、歷史の大部分は都會を舞臺として起れる事件を以て充たさるといふも過言に非ず。進步の木鐸たるものも、地步を都會に占めずんば、その抱負を施すに處なし。文運の發展もこゝに基礎を固めて、然る後、全國に弘布するなり。されば首府の勢力の强大に過ぎたること、平安朝の如きは多からず。平安朝の歷史、殊にその文藝の歷史は、全國の歷史に非ずして、たゞ京都の歷史なり。平安京裏の貴族は安逸に馴れ、懦弱に流れ、京都の中に跼蹐して、身心を活潑に使役するを欲せず。公事・供養にあたら日を費して、實務を執るを卑しみ、地方の施政の如きは毫も意に介せず。國郡睽離の形勢

藤岡作太郎 國文學者。文學博士。石川縣の人。明治四十三年歿、年四十一。

は年々に進み行けども、知らず顏に一時の安を帝都に貪りぬ。都鄙の關係かくの如く薄くして、しかも文學はたゞ都人の文學なり。地方を度外に置くことを欲せざるものも、わが平安朝文學の研究には勢ひしかせざるを得ず。

萬葉集の和歌を見よ。人麿は石見の邊地に哀絶の調を歌ひ、赤人は東、富士の名山、西、伊豫の溫泉を賦し、旅人は筑紫の名所に感吟少なからず、家持は越中の山水と神靈相通ず。東歌、防人の詠、遠國微賤の民が嘯く所、また傾聽すべきものあり き。平安朝にも、業平の東下り、貫之の京上り、實方の奥州ゆきなど異數のことあり。道眞が太宰府の貶謫、西行が諸國の行脚は、殊に稀有の例なるが、首府孤立の時代とて、何れも文壇一瞬の電光石火、大體の形勢には何等の影響をも與へず。諸國の交通をいへば、蓋し奈良朝よりも開けたることあるべし。延曆年間、坂上田村麿の東夷征伐ありて、東北の來往もこれより度數を加へたるならん。又同じ頃、諸所の關を廢して、公私往還の便を計り、足柄路が富士山の噴火によりて壅塞せられしを以て、新たに箱根路を開けり。されど旅行はなほ不便に、草枕、萱の假廬に一夜を過す折もあり、盜賊の患も多ければ、貴族は誰か遠く出づるを望まん。たゞ平安數里の中をわれらの世界と甘んじて、たま〳〵の遊山・物詣は、石山または長谷の參籠、住吉の舟遊なり。平安末期に至りては、稍遠隔の地に出遊することも少なからずなり、白河法皇等は熊野に、鳥羽法皇等は嚴島に御幸ありて、萎縮せる意氣のやや發展したる觀あり。されど概括していへば、光源氏が須磨の近流に望鄕の念に堪へず、涙痕の袖に絶えざりしもの、これ平安貴族の常情なりき。

人麿 柿本氏。歌人。持統・文武兩天皇に仕へ、石見にて歿す。

石見の邊地に云々 萬葉集卷二に、「從二石見國一別レ妻上來詩」歌、「石見の海角の浦回を浦無しと人こそ見らめ潟無しと人こそ見らめよしゑやし浦は無くともよしゑやし潟は無くとも鯨魚取り云々」とあり。

哀絶の調 「石見のや高角山の木の間より吾が振る袖を妹見つらむか」（人麿）

赤人 山部氏。歌人。聖武天皇に仕ふ。

伊豫の溫泉云々 萬葉集卷三に、「天皇の神の命のしきます國のことゞ〳〵湯はしもさはにあれども島山のよろしき國とこゞしかも伊豫の高嶺のいさにはの云々」と。

旅人 大伴氏、歌人。元明・元正・聖武の三天皇に歷仕し、從二位大納言となる。天平三年歿、年六十八。（一三二四—一三九一）

筑紫の名所云々 萬葉集には所々に見ゆ。卷六に「筥二次田溫泉一聞二鶴喧一歌」「湯の原に鳴くあしたづは吾が如く妹に戀ふれや時わかず鳴く」

越中の山水と云々 萬葉集卷十七に越中の詠多し。ことに「二上山賦」は出色のものなり。曰く「射水川い行きめぐれる玉くしげ二上山は春花の咲ける盛りに云々」

東歌 東國（相模・上總・下總・信濃・上野・下野等）の人々が、方言を以て詠める歌。萬葉集に多く收む。例へば「信濃路は今の墾道刈株に足踏ましなむ履はけ我が夫」

建國以來、歷代の帝王多くは代を改むる毎に宮城をも遷し給へり。されど時勢の進歩し都民の增加するに從ひて、漸く簡易なる遷都は實行し難きに至り、靑によし奈良の都は咲く花と匂ひて、こゝに七代七十餘年を經たり。東國戡定の大志ある桓武天皇には、住みなれし都城も不便少なからねばにや、こゝに又遷都の議は動きぬ。延曆三年、地を山背國乙訓郡長岡に相して、新都の造營を擬めしが、その地淀川に近く、舟楫の便ありとはいへ、面積狹隘にして萬年の帝都に適せず。更めて和氣淸麿の奏議により、少しく東北に進みて葛野郡宇太の地を卜す。延曆十三年、盛儀を具へて新營の都に遷幸あり。詔して宣く、「この國山河襟帶、自然に城を成す。この形勝によりて、山背國を改めて山城國となすべし。子來の民、謳歌の輩、異口同辭に號して平安京といふ。今これに從ふべ

防人の詠 邊要の地を警備せし兵士の詠ぜし和歌。萬葉集に多く收錄す。「けふよりはかへりみなくて大君のしこの御楯といで立つ我は」の類。

業平の東下り 伊勢物語に「昔男ありけり。その男身を益なきものに思ひなして、京には居らじ、東の方に住むべき處求めむとて往きけり。云々」として、在原業平が、三河・駿河を經て武藏・下總の方へ下りける由を記せり。

貫之の云々 紀貫之は、醍醐天皇の延長年中に土佐守に任じて下國し、朱雀天皇の承平年中に任滿ちて歸京す。

實方の云々 藤原實方は一條天皇に仕へて左近衛中將たり。一日和歌のことによりて藤原行成と爭ひ、陸奥守に貶せられ、長德四年（一六五八）任所に歿す。

道眞云々 第七課「菅公の左遷」第六六頁參照。

西行 歌僧。俗名佐藤義淸。鳥羽上皇に仕へて北面の

し。」と。これより新都は平安京と稱せられて、明治維新の際まで千七十五年の間、天つ日嗣の常の御あらかとなりて、今もなほ皇室の大儀はこゝに行はるとぞいふなる。

平安京は鎌倉の如く山丘參差の間に狹くるしく介在したる處にあらず。東京の如く前より前へと必要に應じて開き行きたる處にもあらず。奠都當時の形勢にかゝはらず、遠く千年の後を慮りて設計し、その規模は唐の長安の制に則りて成る。全市の廣袤南北一里十一町四十三間、東西一里五町三間、大內裏その北位の中央にありて南面す。皇居百寮この中にあり。大內裏および京城の四面、ともに土垣隍溝ありてこれを繞る。大內裏の南の正門朱雀門より京城の南門羅城門まで、南北にわたりて通ぜる大路を朱雀大路とし、これによりて全市を左京・右京に二分す。左右京共に、京極と朱雀

士たり。二十三歲にして出家し、四方に周遊す。建久元年歿、年七十三。（一七七八―一八五〇）

坂上田村麿云々 桓武天皇の延曆二十年（一四六一）征夷大將軍として蝦夷を征し、陸中膽澤城を築いて鎭處とせり。

足柄路云々 延曆年間屢〻富士山の噴火ありたり。

石山 滋賀縣滋賀郡石山村に石山寺あり。

長谷 奈良縣磯城郡初瀨町に長谷寺あり。

住吉 大阪市住吉區に住吉神社あり。その海は舟遊に適す。

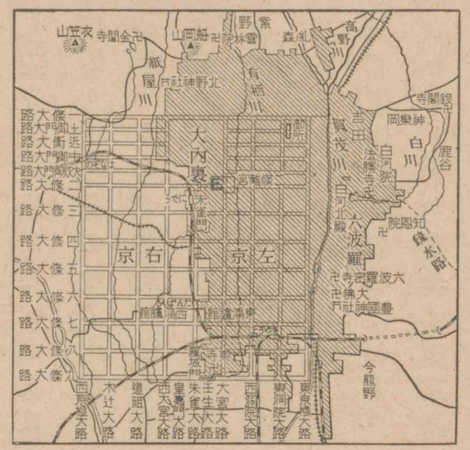
熊野 和歌山縣に在り。西牟婁郡を口熊野、東牟婁郡を奧熊野といふ。熊野三山・那智の瀧などあり。

嚴島 廣島縣佐伯郡宮島に嚴島神社あり。

光源氏云々 源氏物語の主人公光源氏の君が、事によりて須磨の浦に流されたるかいふ。

靑によし奈良の都は云々 萬葉集に「靑によし奈良の都は咲く花の匂ふが如

大路との間に、四條の大路、十一の小路を開き、南北向の道路併せて三十二筋あり。東西に通ぜる道路は大路すべて九筋、北より一條・二條と數へて九條に終る。一條と二條とは大内裏を挾みて、他よりも廣く、その間にまた大路四筋、更にその間毎に一筋づつの小路あり。三條より九條まで各條の間、三筋づつの小路あり。東西向の道路併せて三十九筋あり。この間を小別して、民家一戸を長さ十丈幅五丈と定め、八戸を重ねて一行とし、四行を竝べて一町とし、四町を一保とし、四保を一坊とし、左右京各〻一條の大



く今盛りなり」

七代 元明・元正・聖武・孝謙・淳仁・稱德・光仁の七天皇の御代。

山背國 山城國。

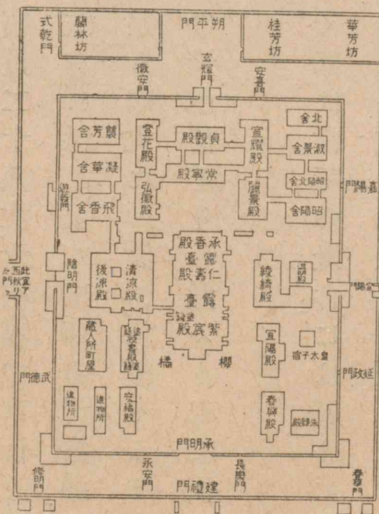
長岡 今の京都市の西南方向日町附近。

長安 唐代の都。陝西省西安府。

路に沿うて四坊あり。區劃すること恰も棊面の如く、條理井然として一線紊れず。西賀茂を經、紫野を過ぎりて有栖川は東の堀川となり、衣笠山の麓より北野を超えて紙屋川は西の堀川となる。朱雀大路の幅員二十八丈、大内裏の南面を縫へる二條通は十七丈、その左右に添ひたる東西の大宮通は各〻十二丈、以下十丈・八丈、小路も四丈におよぶ。柳・櫻をこきまぜて植ゑつらねし都大路の景色、何ぞそれ堂々として大國の風あるや。

然れども、この大規模の帝都は、當時の社會には廣きに過ぎたりき。京都の歴史を說くもの或は曰く、「平安朝も末になるに從ひて氣運は東遷し、右京は廢墟となり、鴨東は市街となりて、以て後世の形勢を釀成したり。」と。これ一を知つてまだ二を知らざる論なり。源平爭鬪の頃、西の京の田舍に數

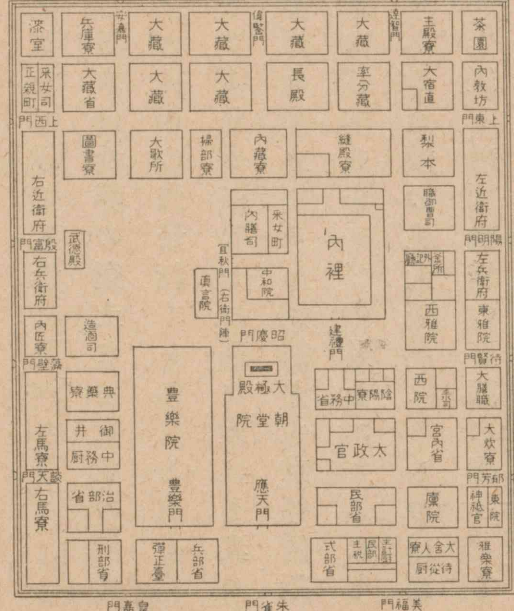
へられたるは勿論のこと、平安最盛時期の著述たる枕草子に、既にその荒廢を說き、しかもその頃なほ勢の西する兆なきを思へば、右京は設計のみにして、始より住民はこゝかしこに點々散布するのみにて、公衆はなほ便に從ひて、左京に集り棲みしならん。白河天皇の頃より法勝寺を營み、離宮を構へて、鴨川の東、三條街道の北なる白河は一時の繁昌を極め、城南鳥羽の地もまた離宮の造營ありて殷賑の狀を呈す。平家勃興するや、一族の第宅六波羅に立ちならびて、鴨川の東、五條の南は熱鬧の地となりぬ。大內裏のうち



枕草子　二卷・三卷・五卷・七卷など、異本多くして卷數一定せず。淸少納言が一條天皇の皇后定子に宮仕せる時に書きしもの。百六十餘項の下に、宮廷の樣、上流人士の生活、自然美等に鋭き觀察縱橫の批評等を試みたるもの。

挿繪　內裡圖。

にては、八省院を國家の正朝とし、大極殿をその正殿とす。宏壯華美人目を驚かせしが、貞觀康平二回の火災に罹り、その後再建せしかども、治承の火災にあひてよりは荒廢して止みぬ。皇居は天德四年始めて火災に罹りしが、その後屢〻建てて屢〻燒く。これがため、又は物の怪の恐れ、方違へなどのため、天皇の一時は里內裏にましますことも少なからず。鳥羽天皇は里內裏を土御門に營みて、その結構を大內に準じ給ふ。皇居は却つて漸次殘衰に傾きて、



八省院　朝堂院ともいふ。天皇臨御して政を聽き、國儀・大禮を行ひ給ひ、又百官登廳して庶政を行ひし處。その正殿を大極殿といふ。

貞觀・康平云々　淸和天皇の貞觀十八年（一五三六）四月、及び後冷泉天皇の康平元年（一七一八）二月の火災を指す。

治承云々　高倉天皇の治承元年（一八三七）四月、都に大火あり。

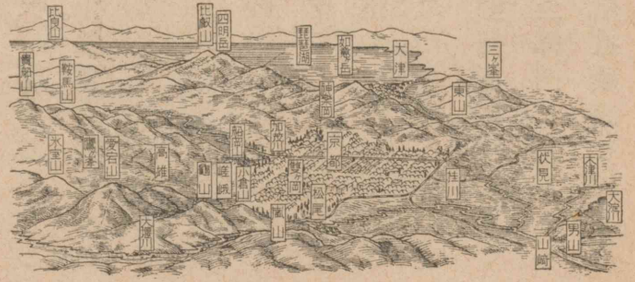
天德四年　村上天皇の天德四年（一六二〇）九月、內裏火災。

挿繪　大內裏圖。

鳥羽天皇云々　永久五年（一七七七）二月、天皇は、京都土御門の南、烏丸の西に內裏を造らしめ給ひ、同十一月に遷御。

纔かに舊地位にありといふのみ。鎌倉時代に至りては遂に全く廢墟となりぬ。土御門の里内裏は、室町時代より常に皇居となりて以て近世に及べり。

日本は世界の樂土なり、東亞の伊太利なり。山川の風景行くところとして佳ならざるなきがなかに、殊に衆美を聚め、群を拔いて立てるを京都とす。京都附近の景は日本のすべての景をエキスにしたるもの。規模の雄大豪壯なるものは存せずと雖も、華麗幽婉の形態は備へざるなし。東に近く比叡如意が嶽より三の峯まで、東山三十六峯笑ふが如く、北には鞍馬・貴船・氷室・鷹が峯・高雄の山々、波濤の如



挿繪　京都附近の鳥瞰圖。

エキス　藥物又は食物の有效成分を抽出せるもの。

く、西にやゝ隔りて愛宕・小倉・龜山・嵐山・松尾より山崎に至りて地勢は窮まる。松柏の綠色濃き中に、或は目覺むるやうなる櫻の入交るあり、或は紅燃ゆる紅葉を織込みたるあり。一面の草の頂なる四明が嶽、春なほ雪白き比良の遠山などは、わけて朝日・夕日に照りはゆる色の、千變萬化なるぞ面白き。東の神樂が岡、北の船岡、西の雙が岡は、大和の畝傍・香山・耳無の三山の如く近く相竝びてあらねば、妻爭ひの口碑も傳はらねど、子の日の遊に小松曳く樂みなど、いづれ劣らぬ處がらなり。南にやゝ隔りて男山これに對すれど、國家鎭護の八幡宮、宮柱太知りまして、仰ぐもかしこし。京の東端に沿うて、鴨川の流、紀の河合に高野の支流を集めて、南に珠を碎き去り、西に少しく離れて、桂河、大堰の激湍に清瀧を併せて、琴の音涼しく、また南に向ふ。二川南に合し、更に淀の急流に流れ

四明が嶽　比叡山の絕頂をいふ。
比良　滋賀縣滋賀郡の山。近江八景の一名所。
神樂が岡　京都市の東北部にあり。
船岡　京都市の西北部にあり。
雙が岡　京都市花園の西約二五〇米にある墳笠を伏せて竝べたる如き岡。
畝傍・香山・耳無　共に奈良縣の西部にあり。
妻爭ひ云々　播磨風土記・萬葉集等にその傳說を記せり。
子の日の遊　正月の初子の日に小松を引きて千代を祝ふ。
男山云々　京都府綴喜郡にあり。官幣大社石清水八幡宮あり。
紀　京都府愛宕郡下賀茂村の地名。
清瀧　清瀧川。

込みて沈々として西の方難波をさして走る。茫洋たる大海、浩蕩たる波濤の壯觀なく、跌宕の觀念を人心に與ふる材料に乏しといへども、一面よりいへば、山の中に籠りて海を見ざるは、またそれだけの長所なくんばあらず。地勢の勾配やや急なれば、蘆間に出で入る白帆の町の側を往來する眺なきかはりに、濁りて底の明かならざる河水を知らず。京の水はわけてアルカリ性の鑛物を含めるにや、曝す布をも人の膚をも眞白にす。海そのものは清けれど、棄てたる塵埃を更に岸に打上ぐるに、藻の臭も添ひ、漁夫など居る處は、わけて見るにも嗅ぐにも心地よからぬこと多し。京都に海なきは惜しむべしと雖も、海なくして清き京都は益〻清かりしなり。

—(國文學全史)—

アルカリ性 金屬化合物にして、水溶液となりては赤色リトマス溶液を青色に變ずる作用をなす。

六 蓬生の月

秋ふけぬ泣けや霜夜のきりぐす　　後鳥羽上皇

やゝかげ寒しよもぎふの月　　皇太后宮大夫俊成

たなばたのと渡るふねのかぢの葉に

いく秋かきつ露のたまづさ　　藤原定家朝臣

見わたせば花も紅葉もなかりけり

浦のとまやの秋の夕ぐれ　　藤原家隆朝臣

志賀の浦や遠ざかりゆく浪間より

後鳥羽上皇 御名は尊成(タカヒラ)。高倉天皇の第四皇子。第八十二代の天皇。延應元年(一二九九)隱岐の國に崩御、御年六十。和歌・管絃に精通したまふ。

皇太后宮大夫俊成 藤原俊忠の子。後白河天皇の詔を奉じて千載集を撰す。後鳥羽天皇に仕へて正三位皇太后宮大夫に至る。元久元年(一二〇四)歿、年九十一。

藤原定家朝臣 俊成の子。正二位權中納言。後鳥羽上皇の詔にて新古今集を撰し、後堀河天皇の勅にて新勅撰集を撰す。仁治二年(一二四一)歿、年八十。

藤原家隆朝臣 歌を俊成に學び、一代の詠、六萬首に上る。定家と共に新古今集を撰す。從二位宮內卿。嘉禎三年(一二三七)歿、年八十。

こほりていづる有明の月　　前大僧正慈圓

庭の雪に我があとつけて出でつるを
とはれにけりと人や見るらむ　　藤原定家朝臣

大空は梅の匂ひに霞みつゝ
曇りも果てぬ春の夜の月　　藤原家隆朝臣

谷川のうちいづる波も聲たてて
驚さそへ春のやまかぜ　　寂蓮法師

暮れてゆく春のみなとは知らねども
霞に落つる宇治の柴舟

前大僧正慈圓　勅諡して慈鎭といふ。天台座主。和歌を好みて後鳥羽上皇の殊遇を辱くす。嘉祿元年（一八五）寂、年七十一。

寂蓮法師　俗名藤原定長。僧俊海の子。叔父俊成の子となりしが、定家生るゝや、出て僧となり、繪畫・和歌に名あり。建仁二年（一八二）寂。

うちしめりあやめぞかをる時鳥
泣くや五月の雨の夕ぐれ　　藤原良經

おしなべてものを思はぬ人にさへ
心をつくる秋の初風　　西行法師

石川やせみの小川の清ければ
月も流れをたづねてぞ澄む　　鴨長明

いつもきく麓の里とおもへども
きのふにかはる山おろしの風　　後德大寺左大臣

—（新古今和歌集）—

藤原良經　關白兼實の子。最も和歌に長ず。建永元年（一八六）薨、年三十八。

西行法師　俗名佐藤義清。射技と和歌とに長ず。後鳥羽上皇に仕へしが、二十三歳にして出家し、諸國に行脚して吟情を鼓す。建久元年（一八五）寂、年七十三。

鴨長明　賀茂社の禰宜長繼の子。鎌倉時代の文學者。建保四年（一八六）歿。

後德大寺左大臣　藤原實定。右大臣公能の子。歌道に秀でて一家を爲す。建久二年（一八五）薨、年五十三。

七　菅公の左遷

醍醐の帝の御時、時平のおとゞ左大臣の位にて、年いと若くておはしき。菅原のおとゞは右大臣の位にておはします。その折みかど御歳いと若くおはします。左右大臣に、世の政を行ふべき宣旨下さしめ給へりしに、そのをり、左大臣御年二十八九ばかり、右大臣の御年五十五六ばかりにやおはしけむ。共に世の政をうちせしめ給ひし程に、右大臣はざえも世にすぐれ、めでたくおはしまし、御心おきても殊の外にかし、こくおはしまし、左大臣は御歳も若く、ざえもことの外に劣り給へるによりて、右大臣御おぼえことの外におはしましたるに、左大臣安からずおぼしたるほどに、さるべきにやおはしけむ、右大臣の御爲に、よからぬこと出で來て、昌泰四

時平　關白藤原基經の子。醍醐天皇に仕へて左大臣となり、延喜九年薨、年三十九。（一五三一―一五六九）

菅原のおとゞ　菅原道眞。是善の子。醍醐天皇の昌泰二年（一五五九）右大臣に陞り、同四年、太宰權帥に遷され、延喜三年（一五六三）その地に薨、年五十九。（一五〇五―一五六三）

年正月二十九日、太宰權帥になし奉りて流され給ふ。

この大臣の子ども、數多おはせしに、女君たちは婿取し、男君たちは皆程々につけて位どもおはせしを、それも皆方々に流され給ひて悲しきに、幼くおはしける男君・女君たち、慕ひ泣きておはしければ、「小さきはあへなむ。」と、公も許さしめ給ひしかば、共に率て下り給ひしぞかし。帝の御掟極めて生憎におはしませば、この御子どもを、同じかたにだに遣はさざりけり。方々にいと悲しく思し召して、御前の梅の花を御覽じて、

東風吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春なわすれそ

太宰權帥　中納言以上を以てこれに任ず。大臣左遷の時は權帥に任ずるを例とす。

婿取す　夫を持つこと。

挿繪　都督府趾。

あへなむ　（父と一緒に居ることは）許し難いが枉げて許してやらう。

生憎に　都合惡しく。

又、亭子の帝にきこえさせ給ふ。

流れ行くわれは水屑になりはてぬ君しがらみと
なりてとゞめよ

なき事によりて、かく罪せられ給ふを、からく思し歎きて、やがて山崎にて、出家せしめ給ひてけり。都遠くなるまゝに、あはれに心細くおぼされて、

君がすむ宿の梢をゆく〳〵も隱るゝまでにかへ
りみしはや

また播磨の國におはしつきて、明石のうまやといふ處に御宿りせしめ給ひて、驛の長のいみじう思へる氣色を御覽じて、作らせ給へる詩、いと哀し。

驛長無驚時、變改。　一榮一落是春秋。

かくて、筑紫におはしまし著きて、あはれに心細く思さる

亭子の帝　宇多法皇のこと。その離宮を亭子院といふが故なり。

なき事　無實の罪。

からく　辛く。つらく。

山崎　京都府の南端、淀川に臨む地。

かへりみしはや　「はや」は歎きのことば。

明石　兵庫縣明石市。

筑紫　(一)九州の總名。(二)筑前・筑後兩國の稱。

る夕べ、遠方に處々煙立つを御覽じて、

夕されば野にも山にもたつけぶりなげきよりこ
そ燃えまさりけれ

また、雲の浮きて漂ふを御覽じても

山わかれ飛びゆく雲の歸り來るかげ見るときぞ
なほたのまるゝ

さりともと、世をおぼし召されけるなるべし。月のあかき夜、

海ならずたゞよふ水の底までもきよきこゝろは
月ぞ照らさむ

これ、いとかしこくあそばしたりかしげに月日こそは照らし給はめとこそはあめれ。

筑紫におはしますところの御門もかためておはします。

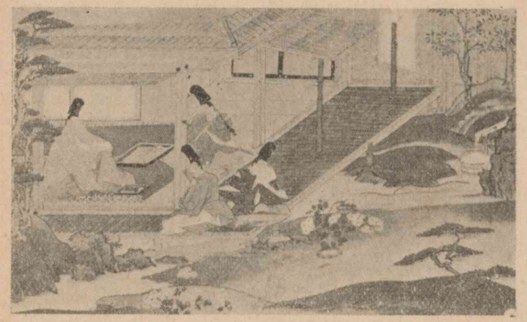
夕されば　夕方になれば。

なげき　「歎き」に「投木」をいひかけたり。かけ詞の一例。

海ならず　ひとり海ばかりでなく。

あめれ　「あるめれ」の略。

大貳の居處ははるかなれども、樓の上の瓦などの、心にもあらず御覽じやられけるに、また、いと近く觀音寺といふ寺のありければ、鐘のひゞきをきこしめして、作らせ給へる詩ぞかし。



都府樓纔看瓦色。
觀音寺只聽鐘聲。

之は、文集の白居易が

「遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峯雪撥簾看。」

といふ詩にもまさざまに作らしめ給へりとこそ、昔の博士どもは申しけれ。

またかの筑紫にて、九月十日、菊の

大貳 太宰府の次官。
大貳の居所 太宰府をいふ。福岡縣筑紫郡水城村にその趾あり。
觀音寺 觀世音寺。福岡縣筑紫郡水城村にあり。
都府樓 同村にその趾あり。
文集 白氏文集。七十一卷。白居易の詩文集。
白居易 唐の詩人。字は樂天。諸官を經て刑部尚書に至る。
遺愛寺・香爐峯 共に支那の江西省にあり。

挿繪　菅公謫居の圖。（松崎天神緣起より）

花を御覽じけるついでに、まだ京におはしましし時、九月の今宵、內裏にて菊の宴ありしに、この大臣作らしめ給へりける詩を、御門かしこく感じ給ひて御衣賜はり給へりしを、筑紫にもて下らしめ給へりければ御覽ずるに、いとゞそのをりおぼし召しいでて、作らせ給ひける。

去年今夜侍清涼。　秋思詩篇獨斷腸。
恩賜御衣今在此。　捧持毎日拜餘香。

この詩いとかしこく、人々感じ申されき。このことども、只散り〳〵なるにもあらず、かの筑紫にて作り集めさせ給へりけるを書きあつめ、一卷とせしめ給ひて後集と名づけられたり。また折々の歌を書きおかせ給へりける、自ら世に散り聞えしなり。

また雨の降る日、うち眺め給ひて、

御門 醍醐天皇。
去年今夜 去年（昌泰三年）の九月十日の今宵。
秋思 その時賜はりたる詩の御題。
後集 菅家後集。一卷。道眞の詩文集。菅家文草の續篇なり。

あめの下かわける程のなければや著てしぬれぎぬひるよしもなき

やがて、かしこにてうせ給へり。

夜の中に、この北野にそこらの松をおふさしめ給ひて、渡り住み給ふこそは、唯今の北野宮と申して、現人神におはしますめれ。公も行幸せしめ給ふ。いとかしこく崇め奉り給ふめり。筑紫のおはしましし處は安樂寺といひて、公より別當所司などなさせ給ひて、いとやむごとなし。

―（大鏡）―

そこら　數多。

北野宮　今は官幣中社。京都市の西北隅なる北野にあり。

安樂寺　福岡縣筑紫郡太宰府町。

大鏡　八卷。「世繼物語」ともいふ。作者不詳なれども鳥羽天皇の朝に成りたるものの如し。文德天皇より後一條天皇まで百七十餘年間の歷史を敍述評論し、今鏡・增鏡・水鏡等の先驅を成す。

八　大鏡と道長時代

島津久基

大鏡は、太政大臣道長の榮華に對する祝詞である、賀詞である、吉詞である。

同時に、この道長の榮華と權勢の由つて來る所以を說く爲に、道長以前の藤原氏一門の消長、特に道長に傳へられて來た權勢の推移に直接關係ある皇室の御系統、卽ち文德天皇から後一條天皇までの御代々の御上と、冬嗣以下藤原氏堂上權力の中心であつた人々の傳を物語るのである。これは卷頭に世繼の翁の口を藉りて闡明してゐる所である。

大鏡と共に、平安時代の末に近く成つた歷史物語に榮華物語がある。兩書とも世繼といふ名で呼ばれて、御堂殿時代讚美の回想記である點と、純假名文の國史である點で全く

島津久基　明治二十四年鹿兒島縣に生る。國文學者。

道長　藤原兼家の子。一條・三條・後一條の三天皇に歷仕し、攝政關白太政大臣に至る。萬壽四年（一六七）薨、年六十二。

文德天皇　第五十五代。

後一條天皇　第六十八代。

冬嗣　贈正一位太政大臣。世に閑院大臣といふ。文德天皇の外祖父に當る。天長三年（一四六）薨、年五十二。

御堂殿時代　道長を御堂關白と呼べるため、道長在世時代卽ち藤原氏全盛期を御堂殿時代と呼ぶ。

一致してゐるので、頗る混同され易い。從來勅撰の六國史はあつたが、いづれも漢文で書かれたもので、假名を以て書かれたものには歌物語・日記などの外はなかつた。然るに時代の流れは勅撰が漢詩文集から和歌集の方に移つていつたと共に、爰に新しい純國文の國史の新樣式を生み出して來たのである。又、時人歎稱の的であつた道長が薨去して、榮華を誇つた藤原氏も漸く衰運に向つて來た時分に、その華やかであつた頃の追憶が懷かしまれて來ると共に、その心持をよく、詳しく表現し得べきあゝいふ新しい樣式の出現したのも、極めて自然であつたと考へられる。榮華物語には唯漫然と、客觀的に、且つ詳細に史實を記述しようとした傾向が見えるのに對して、大鏡の方には作者の主觀によつて、全體の整理統一せられてあることが認められる。それだけに、

六國史　日本書紀・續日本紀・日本後紀・續日本後紀・文德實錄・三代實錄の六史を云ふ。

後者の方が文學作品としての意義を、より多く有してゐると思はれるが、更に人物・事件の一段と生動して居る點でも大鏡を擧げねばならない。例へば中心人物たる道長に就いて云つても、東三條院の石山詣での折に、帥殿卽ち伊周の車に道長が馬を乘り寄せて、傍若無人に振舞ふところや、四條大納言公任の學才を父兼家が羨んで、「わが子供の影だに踏むべくもあらぬこそ口惜しけれ。」と歎じた時、道隆・道兼二兄は恥ぢて物も言はぬ中に、獨最も若かつた道長が、「影をば踏まで面をやは踏まぬ。」と言ひ放つところなどに、その人物がさながらに現れて居る。又、事件として、花山天皇の御出家、小一條院の御氣の毒な御身の上など、涙なしには讀まれない。併し榮華物語の方にも道長の性格の非常によく描き出されてゐるところのあることをもいひ添へて置く。

東三條院　藤原詮子。圓融天皇の女御。一條天皇の御母。
伊周　藤原道隆の第二子。
公任　頼忠の長子。
兼家　師輔の第三子。
道隆・道兼　共に兼家の子。
小一條院　御父三條天皇。後一條天皇の皇太子。

更に、大鏡竝に榮華物語を讀んで深く心を惹かれるのは、物語られ、寫し出されてある宮廷生活である。さうして直ちに感ずることは、それが源氏物語に描かれてゐるそれに非常に近いものであるといふことである。中にも、人生の榮枯に關して宗教的に信ぜられて居るのは、所謂「宿世」であり、又現實の宮廷生活に最も重大な關係を有するものは「うしろ見」の有無である。社交と、藝術と、政爭と、美の情趣の鑑賞と、權勢獲得の誇と、殿上の遊・祭・行幸・物詣、さては、物怪・祈・占、卽ち源氏物語を通じて想像し得られる御堂殿時代の生活の實證が、こゝに提供せられてゐるばかりか、それと共に、自己の榮達を計らんが爲に、時としては手段を擇ばぬ醜い非人道な權謀が、幾多の悲劇を生んだ政治史上表裏の眞相が鮮明に示されて居るのである。

大鏡に道長のことを「世間の光」といひ、又「只世の中はこの殿の御光」と言つて居るのは、源氏物語に倣つた口調であるが、又事實御堂殿時代の權貴者として、時人の所謂「權者（ごんざ）」の道長の光は、源氏物語の中の光君の光とたぐへらるべき、いみじく、かゞやかしいものであつたのであらう。光源氏の榮達の外面的生活に、道長時代の影が著しく反映されて居ることは何人も否み難いことであらう。つまり源氏にあらはれた世界は、理想化・物語化せられた御堂殿時代であり、又大鏡・榮華物語のそれは、時代人の理想に近接した御堂殿時代の實寫であると言ひ得る。この點に兩者の密接な交渉がある。道長時代、卽ち一條天皇前後の時代は紫式部や清少納言の活躍した時代である。時の秀才・才媛の手に成つた物語・隨筆・日記等によつて、窺ひ得る生活が、もつと端的に、もつと組織

的・綜合的な觀方で、且つ政治史的に物語られたのが大鏡であり、榮華物語である。特に大鏡は、作者の藝術的精神が或批判的精神と混融して可なりに働いてゐる處に、その獨自の境地を持ち、歴史物語中の一異彩を成してゐる。

要するに、この兩書は國史の研究資料としては勿論、源氏物語や枕草子を研究考察する上にも見遁されないものであると共に、大鏡は別に一箇の作品としても十分に面白く鑑賞されるものである。

—（日本文學聯講）—

九　法成寺の造營

今は御心地例ざまになりはてさせ給ひぬれば、御堂の事思し急がせ給ふ。攝政殿、國々まで、さるべき公事をばさるものにて、まづこの御堂のことを先に仕うまつるべき仰言のたまふ。殿の御前も「この度生きたるは別ごとならず、この願の協ふべきなめり。」とのたまはせて、他事なくたゞ御堂におはします。

方四町をこめて、大垣にして瓦葺きたり。さまざまに思しおきて急がせ給へば、夜の明くるも心もとなく、日の暮るゝも口惜しうおぼされて、夜もすがらは、山を疊むべきやう、池を掘るべきやう、木を栽ゑなべさせ、さるべき御堂御堂、方々さまざま造りつゞけ給へり。御佛はなべての樣にやはおは

法成寺　京都の東北隅、京極土御門に道長の建てし寺。

攝政殿　藤原頼通。道長の長子。世に宇治關白と稱す。承保元年（一〇三四）歿、年八十三。

殿の御前　藤原道長。

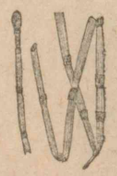
します。丈六の金色の佛を數も知らず造りなべ、そなたをば北南と馬道をあけて、道をとゝのへ造らせ給ひて、廊・渡殿かず多く作らせなむと思し給ふに、鷄の鳴くも久しくおぼされ、宵曉の御行も懈らず、やすきいも大殿ごもらず、たゞこの御堂のことのみ深く御心にしませ給へり。

日々に多くの人々參り罷で立ちこむ。さるべき殿ばらを始め奉りて、宮々の御封・御莊どもより、一日に五六百人、千人の夫どもを奉るにも、人の數多かることをば賢きことに思したち、國々の守ども、地子・官物は遲なはれども、只今はこの

挿繪　法成寺の造營。古本挿繪。

御堂の夫役・材木・檜皮・瓦など多く參らすることを、我も我もと競ひ仕うまつる。大方近きも遠きも參りこみて、品々方々、あたりあたりに仕うまつる。

或所を見れば、御佛つかうまつるとて、佛師ども百人ばかり竝み居て仕うまつる。同じくはこれこそめでたけれと見ゆ。御堂の上を見上ぐれば、工匠ども二三百人のぼり居て、大きなる木どもには太き綱をつけて、聲を合はせてえさまさと引き上げさわぐ。御堂の内を見れば、佛の御座造りかゞやかす。板敷を見れば、木賊・椋の葉などして、四五十人手ごとに竝み居て磨き拭ふ。檜皮葺・壁塗・瓦作なども數をつくしたり。又年老いたる翁などの、三尺ばかりの石を心に任せて切りとゝのふるもあり。池を掘るとて四五百人おりたち、山を疊むとて五六百人のぼり立ち、又大路の方を見れば、力車にえ



木賊

椋の葉

もいはぬ大木どもに綱をつけて叫びのゝしり引きもてのぼる。鴨河の方を見れば、筏といふものに榑・材木を入れて、棹さして心地よげに歌ひのゝしりてもてのぼるめり。大津・梅津の心地するも、「西は東」といふことはこれなりけりと見ゆ。磐石といふばかりの石を、はかなき筏にのせて率て來れど沈まず。すべていろ〳〵様々いひ盡くし、まねびやるべき方なし。かの須達長者の祇園精舍造りけむもかくやありけむと見ゆるを、冬の室、夏の風、各〻ことゞ〳〵なり。

かゝる御勢にそへて、入道せさせ給ひて後は、いとゞ勝らせ給へりと見えさせ給ふにも、なほなべてならざりける御有様かなと、近う見奉る人はたふとみ、遠う見奉る人は遙かに拜み參らす。今はこの御堂のあたりの木草ともならむと思へる人のみ多かり。そなたざまに赴けば、海の浪も柔かに

大津　滋賀縣大津市。
梅津　京都市右京區梅津。
須達長者　釋迦在世當時の舍衞國の富者。波斯匿王の大臣。
祇園精舍　須達長者が建てて佛に奉りし中印度の寺。

立ちて、この御堂の物をもて運ばせ、河も水澄みて、快く浮かべもて參ると見ゆ。猶なべてこの世の事とは見えさせ給はず。まづは、先つ年長谷寺にある僧の、御祈禱をいみじうして寐たりける夢に、大きにいかめしき男の出で來て、「何かかく殿の御事をばともかくも申し給ふ。弘法大師の佛法興隆の爲に生れ給へるなり。」とぞ見えさせ給ひける。又天王寺の聖德太子の御日記には、「王城より東に佛法弘めむ人を我と知れ。」とこそは書きおかせ給ふなれ。いづれにてもおろかならぬ御事なり。

—（榮華物語）—

長谷寺　奈良縣磯城郡初瀬町にあり。天武・聖武二天皇の御願によりて建てられし寺。
天王寺　聖德太子が大阪に建てられし四天王寺。
榮華物語　四十卷。主として藤原氏の榮華を記せし歷史物語。作者につきては諸說一定せず。

一〇 須磨の秋

紫式部

須磨には、いとゞ心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の「關吹き越ゆる」と言ひけむ浦波、夜々は實にいと近く聞えて、又無く哀れなるものはかゝる所の秋なりけり。御前にいと人少なにて、打休み渡れるに、一人目を覺して、枕を欹てて四方の嵐を聞き給ふに、波たゞ此處もとに立ちくる心地して、涙落つとも覺えぬに枕浮く許りになりにけり。琴を少し搔き鳴らし給へるが、我ながらいと凄う聞ゆれば、彈きさし給ひて、

戀ひ佗びて泣く音にまがふ浦波は
思ふ方より風や吹くらむ

と謠ひ給へるに、人々驚きて、めでたう覺ゆるに、忍ばれで、あ

紫式部 藤原爲時の女。藤原宣孝に嫁す。宣孝の死後上東門院に仕ふ。
須磨 兵庫縣神戸市の地。
行平中納言 平城天皇の皇子阿保親王の第二子。弟業平と共に在原の姓を賜はる。
關吹き越ゆる 「旅人は袂すゞしくなりにけり關吹きこゆる須磨の浦風」

いなう起き居つゝ、鼻を忍びやかにかみ渡す。實に如何に思ふらむ、我が身一つにより、親兄弟片時立ち離れ難く、程に付けつゝ思ふらむ家を別れて、斯く惑ひ合へると思すに、いみじくて、いと斯く思ひ沈む樣を、心細しと思ふらむと思せば、晝は何くれと戲言打宣ひ紛らはし、つれ〴〵なる儘に、色々の紙を繼ぎつゝ手習をし給ひ、珍らしき樣なる唐の綾などに、樣々の繪どもを書きすさび給へる屏風の

挿繪　須磨。古本挿繪。

面どもなど、いとめでたく見所あり。人々の語り聞えし海山の有様を、遙かに思し遣りしを、御目に近くては、實に及ばぬ磯のたゝずまひ、二なく書き集め給へり。「此の頃の上手にすめる千枝・常則など召して、作繪仕う奉らせばや。」と心許ながりあへり。

懷かしうめでたき御有様に世の物思ひ忘れて、近う馴れ仕う奉るを嬉しき事にて、四五人ばかりぞつと侍ひける。前栽の花いろ〳〵咲き亂れ、面白き夕暮に、海見やらるゝ廊に出で給ひて、佇み給ふ御樣のゆゝしう清らなるに、所柄はましてこの世の物とも見え給はず。白き綾のなよゝかなる、紫苑色など奉りて、濃やかなる御直衣、帶しどけ無く打亂れ給へる御樣にて、「釋迦牟尼佛弟子」と名告りて緩かに讀み給へる、また世に知らず聞ゆ。沖より舟どもの謠ひのゝしりて漕

千枝・常則　當時の繪師。傳不詳。

ぎ行くなども聞ゆ。仄かに、たゞ小さき鳥の浮かべると見やらるゝも心細げなるに、雁の連ねて鳴く聲、楫の音に紛へるを打眺め給ひて、御涙の零るゝを搔き拂ひ給へる御手つき、黑木の御數珠に映え給へるは、故鄉戀しき人々の心、皆慰みにけり。

初雁はこひしき人のつらなれや
　旅のそら飛ぶ聲のかなしき

と宣へば、良清、

かきつらね昔の事ぞおもほゆる
　雁はその世の友ならねども

民部大輔、

心から常世を捨てて鳴く雁を
　雲の餘所にもおもひけるかな

良清　播磨守の子、源良清。源氏の從者。

民部大輔　名は惟光。源氏の從者。

前の右近丞、

常世出でて旅の空なる雁がねも
列におくれぬ程ぞなぐさむ

「友惑はしては如何に侍らまし。」と言ふ。親の常陸になりて下りしにも誘はれで、參れるなりけり。下には思ひ碎くべかめれど、誇りかにもてなして、つれなき樣にしありく。

月のいと花やかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりと思し出でて、殿上の御遊び戀しく、月の顏のみまもられ給ふ。「二千里外古人心」と誦じ給へる、例の涙も止められず。「夜更け侍りぬ」と聞ゆれど、なほ入り給はず。

―(源氏物語)―

前の右近丞　伊豫介の子。源氏の從者。

二千里外　三五夜中新月色。二千里外故人心。(白樂天)

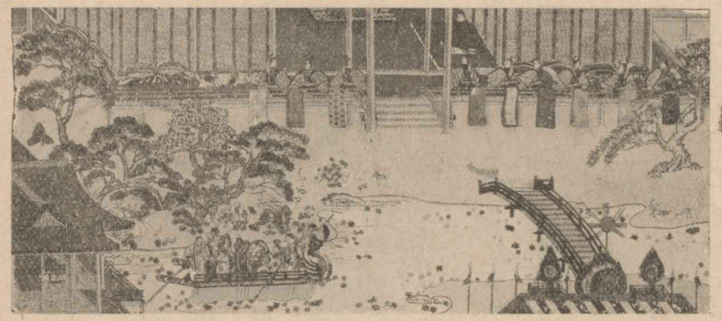
源氏物語　五十四帖。紫式部の作。

一一　源氏物語

五十嵐　力

こゝに聰明にして情に厚く美を愛する一團の人間があつて、國民中の最高階級に位し、其の國最高の教育を受け、而して其の國特殊の文化が成り立ちかけた時に生まれたと假定せよ。此の時、國民中の他の一團が彼等を保護して、「衣食はもとより政治・兵馬の實務に至るまで、煩はしい事は一切吾等が引受けるによつて、決して心配なされるな。唯々風雅の道に心を潛めて樂しく美はしく世を送られよ。」と、いつて、山水明媚なる一郭の土地を其の遊樂の場所にあてがつたと假定せよ。かくして彼等は生活の苦を知らず事務の煩ひを知らず、干戈の慘を知らず、感情・文藝の世界にほしいまゝに悠遊して二百年三百年を過したとせよ。其の結果、一代の

五十嵐　力　明治七年、米澤市に生る。國文學者。文學博士。早稲田大學教授。



風潮が感情本位になるべきは見易き道理である。從つて其の弊が流れて文弱になり、奢侈になり、淫靡になり、婦女子が重んぜられるやうになり、臆病な陰險な謀計が行はれるやうになつて、腐敗・墮落を極むべきことも亦爭はれぬ自然の經路である。

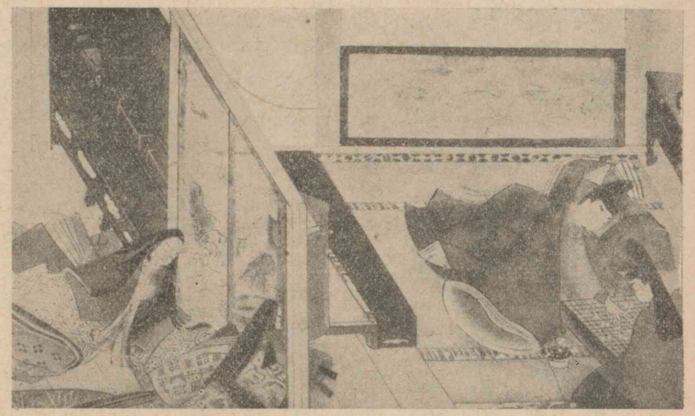
藤原氏專權時代の宮廷生活・公卿生活は、まさしくかくの如きもので、又まさしく斯くの如き結果に達した。彼等は支那・印度の文明が漸く我が國情と融和して、將に特色ある文明が成り立たうとする時にあたり、

挿繪　平安朝時代貴族遊樂の圖。（駒迎行幸繪卷）

新文明建設の責任ある地位に居りながら、不思議な運命に操られて、現實と懸け離れた內裏雛式の生活を送ることとなつた。彼等は虛位を擁して、對人民、對國土の政務とは殆ど全く相關することがなかつた。大臣・納言はたゞ朝廷の儀式を行ふための役目、大將・中將は弓・胡籙に威嚴を飾る名義だけの武官、文官は民情を知らず、又知らうともせず、武官は武事を習はず、戰爭を夢にも見ず、文武を問はずして滿廷悉くこれ宮內官、悉くこれ風流歌人であつた。彼等ほど自然に遠ざかつた者は無い。彼等は嵐・鴨の山紫水明を賞し、春花秋葉の美を爭つたとはいふものの、脚下なる土地や、土地に關した物には一顧を與へる事をも屑しとしなかつた。露を見て「何の玉ぞ」と問ひ、農產物を見て「蕪めくもの」「大根らしきもの」、「葱とかいふもの」などと言ふのが、彼等の間に於ける一種の

誇で、土臭い物は賤山がつと共に、すべて「怪」「賤」の二義を兼ねた「あやし」といふ形容詞の下に却け去るを常とした。彼等は自ら稱した通り、地を離れ政務を離れた殿上人、雲の上人であつた。而して彼等を羨みながら、其の地位を奪はうとはせず、甘んじて其の下風に立ち、其の爪牙となり、藩屏となつて、彼等を荒い風にあてず、彼等の逸遊費を負擔して風流を恣にせしめた者が卽ち地下人等である。彼等は地下人が自覺して自立の念を起すに至るまでは、快く雲上の夢を貪ることを得たのである。

此の感情本位・文藝本位の時代思想が十分に發展して行くべき所まで行つた社會――歌舞・遊宴・歌合・繪合・供養・祈禱・祭禮・方違及び婦人中心の權力爭ひなどが盛んに行はれた社會――藤氏の專權を機會として造化翁が描き出した古



今東西に比類なき情の社會――端麗なる容姿の前には虎狼も微笑を獻じ、物のあはれを知る者には鬼神も不義を赦すと考へられた社會――平安朝の前後四百年中其の特色の最もよく發揮された時代の社會――此の一あつて二なき社會、再び現るべからざる社會をば、當時漸く出來たばかりの新しい假名文字を用ゐ、今しも方に熟した新國語を用ゐ、洗煉推敲を重ねて、立派に活き活きと描き出したものが、卽ち紫式部の

挿繪　平安朝時代貴族の宴内。（源氏物語繪卷）

源氏物語五十四帖である。

感情本位・文藝本位といふ如き單純な言葉で前後四百年に亙る平安朝を說明するのは、或は獨斷に過ぎるであらう。けれども時代思想の中心が此處に在つたのは疑のないことである。又源氏物語が平安朝社會を遺憾なく寫したといふのも多少穩當でないかも知れぬ。けれどもダンテの「神曲」が全盛時代のスコラ哲學の理想を描いたといはれるほどの意味で、源氏物語が成熟した平安朝の理想を寫したといふに異論はあるまい。又此の時代の文學は土佐日記・竹取物語を初として、落窪物語・古今集・枕草子・狹衣物語・榮華物語・大鏡等、一つとして此の時代思想に觸れて居らぬはないけれども、「源氏」ほど切實に此の思想に觸れ、「源氏」ほど圓滿に此の思想を現したものはない。

ダンテ　(1265—1321)伊太利の詩聖。

神曲　ダンテの著。天國・地獄・煉獄の三篇より成る一大詩篇。

スコラ哲學　歐洲中世に行はれた哲學の一派。

本居宣長は「玉の小櫛」に「源氏」を稱して、在來の物語に現れた人物の類型的なるに反して、個性を書き分けた事、在來の物語が事件・趣向の奇拔を狙つたのに反して、人情を寫し、平凡・自然の事柄を寫した事、漢文一流の粗漫なる形式的文章に反して、心理變遷の過程を精細に描いた事、これが此の物語の特色であるといふ意味のことを述べてゐる。これは時代を超越した卓見で、誨淫の書といひ、教訓の書といひ、佛理を現した作といへる類の愚說の、足許にもよられぬ大批評であり、急所を捉へ得た名批評といつてよい。

宣長の評でも知られる如く、源氏物語は我が明治以前の文學中の最大傑作の一で、殊に現實的・自然的・平凡的・精寫的なる最近文學の趨勢を豫想したと見られる點さへある。別して驚くべきは「源氏」が世界に於ける最古小說の一たる事

である。小說を譬喩物語や傳奇の類と區別して「人情展開の過程を寫した物語」といふ意味に解すれば、英國の小說はリチャードソンの「パメラ」の出でた一千七百四十年、卽ち今より約百九十年以前に其の端を開くといはれる。西洋に於ける寫實小說の元祖と謂はれるボッカチオの「デカメロン」の公にされたのは一千三百五十三年、卽ち今より凡そ五百八十年前である。支那・印度には、無論「源氏」以前に此の意味の小說といふものはなかつた。此の見地よりすれば、我が源氏物語は、日本に於ける最初の小說であるのみならず、又東洋最初の小說であるのみならず、或は世界に於ける最初の小說であるかも知れぬ。少なくとも、世界最古最大の小說の一たることは疑なきことである。然るにかゝる古文學の寶典が名のみ徒らに高くして廣く讀まれぬは何のためか。たゞに

リチャードソン（1689—1761）英國の小說家。
ボッカチオ（1313—1375）伊太利の小說家。

普通人の間に於てのみならず、國文研究者にすらも通讀されぬ場合の往々あるのは何故か。思ふに、これ一つは其の題目たる宮廷生活が、後代の國民に對して餘りに懸け隔つて理解し難くなつたため、一つは平安朝の朦朧たるほのめかしぶりの語格・文體が直截明快を欲する後世の讀者の理解力に多大の租稅を掛けるため、も一つは洗煉を極めて煎じ詰め過ぎた文體が、走り讀みを常として繰り返して讀むことを好まぬ後世の讀者の頭に入り難いためであらう。かやうな面倒・不便利はあるが、我が文學の誇となるべき此の傑作を、此のまゝ棚に上げて敬遠主義を取るのは如何にも殘念な事である。

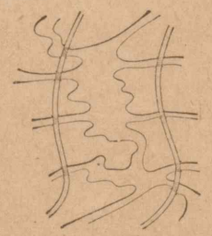
—（新國文學史）—

三　在五中將

昔、男ありけり。その男身を益なきものに思ひなして、京にはあらじ、東の方に住むべき國求めにとて往きけり。もとより友とする人一人二人して往きけり。道知れる人もなくて惑ひ往きけり。三河の國八橋といふ所に到りぬ。そこを八橋といひけるは、水行く河の蜘蛛手なれば、橋を八つ渡せるによりてなむ八橋といひける。その澤の邊の木の蔭におり居て、餉くひけり。その澤に杜若いとおもしろく咲きたり。それを見て、或人の曰く、「かきつばたといふ五文字を句の上に据ゑて、旅の心を詠め。」といひければよめる。

から衣きつゝなれにしつましあればはるゞゝきぬる旅をしぞ思ふ

八橋　愛知縣碧海郡。今の知立町の東。古意の八橋の圖。



と詠めりければ、皆人餉の上に涙落して、ほとびにけり。

往き往きて駿河の國に到りぬ。宇津の山に到りて、我が入らむとする道はいと暗う細きに、蔦楓は茂り、物心細く、すゞろなる目を見ることと思ふに、修行者逢ひたり。かゝる道にはいかでかおはするといふを見れば、見し人なりけり。京にその人の許にとて、ふみ書きてつく。

駿河なるうつの山邊のうつゝにもゆめにも人の逢はぬなりけり

富士の山をみれば、五月のつごもりに雪いと白う降れり。

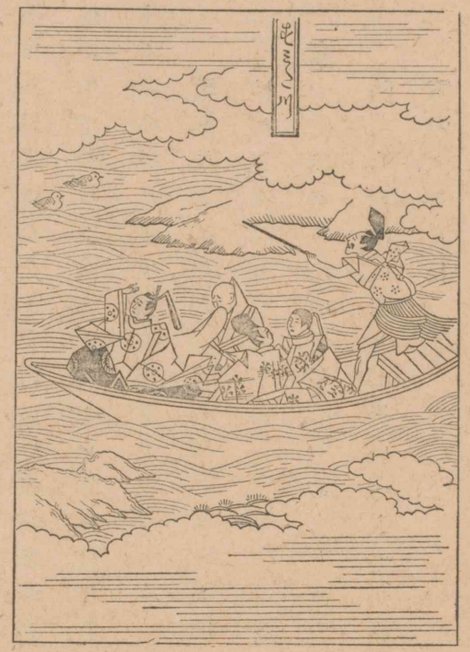
時しらぬ山はふじの嶺いつとてか鹿の子まだらに雪のふるらむ

その山は、こゝに譬へば、比叡の山をはたちばかり重ねあげたらむほどして、なりは鹽尻のやうになむありける。

宇津の山　靜岡縣安倍郡と志太郡との界。

比叡の山　京都の東北に峙ち、山城・近江兩國に跨る。高さ八百五十米。山上に延曆寺あり。

なほ往き往きて、武藏の國と下總の國との中に、いと大きなる川あり。それを隅田川といふ。その川の邊りに群れゐて思ひやれば、限りなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守、「はや舟に乘れ。日も暮れぬ。」といふに、乘りて渡らむとするに、皆人物わびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の嘴と足とあかき、鴫の大きさなる、水の上に遊びつゝ魚を喰ふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人み知らず。渡守に問ひけれ



鹽尻

隅田川 角田・住田等とも書く。東京市の東部を流るゝ川、昔は利根川に合流し川幅現在よりも廣かりしといふ。挿繪 都鳥。古本挿繪。

ば、「これなむ都鳥。」といふを聞きて、

名にしおはばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

と詠めりければ、舟こぞりて泣きにけり。

昔、惟喬親王とまをす皇子おはしましけり。山崎のあなたに水無瀨といふ處に宮ありけり。年毎の櫻の花盛にはその宮になむおはしましける。その時右のうまのかみなりける人を常に率ておはしましけり。時世へて久しくなりにければ、その人の名忘れにけり。狩は懇ろにもせで、酒をのみ飲みつゝ大和歌にかゝれりけり。今狩する交野の渚の院、その櫻ことにおもしろし。その木の下におりて居て、枝を折りて挿頭にさして、上・中・下みな歌よみけり。うまのかみなりける人

惟喬親王 文德天皇の第一皇子。詩歌をよくす。貞觀十四年出家、寛平九年(一五七)薨、御年五十四。

水無瀨 今の大阪府三島郡島本村。

右のうまのかみ 在原業平。阿保親王の第五子。貞觀の頃、右馬頭に任じ、元慶年中、右近衛中將に進み、相模守、美濃守を兼ぬ。元慶四年(一五四)歿、年五十六。

交野の渚の院 大阪府北河內郡牧野村。

のよめる。

世の中にたえて櫻のなかりせば春のこゝろは
のどけからまし

となむ詠みたりける。また人の歌、

散ればこそ
いとど櫻は
めでたけれ
うき世に
なにかひさし
かるべき

とて、その木の下は立ちて歸るに、日暮になりぬ。歸りて宮に入らせ給ひぬ。夜更くるまで酒飲み物語して、

挿繪　水無瀬。古本挿繪。

さてあるじの皇子醉ひて入り給ひなむとす。十一日の月も隱れなむとすれば、かのうまのかみのよめる。

あかなくにまだきも月のかくるゝか山の端にげて
入れずもあらなむ

かくしつゝまうで仕うまつりけるを、おもひの外に御髮おろさせ給ひて、小野といふ處に住み給ひけり。正月に拜み奉らむとてまうでたるに、比叡の山の麓なれば、雪いと高し。しひて御室にまうでて拜み奉るに、つれ〴〵といと物悲しくておはしましければ、やゝ久しく侍ひて、古のことなど思ひ出でて聞えけり。さても侍ひてしがなと思へど、おほやけ事どもありければ、え侍はで、夕暮に歸るとて、

忘れては夢かとぞおもふ思ひきや雪ふみわけて君
を見むとは

小野　京都市左京區小野町比叡山の西麓にあり。

昔、男ありけり。身はいやしながら、母なむ宮なりける。その母、長岡といふ處に住み給ひけり。子は京に宮仕しければ、まうづとしけれど、しば〳〵もえまうでず。一人子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり。

さる程に、師走ばかりに、とみの事とて御文あり。驚きて見れば、歌あり。こと言はなくて、

老いぬればさらぬわかれのありといへばいよ〳〵見まくほしき君かな

となむありける。これを見て馬にも乘りあへず參るとて、打泣きて道すがら思ひける。

世の中にさらぬわかれのなくもがな千代もといのる人の子のため

長岡　京都府乙訓郡向日町。

昔、男いかなりけることを思ひける折にか、よめる。

思ふことといはでぞたゞにやみぬべきわれとひとしき人しなければ

昔、男わづらひて、心ち死ぬべくおぼえければ、つひにゆく道とはかねて聞きしかどきのふけふとは思はざりしを

―伊勢物語―

伊勢物語　二卷。在五中將物語ともいふ。作者不詳。

一三　かぐや姫

春の始より、かぐや姫、月のおもしろう出でたるを見て、常よりも物思ひたるさまなり。或人の「月の顔見るは忌むこと。」と制しけれども、ともすれば、人間（ひとま）には月を見てはいみじく泣き給ふ。

七月のもちの月に出でゐて、せちに物思へるけしきなり。近く使はるゝ人々、竹取の翁に告げていはく、「かぐや姫、例も月をあはれがり給ひけれども、この頃となりては、たゞ事にも侍らざめり。いみじく思し歎く事あるべし。よく〳〵見たてまつらせ給へ。」と言ふを聞きて、翁かぐや姫に言ふやう、「如何なる心地すれば、かく物を思ひたるさまにて月を見給ふぞ。うましき世に。」といふ。かぐや姫、「月を見れば、世のなか心細

かぐや姫　竹取物語の中心人物。竹の中より拾ひ來りて育て上げし美姫。

人間　人の見ぬ隙。

七月のもち　七月十五日。

うましき　樂しき。幸福といふ意味の古語。

くあはれに侍り。何事をか歎き侍るべき。」といふ。かぐや姫のあるところに到りて見れば、なほ物思へるけしきなり。これを見て、「あが佛、何事を思ひ給ふぞ。思すらんこと何事ぞ。」と問へば、「思ふ事もなし。物なん心細く覺ゆる。」と答ふ。翁、「月な見給ひそ。これを見給へば、物おぼすけしきあるぞ。」といへば、「いかでか月を見ではあらん。」とて、なほ月出づれば出で居つゝ歎き思へり。夕闇には物思はぬけしきなり。月の程になりぬれば、なほ時々は打歎き泣きなどす。これを見て、仕ふるものども、「なほ物思す事あるべし。」とさゝやけど、親を始めて、何事とも知らず。

八月もちばかりの月に出でゐて、かぐや姫いといたく、人目も今はつゝみ給はず泣き給ふ。これを見て、親どもも、「何事ぞ。」と問ひ騒ぐ。かぐや姫泣く〳〵いふ、「さき〴〵申さんと思

あが佛　「わが本尊とも頼みにしてゐる人」といふ意。

ひしかども、必ず心惑はし給はんものぞと思ひて、今まで過ぐし侍りつるなり。さのみやはとて打出で侍りぬるぞ。おのが身はこの國の人にもあらず、月の都の人なり。それを、昔の契なりけるによりてなん、この世界にはまうで來りける。今は歸るべきになりにければ、この月のもちに、かの本の國より、むかへに人々まうで來んず。さらずまかりぬべければ、思し歎かんが悲しきことを、この春より思ひ歎き侍るなり。」といひて、いみじう泣くを、翁、「こは何事をのたまふぞ。竹の中より見つけ聞えたりしかど、栄種の大きさなりしを、わが丈たち並ぶまで養ひ奉りたるわが子を、何人か迎へ聞えん。正に許さんや。」といひて、「われこそ死なめ。」とて、泣きのゝしること、いと堪へ難げなり。かぐや姫のいはく、「月の都の人にて、父母あり。片時の間とて、かの國よりまうで來しかども、かくこの

打出て　「言葉に出す」「話す」などの意。

さらず　避け遁れられずして。「已むことなく」「仕方なし」などの意。

國には數多の年を經ぬるになんありける。かの國の父母の事もおぼえず、こゝにはかく久しく遊び聞えてならひ奉れり。いみじからん心地もせず、悲しくのみなんある。されど、おのが心ならず罷りなんとする。」といひて、諸共にいみじう泣く。使はるゝ人々も、年頃ならひて、立別れなん事を、心ばへなどあてやかに、美しかりつることを見ならひて、戀しからん事の堪へ難く、湯水も飲まれず、同じ心に歎かしがりけり。

かゝる程に、宵うち過ぎて、子の刻ばかりに、家のあたり晝の明さにも過ぎて光りたり。望月の明さを十あはせたるばかりなり。大空より、人、雲に乘りて降り來て、地より五尺ばかりあがりたる程に立ちつらねたり。これを見て、内外なる人の心ども、ものに襲はるゝやうにて、戰はん心もなかりけり。辛うじて思ひ起して、弓矢を執りたてんとすれども、手に力

ならひ　馴れると同意。

いみじからん　大層嘗き。

あてやかに　氣品ありて。

子の刻　今の午後十二時。

思ひ起して　發奮して。

もなくなりて、痿えかゞまりたる中に、心さかしきもの、念じて射んとすれども、外ざまへ往きければ、あれも戰はで、心地たゞしれにしれて守りあへり。

立てる人どもは、裝束の清らなること物にも似ず。飛ぶ車一つ具したり。羅蓋さしたり。その中に王とおぼしき人、造麻呂まうで來。」といふに、猛く思ひつる造麻呂も、物に醉ひたる心地して、うつぶしに伏せり。曰く、「汝をさなき人、聊かなる功德をつくりけるによりて、汝が助にとて、片時のほどとて降ししを、そこらの年ごろ、そこらの金賜ひて、身を換へたるが如くなりにたり。かぐや姫は罪をつくり給へりければ、かく賤しきおのれが許におはしつるなり。罪の限りはてぬれば、かく迎ふるを、翁は泣き歎く能はぬことなり。はや返し奉れ。」といふ。翁答へて申す、「かぐや姫を養ひ奉ること二十年餘り

あれも　あら〳〵しく。
しれに　痴れに痴れて。惘然自失の意。
立てる人　天人。
羅蓋　薄絹を張りたる天蓋。
造麻呂　竹取翁の名。
そこらの　多くの意。
身を換へ　こゝでは急に金持になりしことを指す。

になりぬ。片時と宣ふに、怪しくなり侍りぬ。又他處にかぐや姫と申す人ぞおはしますらん。こゝにおはするかぐや姫は、重き病をし給へば、え出でおはしますまじ。」と申せば、その返事はなくて、屋の上に飛ぶ車を寄せて、「いざ、かぐや姫、穢なき處にいかでか久しくおはせん。」といふ。たて籠めたるところの戸、卽ちたゞあきにあきぬ。格子どもも、人はなくしてあきぬ。嫗の抱きてゐたるかぐや姫、外に出でぬ。えとゞむまじければ、たゞさし仰ぎて泣き居り。

竹取心惑ひて泣き伏せる處に寄りて、かぐや姫いふ、「こゝにも、心にもあらで、かく罷るに、昇らんをだに見送り給へ。」といへども、「何しに悲しきに見送り奉らん。われをば如何にせよとて、捨ててはの昇り給ふぞ。具して率ておはせね。」と泣きて伏せれば、御心惑ひぬ。「文を書き置きて罷らん。戀しからんを

嫗　造麻呂の妻。
こゝにも　「自分も」の意。

りをり、取出でて見給へ。」とて、打泣きて、「この國に生れぬるとならば、歎かせ奉らぬ程まで侍るべきを、侍らで過ぎ別れぬる事、返すゞ〳〵本意なくこそ覺え侍れ。脱ぎ置く衣を形見と見給へ。月の出でたらん夜は見おこせ給へ。見捨て奉りて罷る空よりも落ちぬべき心地す。」と書き置く。

天人の中に持たせたる筥あり、天の羽衣入れり。又あるは不死の藥入れり。一人の天人いふ、「壺なる御藥奉れ。穢なき處の物聞し召したれば、御心地あしからんものぞ。」とて、持て寄りたれば、些か嘗め給ひて、少し形見とて、脱ぎ置く衣に包まんとす。ある天人、御衣を取出でて著せんとす。その時に、かぐや姫、「衣著つる人は心異なるものなり。物一言いひ置くべき事あり。」といひて、いみじく靜かに、おほやけに御文奉り給ふ。あわてぬさまなり。

―竹取物語―

竹取物語　一卷。「かぐや姫物語」とも「竹取の翁物語」ともいふ。我國最古の小說。著者は源順と傳ふれど確ならず。著作の年代は文德天皇・淸和天皇の頃なるべしと。この竹取傳說は旣に萬葉集卷十六の長歌に見え、謠曲以下現代文學に至るまで展開せり。

一四　古今と新古今

尾上柴舟

平安朝時代の歌風を完成したのは延喜の頃で、古今和歌集を以て代表せらるべき貫之・躬恒・友則・忠岑等の活躍した時代である。その歌風は舊套を脱し、新旗幟を樹立したもので、技巧と情緒とを巧みに結合した抒情詩である。こゝに形式も思想の範圍も大抵一定して、以後はこの外に出るものはなかつたのである。

その後、寛弘の頃に至つて漸く新傾向が起り、從來の抒情詩的傾向に敍景的趣味を加へ、更に又排技巧の傾向を生じたが、なほ前期の權威は盛んなもので、容易にその範疇を脱することが出來なかつた。とはいへ新進の氣は到底制せられるものではなく、漸次に古典的から現代的に移らうとし

尾上柴舟　名は八郎。明治九年岡山縣に生る。文學博士。東京女子高等師範學校教授。

古今和歌集　二十卷。醍醐天皇の延喜五年(一九五)、紀貫之・紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑等勅を奉じて撰す。

躬恒　凡河内躬恒。延喜十一年淡路權守に任ぜらる。

忠岑　壬生忠岑。藤原定國の隨身。攝津大目となる。

友則　紀友則。貫之の從弟。土佐掾となり、後小内記より大内記に轉じ六位を授けらる。

寛弘　一條天皇の御代の年號。(一〇〇四―一〇一二)

て、こゝに一種の新派を生じた。金葉和歌集を撰んだ俊頼がその中心である。この新派は、舊套中にありながら、俗語をも用ゐて一種の新味を加へたものであるが、古典的な反對黨は基俊を代表としてこれに抗爭した。この間に又折衷派とも云ふべき顯輔の一派も生まれて、歌界は餘程複雜になつた。併し要するに過去を理想とするものと現代を主とするものとの爭であつた。亂が極まれば英雄が出る。時代は遂に俊成を生んだ。俊成は基俊に學び、而も俊頼を慕ひ、又顯輔の傾向をも考へたのである。俊成の撰進した千載和歌集には、この三派併合の結果に成つた所の典雅があり、清新があり、殊に洗煉せられた趣味の多い語句に富んでゐた。

この傾向はやがて定家が覇を唱へた鎌倉時代の初期に於て、技巧的な含蓄の深い歌となつて現れるに至つた。これ

金葉和歌集　十卷。大治二年（一九七）、源俊頼が白河法皇の院宣を受けて撰進したるもの。

俊頼　源俊頼。堀河・鳥羽・崇德の三天皇に仕へ、左近衛少將兼木工權頭左京大夫たり。歌學上の著に無名抄・俊頼口傳等あり。

基俊　藤原基俊。官は左衛門佐に至る。歌學上の著に悅目抄あり。

顯輔　藤原顯輔。皇后宮亮に至る。崇德上皇の詔を奉じて詞花和歌集を撰す。

俊成　藤原俊成。後白河天皇の勅を奉じて千載和歌集を撰す。元久元年（一八四）歿、年九十一。

千載和歌集　二十卷。文治四年（一八八）、藤原俊成撰進す。

定家　藤原定家。俊成の子。新古今和歌集・新勅撰和歌集の撰者。仁治二年（一二四一）歿、年八十。

を撰集したのが新古今和歌集である。政權は既に武士に歸したとはいへ、それが爲に堂上は閑暇であつたので、公卿を中心とした歌道は愈〻その粹を發揮し、こゝに新古今和歌集は古今を綜合し千載に光被するの意氣を以て撰ばれ、歌道の發達を極めたのみならず、多大の影響を後世にまで及ぼしたのである。從來歌人に經典と崇められてゐた古今和歌集に新の字を冠せしめたのは、その撰者等の意氣を窺ふに足るものではないか。

平安朝時代ほど季節の變化を歌の題材とした時は無い。これは畢竟當時の歌人である公卿たちの生活に原因するのである。是等の歌人は殆ど都以外に足を踏み出すことがなく、宮仕と遊樂と物詣とのみに日を過し月を送つて居たのであるから、季節とそれに伴なふ變化とが大事件となつ

新古今和歌集　二十卷。建仁元年（一八六）後鳥羽上皇の詔を承けて、源通具・藤原有家・藤原定家・藤原家隆・藤原雅經・僧寂蓮等が撰進せるもの。

て目に映つたのである。その季節に應じて咲き、散り、啼き、歌ふ花木・禽鳥がまた驚喜と悲嘆との好材料であつた。春の詩材としては鶯・梅・櫻を主とし、若菜・霞・柳・藤・山吹などの優美纖麗なものが選ばれた。秋には風の音・蟲の聲・月の色・露の光・星・女郎花・紅葉・菊などの哀感を寄せるのに都合のよい縷細巧麗なものが主となつた。鐵を鎔かさんばかりの暑さ、篠を束ぬる夕立などは、當時の人の詩材とするには餘りに峻烈であつた。冬は引籠りの候で、見るものの少ない時節である。杜宇と雪とが夏と冬とに於て詩人の感興を惹いた殆ど全部であつたのである。

勿論季節に拘らぬものもあるが、概して前代にあつた所の材料の中で纖細なもののみを取り、殊に美しい麗しい方面を取つて詠じたのであるから、題材の範圍は非常に縮小

し、貧弱とならざるを得なかつたが、この題材の範圍はその後永く斯道に嚴守せられたのであつた。併しその一つ一つの觀察に於ては、隨分微に入り細を穿つてゐた。

同じ道を何處までも進む。これに倦怠せぬ人は無いであらう。必ず何か違つたものを求めて止まない。平安末期には既に自然の美の眞解と、漢詩の影響と、單調を厭ふ心と、繪畫の影響とが錯綜交雜して多くの客觀詩を出すに至つたのである。自然の美を認めてそれに深く思ひ入る。こゝに感ずるものは自分の身の幸不幸ではない、窮通ではない。奥の分らぬ味はひである。如何に名づくべきか、はた如何にして極むべきか、自分には分らない。たゞ語の幽趣微韻によつてのみその幾分を表はし得るのである。その情態を直寫してここに客觀詩は生じ、それに對する感想を披瀝してこゝに主

觀詩は生じたのである。

鎌倉時代の繪畫は平安朝時代のそれに比して、單に山川草木を寫すのみではなく、その中に含まれてゐるものを寫す所にまで進んでゐた。これに對しこれに接して居れば、その得る所のものは決して淺薄な感想ではない。必ず深い何ものかがある。當時の繪はその形體・傳彩から客觀詩を起したと共に、幽遠の趣致をも起したのである。

更にこれらの他に當時の人心に深く浸染したものは、榮枯盛衰が眼前に車輪の如く迅速に廻轉したことである。盛者必衰諸行無常が事實として現示せられた當時の人々は、また別種の感觸を起さざるを得ない。幾種の新宗教が唱道せられ、多くの渴仰者が忽ちに出來たことは、當時の人々が宗教希求の念の如何に熱烈であつたかを說明してゐる。そ

の心を心とした當時の歌は、たゞ表面だけ宗教者めかして、無常らしいことを云ひ、悟了したらしいことを云ふ歌とは自ら選を異にせねばならぬ。その全體を通じて、美しい中に暗い趣、深い味はひの見えるのは自然である。乃ち幽玄の趣致は又この佛教の弘通よりも現れたのである。

而してこの幽玄の趣致は源を人の思想と感情との深遠な處に發するのであるから、その深遠の度が進むと共に普通の辭句では發表し得ないこととなる。乃ち從來の發表の仕方では靴を隔てて痒きを搔くが如く、到底十分に述べ盡くすことが出來なくなるのである。こゝに於て從來の制約を破り、更に新しい表現法を用ゐて、極めて大膽に自己の思想感情を發表するものが現れた。此等の歌人の態度こそ實に敬服すべきものである。

平安朝時代に新旗幟を樹立した功に於て、典型を千載に殘した功に於て、吾人は古今和歌集を尊び、その撰者や六歌仙を始め當時の歌人等を重んずる。それと共に又、紛亂の後を受けてこれを平定し、さらに新しい典型を作り、歌をして至上の發達をなさしめた意氣において、新古今和歌集を崇め、その撰者をはじめ當時の歌人を尊敬して止まないのである。

―（古今と新古今）―

六歌仙　在原業平・僧正遍昭・喜撰法師・大伴黒主・文屋康秀・小野小町をいふ。

一五　君が千とせ

讀人しらず

わだつみの濱のまさごを數へつゝ
君がちとせのありかずにせむ

紀貫之

袖ひぢて結びし水のこほれるを
春立つけふの風やとくらむ

大江千里

鶯の谷よりいづるこゑなくば
春くることを誰かしらまし

伊勢

春がすみ立つをみすててゆく雁は

紀貫之　醍醐・朱雀の二天皇に仕へ和歌・國交の興隆の上に功勞著し。古今集撰者の一。天慶九年（一九〇〇）歿。

大江千里　歌中。中古三十六歌仙の一。延喜前後の人。歿年不明。

伊勢　大和守藤原繼蔭の女。宇多・醍醐二天皇の朝の女流歌人。天慶二年（一五九九）歿。

花なき里にすみやならへる　僧正遍昭

はちす葉のにごりにしまぬ心もて
何かはつゆを玉とあざむく　清原深養父

夏の夜はまだよひながら明けぬるを
くものいづこに月やどるらむ　藤原敏行朝臣

秋來ぬと目にはさやかに見えねども
風の音にぞおどろかれぬる　凡河内躬恒

かくばかり惜しと思ふ夜をいたづらに
ねて明かすらむ人さへぞうき

僧正遍昭　俗名良峯宗貞。桓武天皇の御孫。素性法師の父。天台宗の僧正。六歌仙の一。寛平二年（一八九〇）寂、年七十六。

清原深養父　歌人。中古三十六歌仙の一。延喜前後の人。

藤原敏行　歌人。能書家。清和・陽成・光孝・宇多・醍醐の五天皇に仕ふ。生歿の年代不明。

凡河内躬恒　紀貫之と相並んで、延喜歌壇の雙星と仰がる。古今集撰者の一。延喜前後の人。

久方の月のかつらも秋はなほ
もみぢすればや照りまさるらむ　壬生忠岑

吹くからに秋のくさ木のしをるれば
うべ山風をあらしといふらむ　文屋康秀

ぬれてほす山路の菊のつゆのまに
いつか千年をわれは經にけむ　素性法師

千早ぶる神代もきかずたつ田川
からくれなゐに水くゝるとは　在原業平朝臣

春道列樹

壬生忠岑　歌人。古今集撰者の一。康保二年（九六五）歿。

文屋康秀　六歌仙の一。清和・陽成の二天皇の朝の頃の人。

素性法師　僧正遍昭在俗の時の子。歌人。能書家。清和天皇より醍醐天皇頃までの人。

在原業平　第十二課註參照。

春道列樹　歌人。文章博士。延喜二十年（九二〇）歿。

山川に風のかけたるしがらみは
流れもあへぬもみぢなりけり

源宗于朝臣

山里は冬ぞさびしさまさりける
人めも草もかれぬとおもへば

坂上是則

み吉野の山のしらゆきつもるらし
ふる里寒くなりまさるなり

―（古今和歌集）―

源宗于　光孝天皇の御孫。歌人。天慶三年（九四〇）歿。

坂上是則　歌人。延長八年（九三〇）歿。

一六　歌謠について

田邊尙雄

我が國上古の音樂には宗教の音樂として神樂があり、軍樂として久米歌・吉志舞等があり、卽興的に歌ふ歌謠があつた。孰れも皆聲樂ばかりであつて器樂といふものは一つもない。實に日本民族はその原始狀態に於て聲樂的民族であつた。後になつて支那から進歩發達した所の形式的器樂が輸入されて、日本民族も大いに器樂の用法に熟練したのであるが、それにも係らず、支那の樣に純器樂として發達することを得ないで、何時の間にか又々聲樂化して行つてしまつた。支那の雅樂が純器樂として日本に入り、奈良朝や平安朝の初期には我が邦上流社會を風靡した程の勢力があつたにも係らず、平安朝の中期から之が多少日本化して來る

田邊尙雄　明治十六年、東京市に生る。音學理論家。國學院大學教授。

神樂　雅樂の一種にて、神祇を祭る歌舞をいふ。

久米歌　雅樂の一種。起源は本文に詳し。

吉志舞　同右。

雅樂　「雅正なる音樂」の義。本邦上古の歌舞及び唐・三韓より傳來せる樂等の總稱。

と、催馬樂や朗詠や今樣の如く聲樂となつてしまつた。鎌倉時代から以後、足利・德川の時代のもの、例へば、謠曲・宴曲・小唄等、悉く聲樂であることはよく人の知る所である。

神樂は今も尙神事に行はれて居るが、所謂神樂といふものに二種類ある。一は宮中賢所・伊勢の神宮其の他の大社で行はれて居る極めて嚴肅なものであつて、音樂を主としてゐる。之に反して他の一は、鎭守の社等で行はれて、俗に「里神樂」又は「お神樂」と呼ばれて居る、舞踊を主としたものであつて、滑稽なものが多い。所で今、宮中賢所や伊勢の神宮などで行はれる所の正神樂を聞くと、實に神聖な、嚴肅な、形式的なものであつて、頗る進步した儀式を備へて居る。斯樣な形式的なものが、原始的な古代から存在しようとは考へられない。歷史を按じても之は平安朝中期の新作である。里神樂の

催馬樂　雅樂の一種。歌を主とす。
朗詠　雅樂の一種。詞を主とす。
今樣　歌謠の名。轉じて歌曲にもいふ。
宴曲　舞曲の一種。
小唄　三味線に合はせて唄ふ短い俗謠。

方もその平民的なこと、舞踊的なこと、內容本位のこと、滑稽的なことに於て、原始的な所はあるけれども、今日行はれてゐる所の里神樂は、その技巧に於て、又劇的仕組に於て、決して原始的ではない。殊に現時の里神樂に就いて感ずることは、そのやり方が頗る支那の舞踊劇に似てゐることである。

一體、支那の中世散樂が日本へ入つて、鎌倉時代の田樂や猿樂の一部の起原をなして居るものであるが今日の里神樂は、恐らく是等の田樂などの影響を受けて發達して來たものであらう。で、予は、日本上古の原始的神樂の眞相を推測して見るに、少しも劇的な仕組がなくて、頗る平民的な、舞踊本位な滑稽なものであつたに相違ないと思ふ。

戰陣に用ゐた歌舞、卽ち軍樂も古くから種々あるが、その中最も名高いのは久米歌と吉志舞である。前者は神武天皇

田樂　歌舞の一種。
猿樂　歌曲に合はせて演ずる一種の舞樂。

大和東遷の時、三軍を鼓舞する爲にお作りになつたもので、頗る勇壯な舞がついてゐる。その舞を久米舞といふ。後者は神功皇后三韓征伐の御凱旋に際して安倍氏が舞うたのである。久米舞の方は今も尙、毎年二月十一日の紀元節に宮中で行はれて居るが、中々立派なものであつて、到底原始的のものとは考へられない。嘗て我が邦駐在の公使であつた一外國人が、紀元節に際して宮中へ招宴され、その雄大なること、舞踊作法の進歩してゐること、管絃樂の發達してゐること、歐洲の近世樂に匹敵し得るものなることを見て驚嘆したといふ話がある。樂器・音階・服裝等の點から考へ、又史實を按じて、今行はれてゐる久米歌は、著しく隋・唐音樂の影響を受けたもので、全く後世の新作であるといふことが言へる。

上古には非常に澤山の歌謠があつたことは、記・紀を見ると分る。孰れも皆、よく質實にその情を歌ひ出してある。これらは總べて卽興的に歌つたものであつて、後世の短歌の樣に色紙や短册に之を書き記してから人に見せるなどといふことは、上世には決してない。又豫め題を與へてから、その題意を按じて歌を詠むなどといふこともない。つまり音樂的であつた。それが中世になつて、形式的に發達して來るに及んで二途に分れて來た。その第一は、どこまでも之を音樂として取扱つて行かうとするのであつて、純然たる聲樂となつてしまつた。さうして中世の歌謠(催馬樂・今樣歌等)となつたのである。その第二の發達方向は、それが音樂を離れて文學として進んで來て、五七調の長歌や三十一文字の短歌となり、人々は之を讀み又は見て樂しむといふ風になつてしまつた。この文學上の歌謠も第一の方面に採り入れられ

て、所謂和歌の披講といふものが起つて來た。和歌の披講といふのは三十一文字の歌を一定の聲樂として歌ふ作法である。此の作法は宮中及び公卿の間に保存されて今日に及んだ。

現時毎年新春に際し、陛下の御前に於て歌御會の催されるのは卽ち三十一文字の和歌を純音樂として取扱つてゐる遺制である、

―日本音樂講話―

一七　歌の故郷

佐佐木信綱

古來、歌集は多いけれども、その想の純眞・簡素のうちに人心の基調を傳へて、さながら歌の故郷ともいふべく、詩歌の不朽の生命の源泉を爲せるものは萬葉集である。

萬葉集といふ名の起りに就いては「萬の世」といふ說と「萬の言の葉」といふ說と二つある。いづれも當時流行した文選・淮南子等の漢籍中の文字に出たものとされる。兩說とも道理があつて、いづれを正しいとも定め兼ねる。しかし今傳はつてゐる二十卷の雜然たる歌集の名稱としては、萬代に傳へるといふ意を寓した萬世に解するよりは、萬の言の葉をあつめた集と解しておく方が、吾人に適當な感じを與へる。

これを選んだのは大伴家持で、而も私選、かつ草稿の儘に

佐佐木信綱　文學博士。歌學者。明治五年三重縣に生る。帝國學士院會員。

萬葉集　二十卷。仁德天皇の朝より淳仁天皇の朝に至る四百餘年間の和歌四四九六首（詳しくは本文參照）を漢字の音訓を以て記錄したる最古の歌集。

文選　三十卷。梁の昭明太子蕭統が周・秦以來梁に至るまでの詩文を集めたるもの。

淮南子　二十一卷。漢の淮南王劉安の撰。

傳はつたもので、未だ十分整理をしないのである。併し草稿のまゝで精選してないといふことが、歌集であるだけに少しの障りも無いのみならず、却つて當時のいろ〳〵の歌風が伺はれて面白いのである。萬葉集が精選を經ずに傳はつたのは、寧ろ吾人の幸福である。草稿だけに、その體裁も半ば整ひ、半ば整つて居らぬ。卷數二十卷、卷々の歌數は素より一定せず、分類は雜歌・相聞(戀)・挽歌(哀傷)・譬喩・四季・雜歌等の目であつて、そを更に年代によつて順序するのが選者の意志であつたらしい。併しかゝる標準の明かに守られて居るのは小部分に過ぎぬ。

歌體からいへば、長歌二百六十二首、短歌四千百七十三首、旋頭歌六十一首となる。長歌・旋頭歌が斯く多くあるのは、此の歌集の特色である。

大伴家持 歌人。大納言旅人の子。聖武・孝謙の二天皇に歴仕して中納言に至る。延暦四年(一四四五)薨ず。

時代は奈良朝、更にくはしくは藤原朝時代・奈良朝時代を代表し、集中の歌は概ね其の間の作で、しかも短い藤原朝の間の作は、長い奈良朝の間の歌に比して數が多いやうに思はれる。しかし一々の歌に就いては、持統天皇以前の作もかなり有り、最も古くは仁德天皇・允恭天皇・雄略天皇の時代の作もある。

作者は其の名の知られたものと知られないものと相半ばし、知られたものに就いて見るに、上は帝王・皇后・皇族・大官より、下は庶人・遊女・乞食等に亙る有らゆる階級の人を含んでゐる。これまた後代の勅撰集に見ぬ此の集の特色である。

其のうたはれた題材から見ると、地理的に言へば北海道を除いて殆ど日本全國にわたつてゐる。大和をはじめ、近畿を中心として、東海・東山・西海・北陸・南海・山陽・山陰諸道の諸國

の、地名・風土は凡てうたはれてゐる。品物的に言ふと、鳥獸・魚介・草木の類から器財・服食に至る迄、凡て取扱はれてゐる。これだけでも、萬葉集の歌が當時の人々の日常生活の凡てと交渉して居た事がわかる。それで後世の歌に見るやうな特別の歌題と言ふものが未だ無かつたので、其の歌はいづれも當時の人々の實際の經驗と交渉して居る。要するに歌と言へば、特殊の人士が、花鳥風月の風流とか、名所とか、又一定の題目とかによつて、想を構へたものとなつて了つた後世の、狹い題詠とはまるで違つてゐる。それだけに歌として見て、到底後の歌に見得べからざる面白みがある。

次に萬葉集の奈良朝文明に於ける位置に就いて考へて見よう。

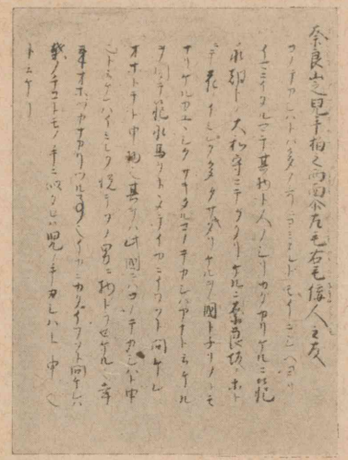
そも〳〵奈良朝といふのは、今更言ふまでもなく、わが國の文明上の黃金時代——固よりその文明は專ら帝都に限られてゐて、範圍の狹いものであつたが——であつた。而して丁度現今の我が國が、歐米諸國の文明を採り入れて立派な發達をしてゐる樣に、當時はその頃隆盛の域にあつた支那の文明を採り入れて、光彩眩ゆい有樣を呈してゐた時代であつた。

この奈良朝の文明が、後代に遺した殆ど不滅の事業として、萬世に傳へなければならぬものがある。これは一般の文明が進歩した後代、もしくは今後に於ても、思ふに永久にその光彩を失はぬのであらうと思はれる。それは何であるか。卽ち當時の美術と文學とである。而して文學とは、卽ちこの萬葉集の歌である。

奈良に遊んで、千年の風雨に堪へて今なほ當時の偉觀を

支那の文明　盛唐時代。文學方面にも李白・杜甫等の文豪輩出せし時代。

忍ばしめるところの幾多の建築物・彫刻物を觀た人は、我等の祖先が上世に有した立派な文明にまのあたり接して、一種神往の感に打たれざるを得ぬであらう。而してかの藥師寺の建築・彫刻、東大寺の大佛、三月堂の諸像等が出來たと同時代に、萬葉集が生まれたのである。萬葉集の作者も、彼等美術家も、共に同時代の人である。彼等によつて實に奈良朝文明は作り出されたのである。而も更に萬葉集の作者と、彼等美術家とが、それ〴〵奈良朝文明について有する位地と意義とを考へると、大いに異なるものがある。蓋し、彼等美術家たちが國民中の少數者たる天才であり、而も多くは



藥師寺　奈良縣生駒郡都跡村にあり。法相宗の本山。奈良七大寺の一。

挿繪　萬葉集抄。（宮內省圖書寮所藏）

東大寺　天平年中、聖武天皇の佛法興隆の御願によつて創立。華嚴宗の總本山。奈良七大寺の一。その本堂は大佛殿、その本尊は大佛。

三月堂　東大寺境內の堂にして、大佛殿の東北四百米餘にあり。

三韓・支那の歸化人、もしくはその子孫であつたのに、彼等萬葉の作者は當時の國民一般であつたといふことである。この點に於て、吾人は萬葉集によつて當時の我が日本國民の感情といひ、氣力といひ、知識といひ、道義的觀念といひ、卽ち國民性てふものを、血と肉とに於て感ずることが出來るのである。而も或はその美しさに於て、或はその雄々しさに於て、或はその敏さに於て、或はその敦厚といふことに於て、我が上代人の國民性は、歷史上大いに貴しとすべきものであつた。この事は、實に吾人が萬葉集によつて知り得るところであると同時に、その故を以て萬葉集は、實にかの諸美術品にもまして一層貴重なる人間的創作たるを得るのである。

萬葉集を有するは實に我等國民の誇である。

—（萬葉集選釋）—

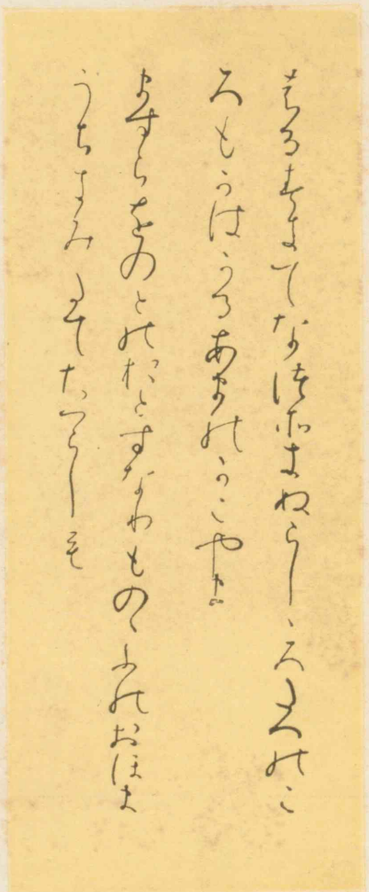
一八　奈良の榮

過近江荒都時作歌

柿本人麿

玉襷　畝火の山の　橿原の　ひじりの御世ゆ　あれましゝ　神のことゞ　つがの木の　いやつぎつぎに　天の下　しろしめししを　そらにみつ　大和をおきて　青丹よし　奈良山を越え　いかさまに　おもほしめせか　天ざかる　夷にはあれど　石ばしの　近江の國の　さゞなみの　大津の宮に　天の下　しろしめしけむ　天皇の　神のみことの　大宮は　こゝと聞けども　大殿は　こゝといへども　春草の　茂く生ひたる　霞立つ　春日かぎれる　百磯城の　大宮處　見れば悲しも。

柿本人麿　傳不詳。持統・文武兩天皇に仕へ、石見にて歿す。
近江ノ荒都　滋賀縣大津市の地に在りし天智・弘文兩天皇の帝都。
玉襷　「畝火」の枕詞。
橿原のひじりの御世ゆ　神武天皇の御代より。
あれましゝ神のことごと　現れ給ひし歴代の天皇。
つがの木の　つぎ〳〵の枕詞。「つが」は樅とも栂とも書く。
そらにみつ　「大和」の枕詞。
青丹よし　「奈良」の枕詞。
天ざかる夷　遠く都を隔てたる田舍。大津を指す。
石ばしの　「近江」の枕詞。
さゞなみの　「大津」の枕詞。
天皇　天智天皇。
かぎれる　覆むこと。
百磯城の　「大宮」の枕詞。



（元暦萬葉集所載）

反歌

さゞなみのしがの辛崎さきくあれど
大宮人の船待ち兼ねつ

さゞなみのしがの大わたよどむとも
昔の人にまたも會はめやも

望不盡山歌　山部赤人

天地の　分れし時ゆ　神さびて　高くたふとき
駿河なる　不盡の高嶺を　天の原　ふりさけ見れ
ば　わたる日の　影もかくろひ　照る月の　光も
見えず　白雲も　いゆきはゞかり　時じくぞ　雪
はふりける　語りつぎ　言ひつぎ往かむ　不盡の
高嶺は。

反歌

辛崎　大津市にあり。

大わた　辛崎の邊をいふ。

山部赤人　傳不詳。聖武天皇に仕ふ。

影もかくろひ　日の光もかくれて。

いゆきはゞかり　雲もこの山の尊嚴に近づきかねて中天に遠ざかつてかゝれり。

時じく　時ならず。時を定めず。

田兒の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ
不盡の高嶺に雪はふりける

思子等歌　山上憶良

瓜はめば　子どもおもほゆ　栗はめば　ましてしぬばゆ　いづくより　來りしものぞ　まなかひにもとなかゝりて　安睡しなさぬ。

反歌

しろ金もこがねも玉もなにせむに
まされるたから子にしかめやも

喩族歌　大伴家持

ひさかたの　天の戸開き　高千穗の　岳に天降りし　すめろぎの　神の御代より　梔弓を　手握りもたし　眞鹿兒矢を　たばさみそへて　大久米の

田兒の浦　靜岡縣富士郡の沿海。

山上憶良　大寶三年入唐し、慶雲元年歸朝す。聖武天皇の朝筑前守に任じ、天平五年（一三三）歿、年七十四。

まなかひに　眼の前に。

安睡しなさぬ　安眠することが出來ぬ。

なにせむに　如何にしてか（子の貴さに及ぶべき）。

ひさかたの　天の枕詞。

高千穗の云々　瓊々杵尊を指す。

梔弓　梔の木にて作れる弓。

眞鹿兒矢　鹿などを射る太き矢。

大久米の云々　天孫降臨の時、大伴氏の遠祖天忍日命が大久米部を率ゐて先導を勤めたることをいふ。

ますら健雄を　さきにたて　靫執りおほせ　山河を　岩根さくみて　ふみとほり　國まぎしつゝ　ちはやぶる　神をことむけ　まつろへぬ　人をもやはし　はき清め　仕へまつりて　あきつ島大和の國の　橿原の　うねびの宮に　宮柱　ふとしりたてて　天の下　知らしめしける　すめろぎの　天つ日嗣と　つぎてくる　君の御代御代　かくさはぬ　明き心を　すめらべに　極めつくして　仕へ來る　祖の司と　ことたてて　さづけ給へる　うみの子の　いや繼々に　見る人の　語り序でて　きく人の　鑑にせむを　あたらしき　淨き其の名ぞ　おほろかに　心おもひて　むなごとも　祖の名斷つな　大伴の　氏と名に負へる　ます

靫　矢を盛る器。

國まぎしつゝ　都とすべき處を求めて歩みつゝ。

かくさはぬ明かき心　隱さぬま心。

ことたてて　特に言ひ立てて。

あたらしき　惜しき。

おほろかに　おほよそに。おほろげに。

らをの伴。

反歌

しき島のやまとの國に明らけき
名に負ふ伴の緒心つとめよ

同

劍太刀いよゝ磨ぐべしいにしへゆ
さやけく負ひて來にしその名ぞ

—（萬葉集）—

伴の緒　大伴の一族を指す。

一九　萬葉時代の歌人

新保磐次

柿本人麿は石見國に生まれたりとも、又天和國に生まれたりともいふ。持統天皇の朝に草壁皇子の舍人となり、皇子薨去の後朝廷の小官に任ぜられ、其の後高市皇子に仕へしが、皇子亦薨じ給ふ。文武天皇の朝に石見國に赴任して、元明天皇の和銅年中、かの國にて卒しぬといひ、或は聖武天皇の朝の神龜又は天平年中に卒しぬともいふ。其の間、紀伊・伊勢・吉野等の遊幸に供奉し、或は諸皇子に從ひて名勝を探り、或は近江・石見・筑紫の諸國に遊びて、過ぐる所歌あらざ

新保磐次　一村と號す。新潟縣の人。文章家。前東京高等師範學校教授。昭和七年歿、年七十七。

萬葉時代　萬葉集に收めし歌の作成されし時代。舒明天皇より淳仁天皇まで百三十年間（一六九—一四二四）

草壁皇子　天武天皇の第一皇子。御母は持統天皇。朱鳥三年（一六八）薨、御年二十八。

挿繪　柿本人麿畫像。

高市皇子　天武天皇の皇子。持統天皇の十年（一六六）薨ず。

和銅　元明天皇の御代の年號（一六八—一七一四）。

るはなし。就中最も人口に膾炙するものは、百人一首に載する所なること言ふまでもなし。

その吉野の遊幸に供奉せる時の歌、

みれどあかぬ吉野の川のとこなめの
絶ゆることなくまたかへりみむ

又石見より妻に別れて上る時の歌、

石見のや高角山の木の間ゆも
吾が振る袖を妻見つらんか

死に臨みて自ら傷みて作れる歌、

鴨山の岩根しまけるわれをかも
知らずと妻が待ちつつあらん

皆哀情痛切にして、鬼神を泣かしむべし。

人麿特に長歌に長じ、古今獨歩と稱せらる。然れども、官位

百人一首に云々　足曳の山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかもねん。

は甚だ卑しくして、位は六位以下、官は石見掾若しくは目に過ぎざるべしといふ。古今集の序に「正三位人麻呂」とあるは、後世の贈位にやあらん。柿本集に「唐土にありて。」と題せる歌あれど、彼が入唐亦其の詳なるを知り難し。要するに、人麿は微賤の身を以て詞藻を雲上に達したるものにして、後世壬生忠岑が長歌の中に、

あはれ古ありきてふ　人麿こそはうれしけれ
身は下ながら言の葉を　天つ空まで聞えあげ

といへるこそ事實なるべけれ。

山部赤人の傳も詳に知り難し。神龜・天平の間彼もまた屢〻車駕に供奉して、紀伊・吉野等に至り、或は自ら東國に遊ぶ。其の富士の歌は、百人一首によりて兒女子にも知らる。彼の富士の歌猶數首あり。

壬生忠岑　第十四・五課註參照。

神龜　聖武天皇の御代の年號(一三六四—一三八九)。

天平　聖武天皇の御代の年號(一三八九—一四〇九)。

富士の嶺を高み畏み天雲も
　　い往きはゞかり棚引くものを

和歌の浦の歌亦世に知らる。

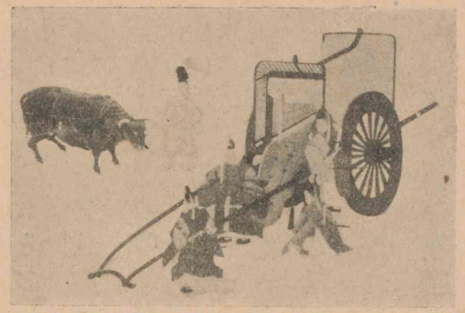
和歌の浦に潮滿ちくればかたをなみ
　　あし邊をさしてたづ啼きわたる

前首は雲を人格化して、其の畏敬の狀を詠じ、後首は滿潮の時の鶴の恐慌を敍す。ともに巧を假らずして、其の妙神に入れり。

人麿は長歌に長じ、赤人は短歌に長ず。人麿は善く情を抒べ、赤人は善く景を敍す。紀貫之は二人を評して、「人麿は赤人が上に立たんこと難く、赤人は人麿が下に立たんこと難くなんありける。」といへり。賀茂眞淵が人麿を評したる大意に、「其の長歌の勢は風雲に乘じて長空を行く龍の如く、詞は大

賀茂眞淵　縣居と號す。國學者。昭和六年(一四三九)歿、年七十三。

海に潮の湧くが如し。短歌の調は勇將の弓弦を鳴らすが如く、深き哀情は千早ぶる神をも泣かしむべし。」といへり。又赤人を評して曰く、「長歌の詞は吉野川の清きが如く、心は富士の嶺の高きが如く、たゞそれ美を盡くせり。短歌は巧を爲さずして自然に妙なるは、本心の高尚なるが致す所か。譬へば檳榔毛の車にて大路を渡る貴人の聲色を動かさざるが如し。」といへり。世に二人を並べ稱して山柿といふ。



挿繪　檳榔毛の車。

山柿に亞げる詩人を山上憶良とす。憶良は大寶年中遣唐少錄として入唐せし人なれば、其の漢學に秀でしこと知るべし。歌は山柿に遊覽の作多きに反し、是は多く題を人事に

大寶　文武天皇の御代の年號(一六一―一七四)。

取り、君臣・父子・夫婦の情を詠じ、社會人生の有樣を歌へり。嘗て宴席より歸る時、

憶良らは今は罷らむ子泣くらむ
そのかの母も吾を待つらむぞ

天平二年彼が筑前守たりし時にや、「貧窮問答の歌」を作りて地方貧民の苦を訴へたり。其の中に、

天地は廣しといへど　吾が爲は狹くやなりぬる
日月は明しといへど　吾が爲は照りやたまはぬ
いとのきて短き物を　端切るといへるが如く
笞取る里長が聲は　閨戸まで來立ち呼ばひぬ
かくばかり術なきものか　世の中の道

以て官吏誅求の狀を述べたり。嘗て病に臥したる時、

丈夫や空しかるべき萬代に

語りつぐべき名は立たずして

感慨淋漓として、懦夫を立たしむるに足れり。眞淵彼が歌を評して、「言質朴にして心美し。久米部の武士の武裝して舞ふが如し。」といへり。

萬葉集の選者は橘諸兄にして、大伴家持が修補せしものなりといひ、異說猶多けれど、家持の手に成りたることは疑ひなし。家持は百人一首の中納言家持にして、陸奥より黃金を進獻せる時、

すめらぎの御代榮えむと東なる
みちのく山にこがね花さく

と詠ぜし人なり。萬葉集中一二流の歌人にして、最も多く武士的の歌を詠ぜり。總じて萬葉の長所は長歌に在り。後世之に及ぶものなし。

―〔趣味の日本史〕―

橘諸兄　歌人。左大臣。天平寶字元年（一四一七）薨、年七十四。

二〇 大和國原

武田祐吉

日本文學は、日本群島に居住する民族の間に發生し生育した文學であるが、その中特に大和の國に居を占めてゐた人々が有力なる文化を釀成し、その所有する文學が遂に國文學の主流をなすに至り、爾來悠々三千年、わが國文學史を貫流したのである。かくて大和の國は永い間文化の中心となり、現存せる上代文學に關する諸文獻は、おほかたこの地に於て成立した。

神武天皇が皇居を橿原の地に奠め給うてから、千三百數十年、歷朝おほむね高市・十市・磯城の三郡の中に都せられて、他鄕に移つたことは寧ろ稀であつた。當時の皇居は一代ごとに處を異にして宮殿を營んだのであるから、その造營も簡單であつた。皇居の所在地は必ずしも都邑を形成せず、國民が集團をなして散在した聚落の內に於て移動せられたのである。

かくて泊瀨・飛鳥・曾我の諸川の流域に居住した人々の間に原始文藝は養育せられたのである。泊瀨川・飛鳥川などの流域は、昔と今とは異なるであらう。これらの川は土砂を押流すので、大雨の後にはもとの河床が高く涸れて、あらぬ處に濁流の漲るのを見出す。飛鳥川の淵瀨は古來變り易きものとせられてゐたのである。香具山の麓に海原の如き埴安の池を見たのも、多武峰から流れ落ちる倉梯川のいたづらであつたであらう。

飛鳥川の東に香具山・耳成山、西に畝傍山があつて鼎立してゐる。いづれも平野の中に孤立した美しい小山である。畝

武田祐吉 明治十九年、東京市に生る。文學博士。國學院大學教授。

橿原 奈良縣高市郡白橿村の地。

高市・十市・磯城 高市・磯城は奈良縣の郡。十市は今磯城郡に屬す。

泊瀨川 奈良縣宇陀・磯城の郡界より發し初瀨町を經て、西北流して佐保川に合す。

飛鳥川 奈良縣高市郡稻淵村に發し、飛鳥村を經て北流、大和川に合す。

曾我川 奈良縣高市郡に在り。眞菅村・金橋村間を流れ百濟川となりて大和川に注ぐ。

香具山 奈良縣磯城郡に在り。奈良盆地の南部の有名の山。

多武峰 奈良縣磯城郡に在り。山腹に談山神社あり。

耳成山・畝傍山 奈良縣高市郡に在りて香具山と共に大和三山として有名なり。

傍山はやゝ形が鋭い。その附近は昔から森林であつたと思はれる。耳成山は形がなだらかである。古來梔子の樹を以て有名であるが、今も猶存してゐる。天の香具山はその背後に高い山を控へてゐるので、やゝ目立たない。然し古代から最も人事と交渉の多い山で、神事にはこの山の眞榊を根こじにし、又この山の土を取つて齋瓮を作つたのである。

この三山の地が古代文化の中心地であつた。更に東方には三輪山から續いて、泊瀬の山々が聳え、南には多武・高取の山、西方には葛城の連嶺が雲を凌いで、大和川を隔てて北方の生駒山脈に連なつてゐる。また多武・高取の彼方には吉野川を隔てて吉野の群山がそゝり立つてゐる。たゞ北方のみはやゝ開けて奈良・郡山の平原を控へてゐるが、それもその末は奈良山が霞をひいて遮つてゐる。かやうに四方山を以

梔子　アカネ科の常綠灌木。莖は二・三米、葉は長楕圓形で、對生す。花は白色大形で香氣あり。

齋瓮　古、酒を盛りて神に供へし陶器の壺。

三輪山　奈良縣磯城郡三輪町の東に在る山。

高取山　奈良縣高市郡の南境に峙ち吉野郡に跨る。

葛城山　奈良縣と大阪府との分界なる金剛山脈の一峯。高さ九六〇米。

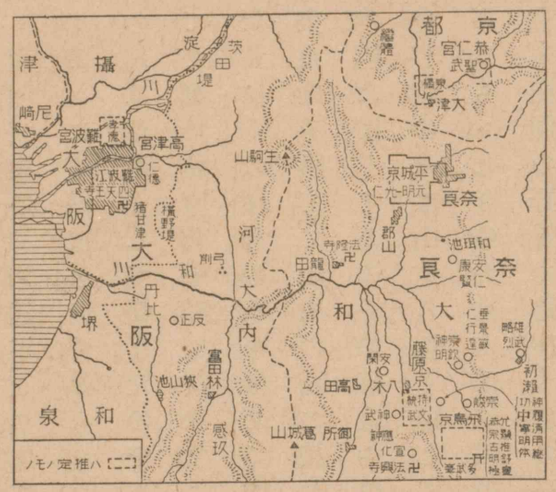
大和川　水源は泊瀬川。奈良盆地を北西流して大阪灣に注ぐ。近畿第二の大河。

生駒山脈　奈良縣と大阪府との界をなせる山脈。奈良縣生駒郡の西に在り。

吉野川　大臺ヶ原山を發し奈良縣吉野郡を經て、和歌山縣に入りて紀伊川となりて海に入る。

奈良山　奈良市・添上郡佐保村・生駒郡都跡村の北

て圍まれた土地であるから、氣候は溫和であるが、寒暑の差はやゝ激しい。昨日まで青葉に茂つてゐた山も、一夜の雨に黃葉してしまふやうに感じられることも少なくない。併し京都ほどの氣象の激變はなく、雨量は少なく、風もさして烈しくはない。晴れて雲の退くまに仰ぎ見れば、遙かなる吉野山に今朝は雪の白きを見る。月は卷向の弓月が嶽より出でて、玉くしげ二上山に沈む。この平和の鄕に古聖帝は皇居を奠められたので、そこ



なる丘嶺の總稱。

挿繪　大和附近の圖。附皇居變遷圖。

弓月が嶽　卷向山の高峯の名。卷向山は奈良縣磯城郡纒向村の東嶺。

二上山　金剛山脈の一峯。高さ四七四米。

に住む人々の溫和な心は、そのかみの埴輪の目鼻にも偲ばれるのである。

元明天皇の和銅三年、天皇は都を最北の奈良平原に遷して、こゝに平城宮を造營せられた。爾來七代七十餘年の間、この地は帝都として榮えたのである。この南方は大和川を隔てて飛鳥・藤原の平野に接し、東には春日山・高圓山があり、佐保川はその溪谷の水を併せて、南流して大和川に注ぐ。北は奈良山を隔てて山城の國に接し、西は生駒の山脈を以て河內國に隣してゐる。その氣象や風光は三山の地と大差はないが、時の人は山遠き都と稱して、天空の開豁を喜んだのである。もゝしきの大宮人は佐保の內に邸宅を連ねて、馬醉木散る高圓の野邊に遊び、大君の三笠の山の親しき姿を仰ぎ見つゝ、ひたすら唐代の文物の移入に努めた。この間に古事

元明天皇 第四十三代（御在位三六七—三五四）

飛鳥 奈良盆地南部。今の高市郡岡村より飛鳥村の邊の一帶の稱。

藤原 奈良縣磯城郡香具山の山麓にありしと傳へらる。

春日山 奈良市の東方。山麓に春日神社あり。

高圓山 春日山の南方に隣れる山。

佐保川 奈良市の東方高地に發し、市の北西方を經、南西流して大和川に合す。

三笠の山 春日山の北に在る全山美しき芝生の草山。

記・日本書紀は成り、懷風藻は編せられ、律令は再び改修せられた。萬葉集の前身である多くの歌集も、恐らくはこの時代の前半に成つたのであらう。時に都を山近き恭仁の宮、難波の京に移したこともあつたけれども、それも一時で、またもとの平城の京に還つた。時代はもう都を遷すには餘りに面倒な事情を伴なふやうになつてゐたのであらう。

青丹よし奈良の都は「咲く花の薫ふが如し」と歌はれてゐる。香具山のふりにし里は鶉鳴く里と荒れたけれども、夏草の茂みを分けて草深百合の花咲みに咲ますを尋ぬる人もあらう。それより高取の山を越ゆれば、山峽の間を流れて吉野川は遠白く西に走る。後の吉野朝の花は山上であるが、萬葉人の遊んだところは川の畔であつた。鮎子さばしる瀧つ河內に離宮を建てられたのは昔からのことで、天武天皇・持

懷風藻 一卷。我が國最初の漢詩集。孝謙天皇の御代に成る。

恭仁の宮 京都府相樂郡、今の瓶原・加茂の二村、木津町の邊一帶を稱す。

難波の京 現在の大阪市東部の丘上。

青丹よし 青丹よし奈良の都は咲く花の匂ふが如くいま盛りなり。（萬葉集）

統天皇以後も屢、この宮に行幸せられた。

萬葉集頃の人々の通路は、葛城山の麓なる巨勢の野を通つて吉野川の溪谷に出た。それより下つて眞土の山を越えて紀伊の和歌の浦へも出た。難波への往還は、奈良からは生駒山脈を越えた。峰の上に匂へる花を仰ぎ見つゝ、風な吹きそと龍田の神に言擧げして峠に出れば、かゞやく難波の海は眼の前に廣げられて、遣唐の船舶も、その岸の住吉の神を祈つて眞楫しゞぬき漕ぎわかれたのである。奈良より北へ奈良坂を越えれば、泉川の清流は鹿背山の間を流れて來る。ささなみの近江の國へはこれから通ずるので、北國への旅には必ず越えねばならぬ峠であつた。

大君のまします時は卽ち都であるが、天皇の御心が一旦その地を離れて北へ奈良坂を越え給へば、さしもとことは

和歌の浦 和歌山市の南四粁の海灣。

龍田の神 風神たる天御柱命・國御柱命を云ふ。生駒郡三郷立野に官幣大社龍田神社として祀る。

住吉の神 古來、海路を守る神として漁業・航海業者の間に信仰ある神。

にと思ひ定めて造られた奈良の都も、いつしか衰へて僅かにその東部のみが興福寺の勢力の下に殘つた。これが現在の奈良市である。

立ち替り古き都となりぬれば
道の芝草長く生ひにけり

これは天平の中ごろに、都を一時奈良から山城の恭仁に移した當時の作である。今の奈良に旅する人は麥圃の間にそのかみの平城宮の大極殿の礎石の遺跡を見て、また同じ感慨に浸るであらう。併し工作物は亡びても、いにしへ人の生活の蹤は儼として今も殘つてゐる。古人の殘した文藝の力は容易く吾人の心の上に古人の心を喚び起さしめる。文化の故郷を偲び祖先の心情を懷かしむ者に取つては、大和の國の一草一石も意味のある存在である。——(上代日本文學史)——

興福寺 法相宗の大本山。奈良市公園の地内に在り。

立ち替りの歌 萬葉集卷六に出づ。

大極殿 大内裏八省院の中央にあり。天皇の朝政を見たまひ、また卽位の大典を行はせられし正殿。

二　祝詞につきて

五十嵐　力

「祈年祭」の祝詞は、「延喜式」の中に跡を留めた三十篇足らずの古祝詞の中最も名高いものの一つで、殊に次に引く一節は多くの學者から日本民族本來の使命・抱負を道破した大文章と視られて居り、或少數の熱心家からは、東西古今に通じて天地間第一の文章とも視られて居るものである。

それは伊勢に坐す天照大御神の神德を稱へて年穀の豐熟を祈つたものであるが、いかにも蒼古素樸な言句の中に宏遠雄大正々堂々たる抱負をいひ現したもので、これを國民永久の理想とするに異論はなく、また古來の國學者の與へた解釋にも、大體に於て異論はない。併しただ一つ私の不審に思つて居るのは、「青海原は棹柁干さず。」から「長道間なく

五十嵐　力　第十一課註參照。

祝詞　神前にて朗讀する祭文。

祈年祭　陰曆二月四日、風雨の災害なく年穀の豐熟せんことを神祇に祈る祭。

延喜式　五十卷。法令の施行細則を記せるもの。延長五年（一五八七）藤原忠平撰進す。

立て續けて。」までの數句の意義をば、朝貢の船舶・馱馬の連續することと取るべきか、或は皇化を普及し、民禍を刈除し、理想を弘布する我が宣傳使の海陸兩路に於ける行列と見るべきかといふ點である。

私かに思ふに、是は朝貢の船や馬が遠近の領國から來ることではなくして、多分皇化宣傳使が勢揃ひして出かけて行くことであらう。向うから來るのではなくして此方から往くのであればこそ、「船の艫の至り留る極み、馬の爪の至り留る限り。」とは云つたのであらう。「陸より來る道。」と云はずして、「陸より往く道。」と云つたのであらう。また船を滿て續け、馬を立て續けて、狹き國を廣くし、峻しき國を平かにするといひ續ける以上は、どうしても一種の理想を持つ團體の積極的遠征を意味すべき筈で、小弱國が叩頭して強大國の主權

者に奉る朝貢の船や馬と解して、狹き國を廣くし、峻しき國を平けくするといふやうに取るのは、何の意義をも成さぬことである。かたがたこれはどうしても皇化宣傳使が仁義・平和の大道を高く揭げて、有形的には狹き國、險阻な國を平坦にし、精神的には惡政惡俗に苦しむ國を化して道ある國とするといふ意味に取るべきであらうと思ふ。

かやうなことは一見文法や古文辭に囚れた好事家の暇つぶしのやうにも見えるが、併し考へやうによつては、古文を正しく解釋するのは一種の大切な仕事で、殊に建國當初に國民の大理想の宣せられた偉大な文章の意味を、左と解くべきか、右と解くべきか、消極的に解釋すべきか、積極的に解釋すべきか、坐つて居て御土產を貰ふことと取るべきか、難路を切り開いて尊い贈物を憐な人に與へることと取るべきかは、國文學に携る小さき學徒としてのみならず、日本國民としても輕視すべきことではあるまいと思ふ。

この文章に對して、かういふ解釋を與へた人が既にあるかどうか。私の知る限りでは、鈴木重胤が「祝詞講義」の中に、

さて船の滿て續くと云ふに、二義に亙りて聞ゆること有り。其の一は八百船千船の外國より參り湊ひて萬國の酋長等の貢賦を奉る義と、一は狹き國は廣く峻しき國は平けく爲りて、國土・人民の漸く大いに蕃息して、皇孫命の國を弘め給ふ義とを兼ねたり。

とあつて、多少似通つて居るやうにも見えるが、これはたゞ狹き國峻しき國といふに關聯させて見ただけで、我より往くといふ意味は現れて居ないやうに思はれる。

此の解釋を、或は神代の事實と思ひ比べて不妥當だと思

鈴木重胤　淡路國（兵庫縣）の人。國學者。文久三年（一八六三）歿、年五十二。

祝詞講義　二十六卷。延喜式の祝詞を講義せるもの。

ふ人があるかも知れぬ。それは私も認める所である。けれども、此の點に關しては、朝貢說の方も同じことである。要するに、是は原始時代に於ける吾等の祖先の頭に描かれた理想の現れと見るべきで、針小棒大に寫し出された誇張ではあるが、同時にうぶな心に實現を豫期せられた主觀的事實と見るべきであらう。そして此の見方を以てすれば、遠くは伊邪那岐命が天照大御神に、「高天原を知らせ。」と言ひ、月讀命に、「夜の食國を知らせ。」と言ひ、須佐之男命に、「海原を知らせ。」と言はれたのも、宇受賣命が海中の魚族に對して、降臨された皇孫に從ふか否かと問うたのも、大國主命や日本武尊が山河を跋涉しての功業も、四道將軍の派遣も、皆一種の皇化宣傳と見るべきであらう。これが公文書的の傍證としては、崇神天皇の十年、四道將軍を派遣する時に下された詔勅に、

民を導く本は敎へ化くるにあり。今既に神祇を禮ひて災害皆耗きぬ。然れども遠荒の人ども、なほ正朔を受けず。これ未だ王化に習はざればか。それ群卿たちを選びて、四方に遣して朕が憲を知らしめよ。

とあるのが、此の祝詞に現れた積極的風化主義・仁義的帝國主義の史的實在を裏書するものであらうと思ふ。

祝詞については、文法的・修辭的・心理的に見て、精細に其の意義を調べ直すべき點が可なり多い。祝詞は傳說を大體そのまゝに書いた「古事記」などとは違つて、上代人が神々を慰める爲に美辭麗句の綴り合はせに、小さい頭を惱ました結果の作であつて、單文を書くに適した文章上の原始人が複文を書いた爲に、かやうに後の研究者に疑惑の種を遺し、同時に努力の種を遺したのであらう。

—（國語の愛護）—

四道將軍　崇神天皇十年、大彥命を北陸に、武淳川別を東海に、吉備津彥を西海に、丹波道主を丹波に遣してその地を治めしむ。

二二　神武天皇の御東遷

神倭伊波禮毘古命、其處より廻りて、熊野村に出でませる時に、大きなる熊、出で入るとほのかに見えて卽ち失せぬ。ここに命、俄に醉心地になりまし、また御軍も皆醉ひ臥したりき。この時に熊野の高倉下、刀を齎ちて、天つ神の御子の臥し給へる處にまゐり來て獻る時に、御子忽ち寤めまして、「長寢しつるかも。」と詔り給ひき。乃ちその刀を受け取り給ふ時に、その熊野山の荒ぶる神自ら皆切り仆さえて、かの醉ひ臥したる御軍ことごとく寤めたりき。

御子よりてその刀を獲つる故を問ひ給へば、高倉下み答へ申さく、「おのれ夢に、天照大神、建御雷神を召して詔りたまはく、『葦原中國はいたくさやぎてありけり。我が御子達惱

熊野村　和歌山縣（紀伊國）牟婁郡の古稱。

みますらし。かの葦原中國は專ら汝が言向けつる國なれば、汝降りてをさめよ。』とのり給ひき。建御雷神み答へ申して、『おのれ降らずとも、專らかの國平けし刀有れば降してむ。高倉下が倉の棟を穿ちて、そこより墮し入れむ。』と申し給ひき。さて建御雷神おのれに、『汝が倉の棟を穿ちて、この刀を墮し入れむ。汝取り持ちて、天つ神の御子に獻れ。』と教へ給ひき。乃ち夢の教へのまゝに、つとめておのが倉を見たるに、信に刀ありき。そは獻るこの刀にこそ。」とまをしき。

こゝに大神、亦、高木神をして御子の命に、「こゝより奥つ方にな入りましそ。荒ぶる神いと多かり。今天より八咫烏をおこせむ。その道引きのまゝに後よりいでますべし。」と諭し申し給ひき。よりてそのみ諭しのまゝに、その八咫烏の後よりいでましき。

こゝに宇陀に、兄宇迦斯・弟宇迦斯の二人ありけり。先づ八咫烏を遣はして、二人に、「今天つ神の御子いでませり。汝ども仕へまつらむや。」と問はしめ給ひき。然るに兄宇迦斯、鳴鏑をもちてその使を待ち設けて射返しき。その鳴鏑の落ちたりし地を訶夫羅前といふ。兄宇迦斯、御子の御軍を待ち擊たむとて軍を聚めしかども、得聚めざりしかば、仕へまつらむといつはりて、大殿を造り、その殿の内に押機を張りて待ちける時に、弟宇迦斯まづ御子の命の許に參り來て、拜みて白さく、「あが兄宇迦斯、天つ神の御子の使を射返し待ち攻めむとして、軍を聚むれども、得聚めざれば、殿を造り、その内に押機を張りて待ち取らむとす。」と白しき。こゝに大伴連等が祖道臣命、久米直等が祖大久米命二人、兄宇迦斯を召して罵りていひけらく、「汝が作れる大殿の内には、おのれまづ入りて、そ

宇陀　大和國（奈良縣）宇陀郡宇賀志村。

の仕へまつらむとする狀を明かしまをせ。」といひて、卽ち刀の欄を取りしばり、矛執り矢刺して追ひ入るゝ時に、兄宇迦斯、おのが張りおける押機に打たれて死にき。卽ち引き出だして斬り屠りき。其處を宇陀の血原となむ謂ふ。

然してその弟宇迦斯が獻れる大饗をば、ことぐくその御軍どもに賜ひき。この時に御歌よませ給ふ。

宇陀の高城に　鳴罠張る　わが待つや　鳴はさやらず　いすくはし　鯨さやる　前妻が魚乞はさば　たちそばの實の無けくを　こきしひゑね　後妻が魚乞はさば　いちさかきの實の多けくを　こきだひゑね　えゝしや　こしや　あゝしや　こしや

其處よりいでまして、忍坂の大室に到りませる時に、尾ある土雲八十建、その室に在りて、猛り立ちて、待つ。こゝに御子

たちそば

いちさかき

忍坂　奈良縣磯城郡忍坂村。

の命の仰をもちて、八十建に饗を賜ひき。その時、八十建に宛てて、八十膳夫を設けて、おの〳〵刀を佩ばしめ「歌を聞かばもろともに斬れ。」と誨へ給ひき。その土雲を擊たむとすることを明かせる歌、

忍坂の大室屋に　人さはに來入り居り　人さはに
入り居りとも　みつみつし久米の子が　頭椎い石
椎いもち　擊ちてしやまむ　みつみつし久米の子
等が　頭椎い石椎いもち　今擊たば善らし

かく歌ひて、刀を拔きて一時に打ち殺しつ。

その後、登美毘古を擊ち給はむとせし時の大御歌、

みつみつし久米の子等が　粟生には韮一莖　其根
が莖　其根芽つなぎて　擊ちてしやまむ

また、

くぶつつい

みつみつし久米の子等が　垣下に植ゑし薑　口ひ
びく　われは忘れじ　うちてしやまむ

また、

神風の伊勢の海の　大石に這ひもとろふ　細螺の
い這ひもとほり　うちてしやまむ

又、兄師木・弟師木を擊ち給へる時に、御軍暫しは疲れてありき。その時の大御歌、

楯並めて　伊那佐の山の木の間よも　い行きまも
らひ戰へば　吾はや飢ぬ　島つ鳥鵜養がとも　今
助けに來ね

かくのごとく、荒ぶる神どもを從へやはらげ、參り來ぬ人どもを拂ひたひらげ給ひて、畝火の白檮原宮にましまして、天の下しろしめしき。

―〈古事記〉―

したゞみ

二三　古典と日本精神

河野省三

我が古典は、我等日本民族祖先の活動の跡であり、生活の姿であり、心の俤であり、而して理想の鏡である。それ故、我が古典は、日本心の故郷でもあり、日本歴史の源流でもあり、又實に日本精神の最も古い記録でもある。

我が古典の主要な大部分は、我が上代に於ける日本民族の精神と生活との貴い記録であるからして、我が日本民族の努力によつて形成されたところの、國體や、文化や、道德や、信念や、情操の、正しい姿と、その展開の傾向とは、最もよく之を是等の古典に求めることが出來る。否、是等を措いては他に又、之を多く探し得ないのである。それほどに我が古典は貴いのである。そこから江戸時代後半期に於ける國學といふ力強い學風が起つたのみならず、日本歴史、卽ち日本國家、若しくは日本民族の數千年間に於ける數次の偉大な轉回は、毎に此の古典の傳へる建國精神への反省であり、憧憬であり、復古であつた。

我が古典の中に在つて、最もよく日本建國の精神を示し、最も高く日本民族の信念を明かにし、また最も深く日本民族の情操、卽ち日本心の特性を湛へてゐるものは、天照大御神を中心とした神々に關する傳へ說であるそれは日本民族の有ゆる活動の出發點であり、日本歴史の永遠なる發展の源頭である。吾人は日本精神の最も純な正しい姿と働とをそこに見出すことが出來る。古典乃至神話は、何處に在つても大抵その民族魂の結晶だからである。

昭和改元の前後から、建國の精神に還れといふ聲が益〻各

河野省三　明治十五年埼玉縣に生る。文學博士。國學者。國學院大學學長。

我が古典云々　茲での古典とは、古事記・日本書紀・祝詞式・萬葉集・風土記等をいふ。

國學　所謂皇國學（ミクニマナビ）・純神道にして、荷田春滿の始めて之を唱へ、賀茂眞淵・本居宣長を經て、平田胤篤・橘守部等繼承せり。

方面に高まり、又、滿洲事變と思想問題と國際國難とに絡んで、日本精神の自覺が愈〻全國的に强まつて來た時に當つて、我が古典に對する國民の關心が、從來多く比を見ないほど、深まつて來たのは、正に雄辯に此の古典と日本精神との密接な關係を立證するものである。此の事は、大化の改新後、國史卽ち古典撰修の機運が進展し、建武中興の前後、公卿・神官・僧侶・學者の間に、古典卽ち神代卷に對する研究心が勃興し、又江戸幕末に於ける古典の研究が、明治維新に對する極めて强い原動力となつたことなどを思ひ合はせると、一層この關係が明瞭となつて來るのである。—（日本精神の研究）—

新制中等新國文　卷十　終

滿洲事變　昭和六年九月十八日奉天北方に於ける日支衝突に端を發し、戰局滿洲各地に擴大、昭和八年五月三十日北支作戰後の日支停戰協定により一段落を告ぐるまでの全面的戰鬪の總稱。

大化の改新　孝德天皇の御世、族制分權を改めて朝廷集權とした大改革。

建武中興　後醍醐天皇の元弘三年六月鎌倉幕府の既に亡びたるを以て、天皇船上山より京師に還幸せられ、天子親政の革新を行はせられしを云ふ。

振替貯金口座大阪七四三番　印刷

國文學史年表（上古—近古）

天皇（御在位）	著名作家（生年—歿年）	著作物	參考
神武（一—七六） 綏靖（八〇—一二三） 安寧（一二四—一五〇） 懿德（一五一—一八四） 孝昭（一八五—二六八） 孝安（二六九—三七〇） 孝靈（三七一—四四六） 孝元（四四七—五三三）		〔傳說〕	神武天皇御即位（紀元元年元旦）
開化（五三四—五三三） 崇神（五三四—六三一） 垂仁（六三二—七〇〇） 景行（七〇一—七九〇） 成務（七九一—八五〇） 仲哀（八五一—八七〇） 應神（八七一—九七〇） 仁德（九七一—一〇五九）	日本武尊（歌）七四二—七七二 菟道稚郎子（學）？—九七二		四道將軍派遣（五七二） 神功皇后新羅征伐（八六二） 阿直岐來朝（九四四） 王仁來朝（九四五） 始めて史官を置く（一〇六二）
履中（一〇六〇—一〇六六） 反正（一〇六七—一〇七一） 允恭（一〇七二—一一〇〇） 安康（一一〇一—一一〇四） 雄略（一一〇五—一一四四） 清寧（一一四五—一一四八） 顯宗（一一四九—一一八四） 仁賢（一一八五—一一八八） 武烈（一一八九—一一九八） 繼體（一一九九—一二〇七） 安閑（一二〇八—一二〇九） 宣化（一二一〇—一二一九）		〔歌謠〕 〔祝詞〕 〔尋詞〕 〔宣命〕	
欽明（一二二〇—一二三一） 敏達（一二三二—一二四五） 用明（一二四六—一二四七） 崇峻（一二四八—一二五二） 推古（一二五三—一二八八） 舒明（一二八九—一三〇一）	聖德太子（學）一二二二—一二八一		百濟より佛像・經論を獻ず（一二二） 十七箇條憲法（一二四） 始めて隋に留學生派遣（一二六七）
皇極（一三〇二—一三〇五） 孝德（一三〇五—一三二四） 大化 白雉 齊明（一三五—一三五一） 天智（一三五二—一三七二） 弘文（一三七三—一三七四） 天武（一三七五—一三八六） 朱鳥	額田女王（歌） 鏡女王（歌） 大津皇子（詩）？—一三四 柿本人麿（歌）？—一三四六		大化の新政（一三〇六） 八省百官を置く（一三〇九）
持統（一三八七—一三九七） 文武（一三九七—一四〇七） 大寶 慶雲 元明（一四〇八—一四一五） 和銅 元正（一四一六—一四二四） 靈龜 養老 聖武（一四二五—一四四九） 神龜 天平	太安麻呂（學）？—一三八三 山邊赤人（歌） 大伴旅人（歌）？—一三九一 山上憶良（歌）一三二〇—一三九三 舍人親王（學）一三三六—一三九五 橘諸兄（歌）一三八一—一四一七 吉備眞備（學）一三九三—一四三五 淡海三船（學）一三八二—一四四五 大伴家持（歌）？—一四四五	古事記（一三七二） 日本書紀（一三八〇） 出雲風土記（一三九三） 〔神樂歌〕 〔催馬樂〕 萬葉集 懷風藻（一四一二） 續日本紀（一四三七）	律令を撰ぶ（一三六二） 奈良遷都（一三七〇） 諸國に風土記を作らしむ（一三七三） 國毎に國分寺を建つ（一四〇一） 平安遷都（一四四四）
孝謙（一四四九—一四五八） 天平感寶・天平勝寶 天平寶字 淳仁（一四五八—一四六四） 稱德（一四六四—一四七〇） 天平神護・神護景雲 光仁（一四七〇—一四八一） 寶龜 桓武（一四八一—一四九六） 天應 延曆	釋最澄（學）一四二八—一四八三 釋空海（學）一四三三—一四五五	古語拾遺（一四六八） 文藝秀麗集（一四七八） 令義解（一四九三） 日本後紀（一五〇二）	藤原冬嗣の勸學院開設（一四八一）
平城（一四九六—一四九九） 大同 嵯峨（一四九九—一五〇八） 弘仁 淳和（一五〇八—一五一九） 天長 仁明（一五一九—一五三〇） 承和 嘉祥	小野篁（學）一四六二—一五一三		
文德（一五三〇—一五五八） 仁壽・齊衡・天安 清和（一五五八—一五七六） 貞觀 陽成（一五七六—一五四八）	都良香（學）一五〇四—一五九九	續日本後紀（一五二九） 文德實錄（一五七九）	

紀皇 500 1000 1200 1300 1350 1400 1450 1500

紀四 前161 340 540 640 690 740 790 840

在原業平（歌）一四八五—一五〇〇

竹取物語

片假名・平假名

元慶

光仁	天平神護・神護景雲 (一四三〇—一四四一)	吉備眞備 (學) 一三九五—一四三五	續日本紀 (一四三七)		平安貧都 (一四四四)
桓武	寶龜 (一四四一—一四六六) 天應 延曆	淡海三船 (學) 一三八二—一四四五 大伴家持 (歌) ?—一四四五			
平城	大同 (一四六六—一四六九)	釋最澄 (學) 一四四八—一四八二	古語拾遺 (一四六八)		藤原冬嗣の勸學院開設 (一四八一)
嵯峨	弘仁 (一四六九—一四八三)	其岑安世 (學) 一四四六—一四九〇	文藝秀麗集 (一四七八)		
淳和	天長 (一四八三—一四九三)	釋空海 (學) 一四三三—一四九五	令義解 (一四九三) 日本後紀 (一五〇二)		
仁明	承和 嘉祥 (一四九三—一五一〇)	小野篁 (學) 一四六二—一五一二			
文德	仁壽・齊衡・天安 (一五一〇—一五一八)	都良香 (學) 一四〇四—一五九九	續日本後紀 (一五一九) 文德實錄 (一五九九)		
清和	貞觀 (一五一八—一五六八)				
陽成	(一五六八—一六四四)				
	1500				1450

光孝	元慶 (一四四四—一五四七)	在原業平 (歌) 一四八五—一五〇〇	竹取物語 伊勢物語		片假名・平假名 遣唐使を廢す (一四四七)
宇多	仁和 (一四四七—一五五七)	小野小町 (歌) 僧正遍昭 (歌)	類聚國史 (一五五二) 新撰字鏡 (一五五二)		
	寬平	在原行平 (歌) 一四七九—一五五三			
醍醐	(一五五七—一六二〇) 昌泰 延喜 延長	菅原道眞 (學) 一四〇三—一五六三 紀友則 (歌) 一四〇五—一五六五 凡河內躬恒 (歌) 一四一九—一五六七 紀貫之 (歌) 一四〇五—一五七二 坂上是則 (歌) ?—一五八〇 藤原兼輔 (歌) 一四三七—一五八三 伊勢 (歌) ?—一五九九	三代實錄 (一五六一) 古今和歌集 (一五六五) 延喜式 (一五八七) 堤中納言物語 土佐日記 (一五九四)		
朱雀	(一五九〇—一六〇六) 承平 天慶				
村上	(一六〇六—一六二七) 天曆・天德 應和・康保	紀貫之 (歌) 一四〇四—一六〇六 在原元方 (歌) ?—一六二三 壬生忠岑 (歌) 一四五八—一六二五 源順 (歌) 一四五二—一六四二	宇津保物語 枕册子 落窪物語	〔歌合〕 後撰和歌集 (一六一一) 和名類聚抄 蜻蛉日記 (一六三四)	藤原道長關白となる (一六五五)
冷泉	(一六二七—一六二九) 安和				
圓融	(一六二九—一六四四) 天祿・天延・貞元 天元・永觀				
花山	(一六四四—一六四六) 寬和				
一條	(一六四六—一六七一) 永延・永祚・正曆 長德・長保・寬弘	兼明親王 (學) 一四七七—一六四七 清原元輔 (歌) 一四五八—一六四〇 大中臣能宣 (歌) 一四八二—一六五一			
三條	(一六七一—一六七六) 長和	具平親王 (學) 一六二四—一六六九 曾根好忠 (歌) 大江匡衡 (學) 一六二三—一六七二	大和物語 源氏物語		道長薨ず (一六八七)
後一條	(一六七六—一六六六) 寬仁・治安 萬壽・長元	清少納言 (文) 紫式部 (文) 藤原公任 (歌) 一六六四—一七〇一	紫式部日記 更級日記	和漢朗詠集 和泉式部日記 榮華物語 濱松中納言物語 狹衣物語 大鏡 今昔物語	前九年の役終る (一七三) 記錄所の設置 (一七二九)
後朱雀	(一六六六—一七〇五) 長曆・長久・寬德				
後冷泉	(一七〇五—一七一八) 永承・天喜 康平・治曆	和泉式部 (歌) 赤染衛門 (歌) 菅原孝標女 (文) 大貳三位 (文) 源隆國 (文) 一六六四—一七二七		後拾遺集 (一七四六)	後三年の役終る (一七四七)
後三條	(一七二三—一七四六) 延久				
白河	承保・承曆 永保・應德				
堀河	(一七四六—一七六七) 寬治・嘉保・永長・承德・康和・長治・嘉承				
鳥羽	(一七六七—一七八三) 天仁・天永・永久 元永・保安	大江匡房 (學) 一七〇二—一七七一 源俊賴 (歌) 藤原基俊 (歌) 一七一五—		金葉集 (一七六七)	
崇德	(一七八三—一八〇一) 天治・大治・天承 長承・保延・永治				
近衛	(一八〇一—一八五五) 康治・天養・久安 仁平・久壽	藤原顯輔 (歌) ?—一八一五		詞花集 (一八〇四)	
後白河	(一八五五—一八八八) 保元	藤原清輔 (歌) 一七六四—一八六七 源頼政 (歌) 一七六五—一八四〇 平忠度 (歌) 一八〇四—一八四四 西行法師 (歌) 一七七八—一八八〇		袋草子	
二條	(一八八八—一八五五) 平治・永曆・應保 長寬・永萬			取替ばや物語	保元の亂 (一八一六)
六條	(一八五五—一八六八) 仁安				平治の亂 (一八一九)
高倉	(一八六八—一八八〇) 嘉應・承安 安元・治承				源空の淨土宗 (一八三五)
安德	(一八八〇—一八四五) 養和・壽永				平氏滅亡 (一八四五)
後鳥羽	(一八四五—一八五八) 文治 建久	千載集 (一八四七) 〔歌論〕			源頼朝鎌倉幕府創業 (一八四六)
土御門	(一八五八—一八七〇) 建仁・元久	山家集 新古今集 (一八六七)			榮西の臨濟宗 (一八五二)
	1850	1800	1750	1700	1650	1600	1550	1500	1450
	1190	1140	1090	1040	990	940	890	840	790

天治・大治・天承・長承・保延・永治	1800	藤原 基俊	（歌）	一七一五—
近衛	（一八〇一—一八一五）			
康治・天養・久安・仁平・久壽		藤原 顯輔	（歌）	?—一八一五
後白河	（一八一五—一八一八）			
保元				
二條	（一八一八—一八二五）			
平治・永暦・應保・長寛・永萬				
六條	（一八二五—一八二八）			
仁安				
高倉	（一八二八—一八四〇）	藤原 清輔	（歌）	一七六四—一八三七
嘉應・承安・安元・治承		源 頼政	（歌）	一七六五—一八四〇
安德	（一八四〇—一八四五）			
養和・壽永		平 忠度	（歌）	一八〇四—一八四四
後鳥羽	（一八四五—一八五八）	西行	法師	（歌） 一七七八—一八五〇
文治・建久				
土御門	（一八五八—一八七〇）	藤原 俊成	（歌）	一七七四—一八六四
正治・建仁・元久・建永・承元		藤原 良經	（歌）	一八〇八—一八六六
順德	（一八七〇—一八八一）	鴨 長明	（文）	一八一三—一八六六
建暦・建保・承久		源 實朝	（歌）	一八一三—一八六九
仲恭	（一八八一—一八八一）	式子内親王	（歌）	一八一五—一八七九
後堀河	（一八八一—一八九二）	慈鎮 和尚	（歌）	一八一五—一八八五
貞應・元仁・嘉祿・安貞・寛喜・貞永		信濃前司行家	（學）	
四條	（一八九二—一九〇二）	葉室 時長	（學）	
天福・文暦・嘉禎・暦仁・延應・仁治		藤原 家隆	（歌）	一八一八—一八九七
後嵯峨	（一九〇三—一九〇六）	藤原 定家	（歌）	一八三三—一九〇一
寛元				
後深草	（一九〇六—一九一九）			
寶治・建長				
1900		1850		

龜山	康元・正嘉・正元・文應・弘長・文永	仙覺	律師	（歌） 一八六一—一九三四
	（一九一九—一九三四）	藤原 爲家	（歌）	一八〇八—一八六六
後宇多	（一九三四—一九四七）	北畠 親房	（學）	一八七七—一九三五
建治・弘安		阿佛尼	（歌）	?—一九四三
伏見	（一九四七—一九五八）			
正應・永仁				
後伏見	（一九五八—一九六一）	飛鳥井雅有	（歌）	一九〇一—一九六一
正安				
後二條	（一九六一—一九六八）	藤原 爲相	（歌）	一九二三—一九八八
乾元・嘉元・德治・延慶				
花園	（一九六八—一九七八）			
應長・正和・文保				
後醍醐	（一九七八—一九九九）	頓阿	法師	（歌） 一九四九—二〇三三
元應・元亨・正中・嘉暦・元德・元弘		宗良	親王	（歌） 一九七二—二〇四五
建武・延元		二條 良基	（學）	一九八〇—二〇四八
後村上	（一九九九—二〇一八）			
興國・正平				
長慶	（二〇一八—二〇四三）	今川 貞世	（歌）	一九八五—二〇八〇
建德・文中・天授・弘和				
後龜山	（二〇四三—二〇五三）	觀世 元清	（謠）	二〇一三—二一一五
元中		僧 正徹	（歌）	二〇四〇—二一一八
後小松	（二〇五三—二〇七二）			
應永				
稱光	（二〇七二—二〇八八）	心敬	僧都	（連歌） 二〇六七—二一三五
正長				
後花園	（二〇八八—二一三四）	飯尾 宗祇	（連歌）	二〇八一—二一六二
永享・嘉吉・文安・寶德・享德・康正		太田 道灌	（歌）	二〇九二—二一四六
長祿・寛正				
後土御門	（二一三四—二一六〇）	牡丹花肖柏	（連歌）	二一〇二—二一八七
文正・應仁・文明・長享・延德・明應		三條西實隆	（歌）	二一五五—二一九七
後柏原	（二一六〇—二一八六）			
文龜・永正・大永				
後奈良	（二一八六—二一二七）	荒木田守武	（俳）	二一三三—二二〇九
享祿・天文・弘治		山崎 宗鑑	（俳）	二一三五—二二二三
正親町	（二一二七—二二四六）			
永祿・元龜・天正				
後陽成	（二二四六—二二七一）			
文祿・慶長				
2250	2200	2150	2100	2050

天治・大治・天承・長承・保延・永治	1800	詞花集	（一八〇四）	
近衛	（一八〇一—一八一五）			
後白河	（一八一五—一八一八）	取替ばや物語		
二條	（一八一八—一八二五）			
六條	（一八二五—一八二八）			
高倉	（一八二八—一八四〇）	袋草子		
安德	（一八四〇—一八四五）			
後鳥羽	（一八四五—一八五八）	千載集	（一八四七）	
〔歌論〕				
土御門	（一八五八—一八七〇）	山家集		
後堀河	（一八八一—一八九二）	新古今集	（一八六五）	
水鏡・今鏡・金槐集				
四條	（一八九二—一九〇二）	住吉物語・方丈記		
保元物語・平治物語				
後嵯峨	（一九〇三—一九〇六）	平家物語		
源平盛衰記				
後深草	（一九〇六—一九一九）	海道記	（一八八三）	
新勅撰集	（一八九二）			
續後撰集	（一九一一）	新勅撰集	（一八九四）	
十訓抄	（一九一三）	眞永式目	（一八九二）	
宇治拾遺物語		今昔物語		
東關紀行	（一九〇三）	脉歌大概		
龜山	康元・正嘉・正元・文應・弘長・文永	古今著聞集	（一九一四）	
	（一九一九—一九三四）	續古今集	（一九三五）	
後宇多	（一九三四—一九四七）	吾妻鏡	（一九三七）	
建治・弘安		萬葉集仙覺抄	（一九三九）	
伏見	（一九四七—一九五八）	續拾遺集	（一九三八）	
正應・永仁		十六夜日記	（一九四〇）	
後伏見	（一九五八—一九六一）	中務内侍日記		
正安		新後撰集	（一九六三）	
後二條	（一九六一—一九六八）	玉葉集	（一九七三）	
乾元・嘉元・德治・延慶				
花園	（一九六八—一九七八）	續千載集	（一九八〇）	
應長・正和・文保		徒然草		
後醍醐	（一九七八—一九九九）	建武式目	（一九九六）	
元應・元亨・正中・嘉暦・元德・元弘		萬葉集仙覺抄	（一九二九）	
建武・延元		神皇正統記	（一九九九）	
後村上	（一九九九—二〇一八）	風雅集	（二〇〇六）	
興國・正平				
長慶	（二〇一八—二〇四三）	〔連歌〕		
建德・文中・天授・弘和		菟玖波集		
後龜山	（二〇四三—二〇五三）	連歌新式		
元中		新千載集		
後小松	（二〇五三—二〇七二）	新葉集		
應永				
稱光	（二〇七二—二〇八八）	增鏡		
正長		太平記		
後花園	（二〇八八—二一三四）	〔謠曲〕		
永享・嘉吉・文安・寶德・享德・康正		〔狂言〕		
長祿・寛正		曾我物語		
後土御門	（二一三四—二一六〇）	義經記		
文正・應仁・文明・長享・延德・明應				
後柏原	（二一六〇—二一八六）	花鳥餘情	（二一三二）	
文龜・永正・大永		新菟玖波集	（二一五五）	
後奈良	（二一八六—二一二七）			
享祿・天文・弘治		〔俳諧〕		
正親町	（二一二七—二二四六）	犬筑波集	（二一七四）	
永祿・元龜・天正		淨瑠璃姫物語		
後陽成	（二二四六—二二七一）	御伽草子		
文祿・慶長				
1900		1850		1800

龜山	康元・正嘉・正元・文應・弘長・文永	金澤文庫		
	（一九一九—一九三四）	元寇弘安の役	（一九四一）	
後宇多	（一九三四—一九四七）			
建治・弘安				
伏見	（一九四七—一九五八）			
正應・永仁				
後伏見	（一九五八—一九六一）	足利義滿將軍となる	（一四〇三）	
正安				
後二條	（一九六一—一九六八）	天皇京都遷幸	（一四五二）	
乾元・嘉元・德治・延慶				
花園	（一九六八—一九七八）			
應長・正和・文保				
後醍醐	（一九七八—一九九九）	足利義滿將軍となる	（一四〇九）	
元應・元亨・正中・嘉暦・元德・元弘				
建武・延元		足利尊氏擅に幕府を開く	（一九九八）	
後村上	（一九九九—二〇一八）			
興國・正平				
長慶	（二〇一八—二〇四三）			
建德・文中・天授・弘和				
後龜山	（二〇四三—二〇五三）			
元中				
後小松	（二〇五三—二〇七二）	金閣寺建立	（一四〇七）	
應永				
稱光	（二〇七二—二〇八八）			
正長				
後花園	（二〇八八—二一三四）	足利義政將軍となる	（一四〇九）	
永享・嘉吉・文安・寶德・享德・康正				
長祿・寛正		太田道灌江戸城を築く	（一四一七）	
後土御門	（二一三四—二一六〇）			
文正・應仁・文明・長享・延德・明應				
後柏原	（二一六〇—二一八六）	東常縁古今傳授を宗祇に傳ふ	（一四三一）	
文龜・永正・大永				
後奈良	（二一八六—二一二七）	應仁の亂紛る	（一四三七）	
享祿・天文・弘治				
正親町	（二一二七—二二四六）	銀閣寺建立	（一四四二）	
永祿・元龜・天正				
後陽成	（二二四六—二二七一）			
文祿・慶長				
1590	1540	1490	1440	1390

龜山	康元・正嘉・正元・文應・弘長・文永	建武中興	（一九四四）	
	（一九一九—一九三四）	天皇吉野遷幸	（一九九六）	
後宇多	（一九三四—一九四七）			
建治・弘安				
伏見	（一九四七—一九五八）	足利尊氏擅に幕府を開く	（一九九八）	
正應・永仁				
後伏見	（一九五八—一九六一）	足利義滿將軍となる	（一四〇三）	
正安				
後二條	（一九六一—一九六八）	天皇京都遷幸	（一四五二）	
乾元・嘉元・德治・延慶				
花園	（一九六八—一九七八）			
應長・正和・文保				
後醍醐	（一九七八—一九九九）	足利義政將軍となる	（一四〇九）	
元應・元亨・正中・嘉暦・元德・元弘				
建武・延元		太田道灌江戸城を築く	（一四一七）	
後村上	（一九九九—二〇一八）			
興國・正平				
長慶	（二〇一八—二〇四三）			
建德・文中・天授・弘和				
後龜山	（二〇四三—二〇五三）			
元中				
後小松	（二〇五三—二〇七二）	金閣寺建立	（一四〇七）	
應永				
稱光	（二〇七二—二〇八八）			
正長				
後花園	（二〇八八—二一三四）	足利義政將軍となる	（一四〇九）	
永享・嘉吉・文安・寶德・享德・康正				
長祿・寛正		太田道灌江戸城を築く	（一四一七）	
後土御門	（二一三四—二一六〇）			
文正・應仁・文明・長享・延德・明應				
後柏原	（二一六〇—二一八六）	東常縁古今傳授を宗祇に傳ふ	（一四三一）	
文龜・永正・大永				
後奈良	（二一八六—二一二七）	應仁の亂紛る	（一四三七）	
享祿・天文・弘治				
正親町	（二一二七—二二四六）	銀閣寺建立	（一四四二）	
永祿・元龜・天正				
後陽成	（二二四六—二二七一）			
文祿・慶長				
		ポルトガル人來航	（一五〇五）	
		豐臣秀吉關白となる	（一五四五）	
		德川家康江戸幕府創業	（一五六三）	

大正十年十月廿一日印刷
大正十年十一月廿四日發行
昭和四年二月十五日訂正六版印刷
昭和九年十一月三十日訂正七版發行
昭和九年十二月三日訂正七版發行
昭和十年十月十日訂正八版印刷
昭和十年十月十六日訂正八版發行
昭和十二年七月廿三日訂正九版印刷
昭和十二年七月廿六日訂正九版發行
昭和十三年一月廿五日訂正十版印刷
昭和十三年一月廿九日訂正十版發行

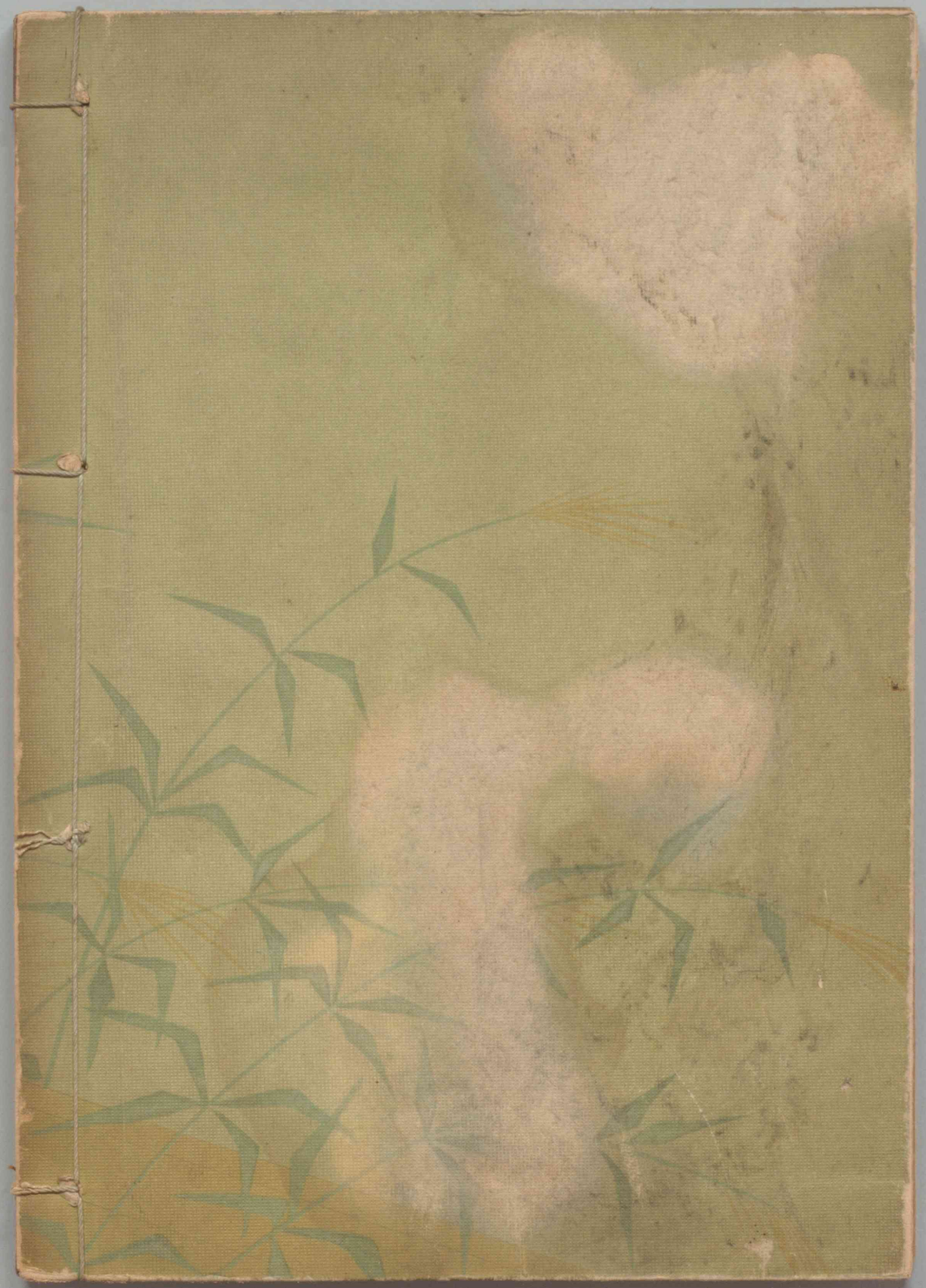
不許複製

新制中等新國文　全十册
定價各册　金五十八錢

編纂者　故三矢重松
右相續者　三矢夏井
補訂者　鳥野幸次
補訂者　折口信夫

東京市神田區美土代町十八番地
發行兼印刷者　株式會社　文學社
代表者　小林竹雄

東京市本郷區弓砂町三十六番地
印刷所　日東印刷株式會社

發兌　東京市神田區美土代町十八番地
電話神田三五一番
振替口座東京三八七八番
株式會社　文學社

關西一手販賣所
大阪市西區靱北通り二丁目
電話土佐堀一五二三番
振替貯金口座大阪七四三番
株式會社　盛文館